内に籠し、一根の毫毛を拔て、變じて捉金繩とし、入て金角にあたふ。金角是を假物とも知らず、請取て收む。行者は急に身を轉じて門外に走り出で、本相を顯はし、高く呼はつて曰く、「者行孫きたりたり、潑怪とく出よ」小怪おどろき、急に走り入て斯と報じければ、金角大いに訝り、「孫行者を拿へ、柱に綑おきたるに、又者行孫といふ者きたれるは如何」銀角が曰く、「長兄放心し給ふな。我這葫蘆をもつて他を裝きたり候はん」とて、那紫金紅葫蘆を携へ、走り出て問て曰く、「汝は是何者ぞ」行者が曰く、「我は是孫行者が舍弟者行孫なり。汝我が家兄を拿たり。故に仇を報ぜん爲きたれり」銀角が曰く、「汝きたつて仇を報ず。我汝と戰ふ事能はじ。我只汝を一聲呼んに、汝よく應んや」行者が曰く、「我何ぞ答ざらん」銀角悅び、空中へ跳上り、葫蘆を把て底兒朝天口兒朝地、「者行孫」とよぶ。行者敢て應へず。銀角二聲よぶ。行者心中に想ふやう、我眞の名は孫行者なり。今者行孫は鬼名なれば、他に應ずるとも何の妨があらん、と思惟し、忍不住て一聲應ずれば、忽ち吸れて葫蘆の中へ裝入れたり。銀角得たりと貽上帖兒ぬ。此寶、元來名字の眞假に不管、およそ答ふる心有ても就ち裝入る不測の寶貝なり。時に行者葫蘆の裡に裝入られ、眼をひらき見るに、烏黑にして物を見ず。されども大膽不敵の行者、些も恐れず、心中に思ふやう、我五百年前、老君我を八卦爐中に煉成ども、我が銅頭、鐵

背、火目、金睛、遂に免るゝ事を得たり。他が此葫蘆、一時三剋よく凡人を化して血水とすとも、我を化する事能はじ。他が卦を開くを待て走去ん」と心を定めけり。時に銀角葫蘆を携へて洞中へかへり、金角に謁し、「小弟既に者行孫を葫蘆の中へ裝きたり候」と云ふ。金角大いに悅び、「賢弟手も動さず拿へきたる勇ましさよ。早く他を化し盡して血水となし、揭開帖兒」銀角領掌し、捻訣念咒して腰骨まで化し了り、「早速腰骨まで化し候」といふにぞ、金角喜び、「今は開帖て見よ」と令す。行者是を聞きて、就ち毫毛を拔て半截身となし、眞の身は變じて蟭蟟虫となり、葫蘆の口もとにとまり、銀角が封を開て見る時、行者早く飛出て、又身を變じ小怪となり、傍に座す。金角葫蘆を開き見るに半截身あり。依てもとの如く貼上て曰く、「既に半截身に成りたり。とてもの事に悉く化盡して啜らん」とて葫蘆を小怪にもたしめ、兄弟悅びの飲宴をなす。豈知らんや此小怪は是孫行者なりとは。行者は葫蘆を捧居けるが、隙を窺ひ毫毛を拔き、變じて葫蘆となし、誠の葫蘆は懷中す。金角是をしらず、稍醉を盡してかの假葫蘆を把て席上に直し、猶銀角と談話す。行者は潛に舌を吐して門外へ走り出でけり。

○外道施ㇾ威欺ニ正性一　心猿獲ㇾ寶伏ニ邪魔一

却説行者は、寶貝を騙し搶て門外に溜出で、本相を現し、聲を勵して、「潑怪出よ」と叫ぶ。小怪おどろき立出て、「汝は是何人ぞ」と問ふ。行者が曰く、「我は是前に老怪に捉へられたる孫行者、者行孫等が弟、行者孫是なり」小怪此旨を魔頭に報ず。金角大いに駭き、「先に孫行者を捉へ、再び者行孫を葫蘆に裝たるに、今又行者孫といふ者きたる。賢弟此たびは奈何なる謀を以てか敵に抵ん」銀角が曰く、「長兄怒し給ふな。我が此葫蘆、よく千人をば裝る、何ぞ行者孫を恐れん。我出て一發に裝きたらん」と大言はき、假葫蘆をとつて走り出で、高く呼で曰く、「汝行者孫喧しく吆喝事を止よ。我と汝と相打つに及ばず。但我汝を一聲呼ん。汝敢て應へんや否や」行者笑つて曰く、「汝我を呼ば何ぞ應へざらん。我又汝を呼ばよく應んや」銀角嘲わらひ、我が汝を呼には、一個の葫蘆あり、もつて人を裝べし。汝又我を呼で何にかする」行者が曰く、「我も一個の葫蘆あり、先試に汝我を呼べ」銀角大いに悅び身を跳して空中に飛上り、假葫蘆をとつて一聲「行者孫」と呼ぶ。行者是をきゝて、連聲に八九聲應ふ。されども敢て裝る事能はず。銀角仰天して、忽ち雲中より大地へ墜ち、脚を跌て曰く、「天世情を變ず。恐らくは汝が葫蘆も敢て裝る事不能」行者が曰く、「汝先葫蘆を收よ。我輪到なれば汝を呼ん」とて急に觔斗雲に跳り上り、葫蘆を以て底兒朝天口兒朝地、一聲高く「銀角大王」と呼。銀角聲に應じて一聲應るに、忽ち裝れて葫蘆の裡へ吸入らる。行者早く貼上して、急々如律令と帖子、雲端を下り、逕に蓮花洞口に到り、葫蘆を揮廻し、勇みに勇みて响で曰く、「我一課して銀角を拿たり汝等早く師父をわたして罪を謝せずんば鏖にせん」小怪大いに恐怖して遽しく金角が前にいたり、「大王禍ひ既にいたれり。那行者孫、銀角大王を葫蘆の内に裝きたり候」と報ず。金角聞もあへず、地に跌倒、聲を放つて大に哭ければ、洞裡の群妖も一齊に痛哭く。然るに又小怪蒐きたり、「行者孫已に洞門を打破りて進みきたり候」といふ。金角大いに駭き、急に芭蕉扇をとつて後に挿み、七星劍を提て跳出で、「汝潑猴、我弟を害す。誓て汝が肉を以て弟の靈を祭ずんば不止」行者嘲わらひ、「此潑怪、むだ言を止て早く我師父を返せ。然らば汝が狗命を饒さん」金角大いに怒り、七星劍を振て切てかゝる。行者金箍棒を提て戰ふ事二十餘回、いまだ勝負を分たざるに、數百の群妖、金角を扶けて八方より行者に切てかゝる。行者少しも恐れず、身外身の法をつかひ、一把の毛を拔とり、口に含で吹出せば、无數行者となり、群る小怪を打散す、こと、風の雲を拂ふが如し。金角是を見て、急に芭蕉扇を取て南方丙丁の位に向て搧ば、只

揮火扇金角焼悟空
金角

悟空

見地上一面の火光となり、焰々と焰上る。元來此扇、平地を一度搧ば忽ち火を出しきたる。是天上の火にして、一點の靈光火なり。金角機に乘じて七八丁搧げば、烈々たる焰飛發り、大地を焦す。行者此惡火に燒立られて大いに駭き、急に毫毛をとつて身に收め、只一條の毛を以て假に我像となして火中におき、本身は觔斗雲に跳駕り、逕に蓮花洞に至り、鐵棒を廻して小怪を殘らず擊殺し、後面に走り入て三藏師徒を尋る處に、机上に羊脂玉淨瓶の有るを見て、急にとつて袖中に入れ、此時また金角洞中へかへりきたれば、行者師父を尋ぬる隙なく、身を變じて小怪となり、金角を見て胸を打て痛哭し、「大王回り給ふ事何ぞ遲き。前に行者孫きたりて、大小の群妖こと〴〵く他が爲に打殺されたり」と云ふ。金角ほとりを見れば、血流て河のごとく、屍地に充滿たり。金角聲を放て大いに哭き、大地に跌倒る。行者是を扶て洞の裡へ入らしむれば、金角大に身體疲れ、石案上に伏て昏々と眠けり。行者傍に在りて、他が呼々て熟睡するを伺ひ、暗に芭蕉扇を拔とり、身を返して逃れ走る。金角足音に驚き、睡を覺し、行者が芭蕉扇を搶去を見て大いに怒り、劍をとりて追きたる。行者も是を見て、扇子を腰に挿み、鐵棒を回して金角と戰ふ事三十餘回、金角抵敵する事不能、西南をさして逃走り、壓龍洞へ遁れ入る。行者長追せず、頭を回して蓮花洞へかへり、終に師父沙和尚を梁の上より解下し、八戒を池水の中より扶上て、悅合ふ事限なく、素齋を調へ、師徒四人飽まで食ひ、其夜は洞裡に安臥しけり。

斯て金角は、壓龍洞に在て、打殘されし小怪を呼集へ、再度妖兵を調て蓮花洞へ寄きたる。行者斯と聞きて、沙僧に師父を守らせ、自身は八戒と俱に門外に出て敵を迎ふ。金角が先駈狐阿七といふ怪、陣頭にをどり出で、高聲に罵て曰く、「汝此潑猴、多く吾金角大王に无禮す。早く頸を伸て死に就よ」八戒かれが爲體を見るに、玉面長髯、鋼眉刀耳にて、手に方天戟をとれり。八戒一言の問答にも及ばず、鈀を擧げ、一聲叫で擊てかゝる。兩人戰ふ事十四五回、いまだ雌雄を分たざるに、金角群妖を下知して、一聲に擊て掛らしむ。行者も金箍棒を揮て八戒を扶け、魔軍に相當る。沙妖淨洞中より是を見て、三藏を深くかくしおき、寶杖を回して横合より群妖を打退くるにぞ、魔軍沙和尚に不意をうたれ、利を失ひてにげ走れば、孤阿七も敵を振捨て引退くを、八戒追かけて鈀に引かけ、引倒して打殺し、よく〳〵見るに、是一頭の狐狸にぞ有ける。金角遙に孤阿七が討れしを見て、急にとつて返し、八戒に打てかゝる。沙和尚もまた寶杖を揚げて八戒を扶け、一往一來して挑み戰ふ。此時行者は雲上に跳上り、淨瓶を解下して、一聲「金角大王」と呼ぶ。金角是を我小怪の呼ぶぞと心得、頸を回して二聲應れば、忽

ち吸れて淨瓶の内にもり入れられぬ。行者急に貼上を帖子、他がとり落したる七星劍を拾ひとり、邪魔を拂ひ盡して洞中へ引返し、三藏に事の始末を語りければ、大によろこび其功を賞し、早齋を吃して早く西天に行んと立上る。時に空中に人有て、「孫行者我が寶貝を還せ」といふ。行者聞て、空中へをどり上つて是を見るに、是李老君なり。行者其故をとふ。老君が曰く、「那葫蘆は我が仙丹を盛の寶貝、淨瓶は我が水を裝の寶貝、寶劍は廣を煉寶貝、扇は火を搧ぐの寶貝、提金繩は我勒袍帶なり。那兩怪は、一個の金爐童子、一個の銀爐童子なり。他我が貝を偸み、下界へ逃走し、所在を知ざりしに、不期も今汝に拿られたり」行者叱て曰く、「汝這老官兒、縱に家童を放て吾が師父に害をなさせ、經をとるの邪をなす。罪方に汝にあり」老君が曰く、「是事我が預る處にあらず。汝が師徒魔ありて難に逢ふなり。此難に逢ずんば正果にいたる事難し」行者聞きて初て了然、五件の寶貝を老君に返しければ、老君葫蘆、淨瓶の口を開きて、兩股の仙氣を出し、一指を入れ化して二童子となし、行者に別れて天宮へぞかへりける。

二編　卷之三

○心猿正處諸緣伏　劈破傍門見月明

却說孫行者は雲頭を按落り、老君の事を備に師父に語りければ、三藏是を感歎し、夫より師徒進て行く事數日にして、一日天色將に晚んとするに、山の凹なる裡に樓臺疊々、殿閣重々たるを見る。却て是一座の寺院なり。三藏顧みて曰く、「徒弟們は玆に待て。我院内にいたりて宿を借んを鐫て、勅賜寶林寺とあり。三藏馬を下り、進んで山門に至り見るに、額に五個の大字と、逕に山門に入て見るに、兩邊に一對の金剛神を坐ゑたり。二層門に到り見れば、四天王の像を排列す。大雄寶殿にいたつて、三藏合掌して是を拜し、佛臺を廻りて後面に到り見るに、觀音の像あり。三藏又是を拜す。然るに傍門の裡より一個の道人出きたりぬ。三藏則ち道人に向ひ、「貧道は是東土唐の使、西天にいたり佛を拜し經を求めんとす。今寶刹にいたり天晚に及べり。ねがはくは一宿を許し給へ」道人が曰く、「我は僧官にあらず。裡に老師あり、入て斯と告ん。師父此所に待ち給へ」とて入て僧官に報じければ、老師すなはち門を開いて迎へしが、

三藏を見て大いに不興し、道人を罵つて曰く、「汝しらずや、我は是僧官なり。只士夫降香あ
る時は、我出迎て接す。這等の遊和尚の、天晩て是非なく宿を乞ば、前廊の下に臥しむるとも
事足れり。何ぞことぐしく我に報ずるや」とて身を轉して内へ入ぬ。三藏是を聞て雙眼に泪
を流して長歎し、「我前世幾千の惡業をなせしにや、今生常に不良人に遇ふ事よ」と身を悔み、
愁然として歸りいづる。行者師父が滿眼愁容ひたるを見て問うて曰く、「寺内の和尚何事を罵り
候ひし」三藏が曰く、「此寺不便なり。別里に行て宿を求むべし」行者が曰く、「豈此理あらん。
我進入りて宿を求めん」と鐵棒をとつて逕に殿上にいたり見るに、道人佛前に挿香て居たり。
行者厲聲に一聲呼はれば、道人諕了して跌倒れ大に戰慄て、滾々方丈へ蒐入り、老師に向ひ、
「外面に又一人の和尚きたれり」といふ。僧官が曰く、「這獸子、再び來て何をかいふや」道人
が曰く「這個の和尚は那の僧と一般からず、滿面毛にして環眼、さながら雷公のごとし。手に
長き鐵棒を把て、狼々的に人を打んとする勢なり」僧官是を聞て門を開き見るに、早行者進
みきたる。其面誠に醜陋。和尚慌て方丈の門を鎖しけるに、行者早く一脚を上げて堅門を踏破
り、叫んで曰く。早く一千間を打掃し、老孫に借與へよ」僧官房裡に躱れ、窓より覗いて曰く、
「這荒山、方便宜しからず。別所に行きて宿を求め給へ」行者が曰く、「汝等方便あしくば、手

道具を搬出して去れ」僧官が曰く、「我寺中の僧四五百人。那の裡へか到りさらん、被窩のみこ
ても置處有るまじ」行者が曰く、「汝立出ずんば一個出きたれ。此鐵棒を試し見るべし」和尚嘲
わらひ、「我決して不出。汝誰を呼てか試し見るや」行者大いに腹を立て、「罷等、試して見す
べし」と頭を回らして見るに、側に大なる石獅あり。頓て走り寄、棍を上げて兵々一下ば、忽
ち粉碎となる。僧官是を見て膽を消し、骨軟觔麻れて聲を上げ、「大德手を止め給へ。宿を借し
參らせん」行者が曰く、「先に我師きたつて宿を求るに、汝罵て借ず。今吾が手段を見て借んと
いふ。何ぞかく薄情なる。今汝を那石獅子のごとくなすべけれども、吾が師父西天に赴き經を
とるの旅路ゆゑ、大慈悲心をもて汝を打ず。汝を始め寺内の僧徒、殘らず長衣を著て、慇懃に
我が師父を迎へきたれ。さもなくば一人も殘らず獅子の如く粉碎になさん」と威しければ、和尚
大いに恐れ、「心得候」とて、那道人に云々分付けるに、道人行者が猛威に恐れ、後の狗洞裡
より拔出でて本堂に上り、鼓を打ち鐘を敲せば、滿山の衆僧一齊に集りきたる。老師一々に分
付け、各衣服を改め、行者を先に立てて、山門の外に出て跪下き、中にも僧官頭を叩いて罪を
謝し、「願はくは唐老爺父方丈に入て按宿し給へ」と乞ふ。三藏心悅ばずと雖も、さのみはとて
徒弟と俱に方丈にいたれば、衆僧齋を供じて管待しけり。三藏師弟吃し罷みて、請て禪堂にい

たり座禪し、其後衆僧を退しめ、三藏小門を逍遙するに、月いと淸く皎潔なれば、悟空を呼で俱に月を賞し、三藏懷を興して一詩を賦す。其詩に曰く、

皓魄當空寶鏡懸　山河搖影十分全　瓊樓玉宇淸光滿
氷鑑銀盤爽氣旋　處々牕軒吟白雪　家々院宇弄朱絃
今宵靜玩來山寺　何日相同返故園

行者聞きをはりて曰く、「師父、月色光華を見て心に故里をおもひ給へども、月家の意を知り給はず。卽ち天は法象の規繩なり。月三十日に至り、陽魂の金散じ盡き、陰魄の水輪に盈つ。故に純黑にして光なし。卽ち是を晦といふ。此時日と相交る。晦朔兩日の間に在て、陽光を感じて孕み、初三日にいたり一陽現ず、初八日に二陽生じ、魄中魂半なり。故に上元と云ふ。十五日に三陽備足す。是を以て團圓なり。故に望と云ふ。十六日に一陰生じ、二十二日に二陰生ず。魂中魄半なり。故に下弦と云ふ。三十日に三陰備足し、又晦日あたる。是先天採煉の意なり。我等能溫養二八の功をなす。故園返つて亦やすし。豈聞ざらんや。

前弦之後後弦前　藥味平々氣象全
採得歸來爐裡煉　志心功果卽西天

三藏聞きて一時に解悟し、滿心歡喜して、稱して悟空に謝し、禪堂に回り、悟空八戒沙僧をば退せて睡しめ、三藏は經本をとつて燈下に是をよみ居たりけり。

○鬼王夜謁唐三藏　悟空神化引嬰兒

却說三藏は、獨禪堂に坐し、燈の下に看經し居けるに、時三更の頃にいたり、忽ち一陣の怪風門外に聞えて、燈を削り、或は明く或は暗く成り、何となく身毛竪て覺えければ、三藏ふと頭を抬げて見るに、燈のかげに一個の人、渾身水に淋れ、眼中泪を垂して停立めり。三藏駭いて曰く、「汝妖怪奈何ぞ我が禪門にきたれる。早く去れよ」と喝するに、那人曰く、「我は是妖怪にあらず。師父子細に我を見給へ」三藏聞きて晴をすゑて見るに、天冠を頂き、腰に碧玉帶を束ね、身に赭黃袍を穿ち、足に無憂履を踏き、手に白玉珪を執れり。三藏大いに駭き、身を躬て問うて曰く、「君は是一朝の陛下、何の爲茲に至り給ふ」那人泪を流して云ふ、「我家は此里を離るゝ事四十里、一坐の城地あり、號けて烏雞國といふ。五年前に天大きに旱し、民皆飢死す。寡人是を悲み、天地に祈ると雖も、更に其効なし。然るに鐘南山に一個の全眞あり。よく風を呼び雨を祈る。依て彼眞人を請うて雨を祈らしむるに、須臾にして大雨降り、民の憂患を除け

三藏

烏雞國王
靈訟三藏
於晃岩

り。寡人其德を好し、他と結んで兄弟となり、宮中に同居する事二年。一日陽春の比、左右を退け、他と只二人花園に春色を玩び、行きて八角の琉璃井の邊にさる時、他寡人を把て井内へ推落し、石板をもつて井口を掩ひ、上に土を布いて一株の芭蕉を植ゑたり。扨眞人は身を搖して我姿と變じ、終に國土を奪ひ、三宮六院盡く他に屬ふこと已に三年なり」三藏聞きて大に驚き、「然らば御身何ぞ陰司閻王の所に行きて斯と訴へざるや」鬼王が曰く、「他眞人神通廣大にして、閻羅王と故舊なり。是に依て告るに門なし。纔に夜遊神一陣の神風をもつて我を送り來る。曾て他我に說いて曰く、三年の水災已に滿ちたりと。此ゆゑに我來つて師父を拜する事を得たり。師父の徒弟齊天大聖孫悟空は、神通廣大にしてよく魔を降すと聞く。願くは我國中にいたり、妖魔をとらへ邪正を辨明ち給はらば、深く大恩を感謝すべし」三藏が曰く、「我徒弟よく魔を降すといへども、只恐らくは一個の難あり」鬼王が曰く、「そも何の難ぞや」三藏が曰く、「那怪すでに變じて君と相似たり。滿朝の文武皆他を眞の君王とおもふ。然るに我徒弟他をさして妖魔とし討んとせば、多くの官人、却て是人を欺き國を亂す賊とせば、是虎を畫き鵠を刻する類にあらずや」鬼王が曰く、「師父の疑さる事なれども、我に一個の太子あり。他此三箇年、妖怪に禁ぜられて、宮に入て母親と相見ること能はず。是は那妖怪、母子相逢はば、長短の話說の間におのづから己が事の露れんことを恐るゝが故なり。即ち太子明早城を出て採獵す。かならずきたつて師父を拜せん。師父其時我が物語のおもむきを說聞し給はゞ、かならず信用すべし。もし猶疑はゞ是を見せ給へ」とて、白玉珪を三藏にあたへければ、三藏請取つて曰く、「此上は徒弟と商議し事をはからん。君は先かへり給へ」鬼王悅んで曰く、「我又夜遊神に乞うて皇宮に入り、一夢を正宮皇后にあたへて、合意を敎へん。師父必ず約をたがへず仇を報じ給へ」とて、三藏を三拜して立別る。三藏立上りて門外まで送るに、一度跌くとおもへば、忽ちおどろき覺めて、是一場の怪夢なり。

茲に於て三藏、「徒弟等とくきたれ」と呼立つれば、悟空、八戒、沙和尙目を覺し、走きたつて、「何事の候や」と問ふ。三藏が曰く、「我今怪夢をみたり。故に汝等を呼べり」行者が曰く、「師父路上に妖怪の多きを恐れ、且雷音寺の遠きをうれひ給ふゆゑ、種々のゆめを見給ふならめ。老孫等は千妖萬怪を恐るゝ心なく、眞心もつぱら佛を拜せん事をおもひ候へば、更に一夢をも見ず候」三藏が曰く、「我今夜の夢はさる事ならず」とて、則ち鬼王が夢にあたへし玉珪を見せ、夢中のおもむきを說聞せければ、行者感歎し、「かゝる照顧ある上は夢中の事將に眞なるべし。吾明日、寃魂のために妖怪をとらへ仇を報ずべし」といふ。三藏其謀を問ふ。行者其時一根の

毫毛を拔いて、變じて一個の紅金漆の匣となし、玉珪を把て匣の内に收めて曰く、「師父明日此物を持て手中に捧げ、錦襴の袈裟を穿けて正殿に至り、如此々〳〵にし給へ。他かならず信ずべし」三藏聞きて、「此謀甚だ良し」とて、なほ種々計議する處に、不多時東方發白みたり。行者觔斗雲に跳上りて四方を見るに、果して正面に一坐の城地あり、愁雲漠々とし、妖氣紛々たり。然るに忽ち砲聲響き、東門より一隊の人馬閃き出づ。是就ち採獵の軍兵なり。軍中に一個の小將軍あり、頭に盛甲を頂き、手に寶劍を執り、腰に弓箭を帶したるが、隱〳〵として帝王の像あり。行者心中に思ふやう、這かならず太子ならん。吾一個の戲をなし、他を寺内へ誘はん、とて雲頭を下りて身を搖し、變じて白兎となり、太子の馬前をかけ回る。太子是を見て、一箭を引て兵と放つ。行者此矢を把住め、跑走りて寶林寺の山門にいたり、忽ち本相を現し、矢をとつて門の檻に挿みて走り入り、三藏に見えて曰く、「頓て太子きたれり。吾を那篋の裡へ入れ給へ」とて、變じて二寸許の小和尚と成りければ、三藏是を紅金漆の匣に入れ、鑽をおろして相待つたり。時に那太子は白兎を追うて山門にいたり見るに、兎は見えずして、件の矢は門上に挿みたり。太子大に怪み、更に其ゆゑを知らざれど、馬かけ寄せて矢を拔きとり、頭を擡げて山門の額を見れば、勅賜寶林寺とあり。遂に馬を下りて、進んで山門に入る。衆僧おどろき慌てて出で來り、頭を叩いて迎へ入る。太子正殿にいたり、佛像を參拜し終り、目を上げて見るに、正面に一個の和尚坐し居たり。太子怒つて曰く、「此和尚、我が來るをも憚らず、坐して動かざるは无禮なり。急ぎ引下せよ」と分付くる。左右の臣、命に應じて三藏を把つて下す。太子叱つて曰く、「汝は是那方の者ぞ」三藏禮を施して曰く、「貧僧は東土大唐の者、王命に依て西天にいたり、佛を拜し寶貝を進むる者なり」太子曰く、「汝何の寶貝かあるや」三藏が曰く、「我身上の袈裟、是第三等の寶なり。又第一等、第二等の寶貝あり」太子曰く、「汝が袈裟、半邊の臂をあらはす。何ぞ寶貝と稱するに足らん」三藏が曰く、「這袈裟全體ならずといへども、詩あり、聞給へ」とて說いて曰く、

佛衣偏袒不須論　內隱眞如脫世塵　萬線千針成正果
九珠八寶合元神　會經仙女參修製　遺賜禪僧靜垢身
我見駕不迎猶自可　爾的父寃未報枉爲人

太子聞きて大きに怒つて曰く、「此狂僧何ぞ亂說なるや。爾纔の袈裟を憑んで自ら誇る。我父の寃何國に有りて未だ報いざるや。汝精く語れ。語らずんば我寶劍汝が頭に望まん」三藏が曰く、「貧道は實に是を知らず。只這紅匣の裡に一件の寶貝あり。呼で立帝貨といふ。よく過去未來

のことを知る。殿下開いて問ば卽ち知るべし」太子聞きて紅匣の蓋を開けば、二寸許の小和尙跳出て兩邊へ亂走る。太子嘲わらひ、「此星々小人、よく何事をか知らん」行者是を聞いて曰く、「汝小きをきらふ。就ち大となるべし」と腰を一たび伸せば七八尺となる。太子をはじめ衆人大いに駭く。太子問うて曰く、「立帝貨老和尙、汝よく過去未來の事を知らば、試に我が國中の事を說て看せよ」行者が曰く、「汝は是烏雞國王の太子。五年前天大に旱す。汝が家皇帝雨を祈るに効なし。時に鐘南山より一個の道士きたる。他よく風をよび雨を呼ぶ。汝が父王結拜して兄弟となる。夫斯のごとくならざるか」太子駭いて曰く、「誠に斯のごとし。後二年にして那道士風化して行處を知らず」行者が曰く、「今皇帝と稱する者は誰なるや」太子が曰く、「是我が父王なり」行者腹を抱へて高く笑ふ。太子怒つて曰く、「汝何がゆゑに嬉〻笑するや」行者が曰く、「我汝に一大事を告げん。衆人を退しめよ」太子聞きて、則ち令を出して人馬を門外に退け、迹には三藏と行者と太子只三個なり。行者太子に向ひ、「那風化して去しは是汝が父王にて今位に坐したるは是道士なり」と說聞せども、猶疑ひて信用せず。行者堪へかねて、立帝貨の像を變じて本相を現はして曰く、「我假に立帝貨となり、汝に實を告るといへども、汝愚昧にして信用せず。今は一定なる照顧を見せん。實は我は那長老の大徒弟孫行者といふ者なり。師父を護りて西天に行き經をとる。我師前夜此里に宿りて、一場の怪夢を見たまへり。夢に爾か父王の寃鬼きたつて、那道士に哩かれ、御花園に遊びて琉璃井へ撞落されて水死す。其後那怪、士の像と粧けて位に在れども、滿朝の官人凡眼に見知る事能はず。汝も幼年にして知るまじ。其妖怪たる照顧は、其後汝を宮中に入らしめず。是母子相逢うて說話せば、自然己が惡事の顯はれん事を恐るゝがゆゑなり。且御花園の琉璃井は、石板をもて口を掩ひ、土を布きて芭蕉一株を植ゑ、御花園をも關して人を出入せしめざるも此ゆゑなり、と汝が父王の寃鬼、我師父に委しく訴へ、其仇を報ぜんことを憑み、記にとて携へたる白玉珪をとどめおき、汝が今日出でて採獵する事をも告げたり。依て我白兎と變じて汝が矢に中りたる體になし、汝を引いて這寺にきたらせしは、此因緣を說聞せん爲なり」とて、那紅匣の內より玉珪をとり出して見せければ、太子取て熟見るに、實も父王が所持の玉珪にて、道士が風化せし時偸去れりとおもひし物なれば、大いに驚き、且行者が說くところ身に犇々中れば、半は信じ半は疑うて決せず。行者又曰く、「汝尙狐疑を抱かば、去て汝が娘々に面會し、他が夫妻恩愛の情、三年前と三年後と如何と問ひ、其一言を聞きても眞假を知れよ」と說きければ、太子「實も」とて玉珪を取收め、走り出でんとす。行者引留めて曰く、「汝すべて人馬を玆に住置けよ。若事を漏す時は功をなしがたし。

汝一個正陽門より後宰門に入りて宮中にいたり、母親に見えて悄語に低言きて問ひあきらめよ。那怪神通廣大なれば、少にても覺らば汝母子の性命保ちがたけん」と誡めけるにぞ、太子、「謹んで教に遵はん」とて山門を走り出で、軍士等に令し、「汝等は此に在りて屯し、我が回りを待つべし」と言ひ、獨り馬に鞭を中てゝ走去りけり。

○嬰兒問ヘ母知ニ邪正一　金木參レ位見ニ假眞一

却説太子は城中へかへり、行者が教のごとく、暗に後宰門より逕に皇宮に入り、錦香亭にいたり娘々を見るに、顏色昔に變りて衰へ、幾個の侍女を從へ亭上に坐せり。太子忙しく下馬し、跪いて母親を呼ぶ。娘々頭を抬げて、一目見て大いに悅び、「我兒、此三年見る事を得ず。今日何としてか來れる」太子が曰く、「孩兒、一言母君に問ふ事ありてきたり候。願くは左右の人を退け給へ」娘々卽ち分付けて侍女を退かしむ。太子低言いて母親に問ふ、「母君、夫妻の情三年前と三年後と如何候や」娘々是を聞きて滿眼に泪を浮め、「汝もし此譯を問はずんば、我九泉の下に至りても明白を得じ。そも三年前までは、皇帝の身煖なりしに、三年の後は冷なることを氷のごとし。我不審にてたびたび此事を問ふに、只、老に逼りて身衰へ、以前のごとくならじ、

と答へぬ」といふ事未だ終らざるに、太子忙しく馬に乘らんとす。娘々引住め、「汝河ゆゑに遽しく此處を去らんとするや」と問ふ。太子隱す事能はず、唐僧の夢の事を語り、「我未だ半疑半信なるに、今母君の曰ふを聞けば、今父王といふは、必然是妖怪なるを知る」とて袖の裡より玉珪を取出して娘々にわたせば、娘々見て又泪を流して曰く、「我も昨夜一個の夢を見たり。汝が父王水に淋々りて我が面前へきたり、我死したれども、魂魄唐僧を拜する事を得、怪を降し前身を救ふ事を憑みき、といふとおもひて夢覺めたり。されども疑ひまだ晴れざるに、何ぞ計らん汝又きたりて此事を說く。急に行きて唐僧を請ひきたり、妖魔を降して父王養育の恩に報いよ」といひければ、太子忙しく馬に上り、後宰門より出でて、鞭を上げて寶林寺にいたり、又獨り山門に入りて唐僧に謁し、前の无禮をわびて、母親の夢を說き、「何とぞ力を扶け父の仇を殺させ給へ」と拜し憑む。行者が曰く、「今日はすでに暮に近し。明早老孫汝と俱にいたつて妖魔を降すべし。汝先かへり去つて待てよ」太子が曰く、「我今日城を出て採獵するに、未だ一頭の兎をも得ず、斯ては城へ回りがたし」行者が曰く、「患ふる事なかれ。我汝に多く得物をあたふべし」とて雲端に跳上り、捻結念咒すれば、山神土地神一時に集來る。行者命じて曰く、「汝等多少の野物を擺ひ、四十里の路上におきて、太子に與へ取去しめよ」と命ず。衆神領掌して

別去れば、行者は雲頭を下りて太子に向ひ、「我すでによく計ひたり。早く城にかへれ」太子恩を謝して、衆軍に令をつたへ城へ回るに、果して路上多く野物有りければ、多少の軍士爭ひて是を捉へ勇進めば、太子も大いに悅び、一更の時分城中へ歸り入りぬ。

扨孫行者は、唐僧に向ひて曰く、「老孫明早那城中に至つて魔を降さんこと、甕の物を取出すより安しといへども、倩おもへば一難あり」三藏が曰く、「如何なる事ぞ」行者が曰く、「那怪、三年皇帝に粧け、兩班の文武と共に樂しむ。老孫那を拿ふる時、百官等何の照顧かあると問はんに、一定なる證迹なくては罪名をさだめがたし。因て我おもふに、八戒を賺して那皇帝の屍を尋ね出し、明日城にいたりて那妖怪を打たん。他もし照顧呼はりせば、則ち屍を他に看せて打殺さん。然らば文武百官敢て異論し候はじ」三藏聞きて、「汝よきに計ひ候へ」と命ず。行者就ち八戒が睡り居し床の邊に行き、呼覺せども、那獸子眠を覺さず。行者腹を立て、耳を抓んで强く引きければ、やう〳〵に眼を開き、「あゝ疼々、哥々何を戲るゝや」といふ。行者が曰く、「玆に一個のよき商議あり」八戒目をすりながら曰く、「そも何の商議ぞや」行者が曰く、「日間那太子の曰く、「件の妖怪に一件の寶貝ありと。我明日城に進み入りて他と戰ふ時、他寶貝をとつて我を降さば、功勞畫餅となりなん。先へ廻りて搶去るには不如。我其隱し所を聞きおけり。汝行きて偸みきたれ」八戒よろこびて曰く、「もし其寶貝を取得たらば、我すなはち是を搶らん」行者點首き、「いかにも汝が得とせん」獸子大いに悅び、爬起きて衣服を調へ、行者とともに祥雲を起して跳上り、城中へ飛行き、雲頭を下る。此時方に二更の時分なり。行者八戒を誘いて御花園に至り、門を打開けて走り入り、四方を見廻すに、果然一株の芭蕉あり。行者八戒に曰く、「汝手を動かせ。寶貝此芭蕉樹の下にあり」八戒心得、鈀を上げて芭蕉を撞倒し、嘴をもつて土を掘穿つに、三四尺許にして石板あり。是を取退て見るに、元來一口井なり。八戒が曰く、「哥々是は井なり。索なくては下り取る事を不得」行者が曰く、「我に一條の金繩あり。汝先衣服を脫去れ」八戒衣服を脫いで赤身になる。其時行者鐵棒を取出して七八丈の金繩となし、井の中へ放ち下せば、八戒是にとりすがり、手繰々々りてやう〳〵と水面にいたり、呼びて曰く、「哥々々〳〵。何の寶貝もなく、只是井水のみなり」行者が曰く、「寶貝は水底に沈みあり。汝水中に潛り入りて搜しきたれ」八戒誠と心得、元來水性あれば、深く水中にくだり入り眼を開き見るに、一坐の殿閣あり。額に水晶宮の三字を寫したり。八戒大いに驚きて曰く、「罷了々々〳〵、是海底にきたれり。玆は井龍王の水晶宮にこそ」と惘果てて停立居けるを、巡水夜叉見つけて急に宮中に入り、龍王に告げて曰く、「上より一個の長嘴大耳の和尙を下し來り候」井龍王が曰

く、「是天蓬元帥ならん。昨夜夜遊神烏雞國王の魂靈を送り、唐僧に見えさせ、齊天大聖を請て妖を降さんとす。おもふに大聖、天蓬元帥をして烏雞國王の屍を取らしむるならめ」とて卽ち門を出で、呼んで曰く、「天蓬元帥、請ふ裡に入りて坐せよ」と。八戒是を聞きて僅によろこび、逕に宮中に入り上面に坐す。龍王が曰く、「元帥何の爲茲にきたるや」八戒が曰く「我きたつて寶貝を求む」龍王が曰く、「元帥、我此所に寶貝なし。那裡にこそ寶貝あれども、我取いだしきたる事成りがたし。元帥自ら來つて取るべし」とて、八戒を引いて廊廡にいたり、一個の死人を指ざして曰く、「他卽ち寶貝なり」八戒是を見れば、那死人頭に天冠を頂き、身に赭黃袍を穿ち、無憂履をはき、珺玉帶を繫ぐ。八戒わらひて曰く、「是何ぞ寶貝ならん」龍王が曰く、「元帥知らずや、是烏雞國王の屍なり。井中より落下りしにより、我他に定顏珠を與ふ。故に三年を經れども曾て像を壞らず。汝此屍を駝去つて大聖に見せ、起死回生の法をもつて再世せしめよ。然らば如何なる寶貝をも得べし」八戒腹を立て、「我何ぞ死人を駄去らんや。あな忌々し」とて身を轉じて走り出る。龍王夜叉に令して屍を宮門の外へ丟下す。八戒是を見ぬふりして、急に水際に浮み出でて曰く、「師兄、金繩を下して曳上げよ」行者が曰く、「汝寶貝を取り來れるか」八戒が曰く、「更に寶貝なし。只井龍王敎へて、我に一個の屍を駄去れといへども、我是を肯はず」行者が曰く、是寶貝なり。何とて駄ひきたらざるや」八戒が曰く、「屍を駄ふ事を惡む。汝欲するならば、我に換りて駄ひきたれ」と。行者が曰く、「汝駄ひきたらずんば、我は卽ちかへり去て安寐ん。汝は長く井中に居よ」とて徉と回去らんとす。八戒大に慌てて曰く、「哥々、回去る事なかれ。我屍を駄ひきたらんとて、再度水底にくゞり入り、屍を搜し背に駄ひ、水面に擡ぎ出で、呼んで曰く、「哥々、卽ち駄ひ來れり。金繩を下せ」行者是を見て、那金索を伸下せば、八戒金索の端に口咬付き、行者に曳上げられて漸〳〵に井口を出で、屍を放下して身を拭ひ、衣服を穿る。行者國王の容貌生るがごときをみて不審り、「何ゆゑ斯のごとくなるや」と問ふ。八戒那井龍王のいひし條を說くこと一遍す。行者悅び、「造化々々。我等明日果して大功をなさん。汝快く屍を駄ひきたれ」とて捻結念咒へ、巽地に向うて一口の氣を吸ひ、一陣の風を吹起して、八戒とともに城地をはなれ、逕に寺中にかへりきたる。八戒禪堂の前に屍を丟下して曰く、「師父、起ききたつて見給へ。師兄我を欺き、國王の屍を取りきたらせり」三藏聞きて、沙僧と共に、門を開き立出でて見るに、國王の容顏少しも變ぜず活けるが如くなれば、不覺泪を流すこと雨のごとし。八戒獸子、腹を抱へて大いに笑うて曰く、「他又師父のため家父にもあらず。何ぞかく哭き給ふや」三藏八戒を叱り、「出家人は慈悲を本とす。汝何とて這等心硬

きや」八戒が曰く、「是心破きにあらず。井龍王我に教へて曰く、大聖に乞ふて起死回生の法をもて蘇らせよと。師父さほど憐み給はゞ、何ぞ外公に回生を求め給はざる」三藏よろこび、行者に向ひ、汝果して手段あり。早く醫活せよ」行者が曰く、「師父又獣子が亂說を聞きて信じ給ふか。此國王すでに死して三年、何ぞ蘇生するの謂あらん」三藏實もとて罷まんとするを、八戒又勸めて曰く、「師父他に騙され給ふな。那咒を念へて國王を活す事を求め給へ」三藏また八戒に說かれ、行者に向ひ、「汝國王を醫せずんば緊箍咒を念へん。それにても尙醫活すまじきか」孫行者大いに恐れ、「師父かならず念へ給ふな。我思惟すべし」とて、心中八戒を恨みながら、其手段をぞおもひ回しける。

二編　卷之四

○一粒金丹天上得　三年故主世間生

孫行者は、師父が緊箍咒を念ぜんといふに困りはて、國王を活すべき工夫を廻らしけるが、忽ち心中に手段を按出し、掌を打つて、「然なり〳〵」といふ。三藏問ひて曰く、「汝國王を醫すべき手段を按出せりや」行者答へて曰く、「別に手段なしといへども、老孫去つて太上老君の許に行き、一粒の九轉還魂丹を乞ひ來らば、恐らくは醫活すべし」三藏大いに悅び、「汝早く行きて乞ひきたれ」行者唯々として觔斗雲に跳上り、南天門にいたり、逕に三十三天兜率宮中に入り見るに、老君正丹房中に在つて丹を煉り居たりしが、行者を見て問うて曰く、「大聖、汝唐僧を扶けて西天に行かず、却て玆に來る。是何事ぞや」行者すなはち烏雞國王の事迹を說くこと一遍し、「何卒老君一粒の九轉還魂丹を惠み給へ。我那國王を醫活せ、爲に妖魔を降し候はん」老君心に金丹を與ふる事を惜めども、他また神通をもつて多く偸去らん事を恐れ、日善事のために施す事なれば、僅に一丸を取出して行者にあたふ。悟空是を請取つて拜謝し、老君に辭し

別れて逕に寺中へ回り下り、師父に謁す。三藏悅んで、「丹藥を乞ひきたれるか」と問ふ。行者「有り〳〵」と答へて、沙僧に命じて水を取りきたらせ、那金丹を肚下に灌下せば、一時ばかり有りて肚内亂哴といふ。行者其時唇へ口をあて、一口の氣を吹入るれば、咽喉より度つて重樓を下り、明堂に轉り、逕に丹田にいたり、又湧泉に下り、また返つて泥垣宮に至り、一聲响喨んで、氣聚り神歸して、すなはち身を飜して起きたり、師父を呼んで雙膝を屈め、三拜して恩を謝す。三藏慌忙て攙起し、座上に請じて禮をなす。折ふし寺内の僧人早齋を獻じきたり、忽ち水衣の皇帝を見て大いにおどろき惑ふ。悟空が曰く、「這本の烏雞國王にて、すなはち汝等が大旦那なり。三年前に妖怪に害せられ給ひしを、老孫昨夜救ひ活せり。今又城に進んで邪正を辨明せんとす。早く齋を獻じきたれ」衆僧驚歎して、一齊に旦齋を獻じきたるにぞ、五人等く吃し罷り、行者國王に敎へて、身上の袍帶冠履をことぐく脫下し、僧官に命じて、布の直裰一條の黃絲絛、一双の僧鞋をとりきたらせ、是を國王の衣服冠帶に換へ、扨僧官に向ひ、「我今皇帝を送つて城に進み行き、後日賞賜を乞うて汝等に謝せん。又衆僧に分付け、遠く送らしむる事なかれ。事を漏さば却て不良」といふ。衆僧領掌して去りぬ。玆に於て、三藏師徒ならびに國王すべて五人、一齊に路を急ぎ、烏雞國の城中にいたり、朝門に倚つて曰く、「貧僧

玆にいたる事、關文を換へん爲に、特にきたつて大王を煩はしむ。願くは此よし傳達し給へ」と申しければ、黃門官急に入りて斯と啓奏す。那魔王すなはち令して宣入れけるに、五人逕に殿前に挺立りて不動。衆官旬つて曰く、「這野僧无禮なり。何とて下り拜せざるや」魔王他等を制し問うて曰く、「和尙是何方より來れる人ぞ」行者が曰く、「我は是東土唐王の差、西天に往きて佛を拜し經を求めんとす。特きたつて通關文牒を換へんことを願ひ候なり」魔王が曰く、「汝等四人の和尙は子細に尋ぬるに及ばず。這一個の道人踪迹疑ふべし。是何方の人ぞ。氏名を呼びて取供を拿り來れ」行者が曰く、「這老道人、聾にして且啞なり。我他か根本よりこんごとく知れり。我他に替つて供をし候はん」魔王が曰く、「然らば實々に供せよ。罪を免さん」行者すなはち供す。其文に曰く、

供狀。行童年老邁。痴聾瘖啞。家私壞祖居。原是此間人。五年之前遭破敗。天无雨。民乾壞。鐘南忽降全眞怪。呼風喚雨顯神通。然後唆將他命害。推下花園深井。陰侵龍位。今三載。幸吾來。功果大。起死回生。轉法界。要向金鑾辨假眞。扶王滅怪。安朝代也。

魔王是を聞きて心中大いに駭き、忽ち寶劍を執て、雲に駕て空を望んで逃れ去る。八戒沙僧爆

燥、如何せんと嚢立つ。行者兩人を制し、「兄弟嚢ぐ事を止めて、太子娘々を呼び來つて父王を拜せしめよ」といふ。八戒すなはち國王を殿上へ請じ、太子娘々に拜させければ、太子娘々は更に夢の心地し、親子三人手を組みかはして、嬉涙にくれ給ふ。文武の百官も、始て妖怪の障碍を覺り、山呼してよろこぶ事限なし。行者衆人に向ひ、「いで我妖魔を捉へきたらん」とて、急に跳て空中へ上り、四方を睜眼せば、那怪王徑に東北をさして走り去る。行者追かけて大喝し、「妖怪那里へか走るや」と呼ぶ。那怪王大きに怒り、頭を回らし、寶劍を提げ、行者に對ひ砍てかゝる。行者も金箍棍を擧げて相迎へ、たゞかふ事數十合。妖怪力怯れて、急に身を抽いて本の城中へ跳り下り、白玉樓のまへに文武の竝立ちたる中へ入り、身を搖して一變し、忽ち三藏と一般のすがたとなり、階前に竝立つ、行者追ひ來りて見るに、兩個の三藏有りて、誰が假誰が眞といふ事を辨ぜず。敢て捧を擧て亂打事も不能、心大に焦燥ち、如何せんと案じ煩ふ。八戒傍に在りて、呵々と大口開きわらふ。行者怒りて曰く、「汝這獸子、這般にいたりて何をわらふや」八戒尙もわらうて曰く、「哥々我を獸子といふ。汝を我に比べて我よりは又獸甚なり。師父二個ありて辨じがたくば、何ぞ些の頭の疼を忍へて那の咒を念じさせざる。もし師父咒語を念へて頭の疼まざるは、是妖怪ならずや」行者が曰く、「實是は理なり」とて、先一個の師父に、「咒を念じ見せ給へ」と乞ふ。三藏すなはち緊箍咒を念ずれば、行者頭を抱へ、「頭疼し〳〵。咒語を止め給へ」と謝び、又一個の師父に向うて咒語を乞ふ。這師父もすなはち咒を念ず。されど頭の疼を不覺。八戒が曰く、「是一定妖怪なり」とて鈀を擧げて打つてかゝる。那魔王本相を現し、跳つて空中に上る。八戒沙僧同じく空中に赴りいたり、左右より夾んで攻打つ。行者も後に隨つて走りいたり、正に手を下さんとする所に、只見る東北の上に一朶の彩雲發り、裡面に聲有りて、「孫悟空且し手を下す事を休めよ」と呼はつたり。行者頭を回して是を見るに、豈はからん、是文殊菩薩なり。行者急に棒を收め、進行きて禮をなす。文殊宣はく「悟空、我汝に替りて那妖怪を收むべし」行者が曰く、「此妖怪是何者なる」文殊宣はく、「他は是我坐下の青毛の獅子なり。曾て如來の旨差に行けり。當初烏雞國王善を好んで僧を供養す。佛我に命じて他を度せしめ給ふ。因て我變じて凡僧となり、他に化齋の故意を問ひ、幾句の言語をもつて相難ぜしに、他答に倦みて却て怒を發し、我を綑縛めて御水河の底に浸すこと三日三夜におよぶ。如來故に此怪を遣はし、他を井に推落して我を浸したるごとく三ヶ年浸して、以て我三日三夜の水災に報い給へるなり」行者が曰く、「是甚だ中らず。他怪佛勅を得て汝が仇を報ゆとも、何ぞ三宮娘々を汚し、綱常の倫理を壞るや」文殊宣はく「他敢て娘々を汚し倫理を亂す事をせ

じ。是彼娘々に問うても察せよ」八戒大きに笑ひ、「這妖精、糟鼻子酒も吃はずして、枉て其名を擔ふ可笑さよ」行者叱つて曰く、「汝獸子、戯言をいふ事を休めよ」とて文殊に對ひ、「早く妖精を收めて去り給へ」と乞ふ。文殊點首き、喝して宣はく、「畜生還正に皈す。更び何の時をか待つ」と。其時那魔王、忽ち原身を現はして青毛の獅子となる。文殊菩薩その背上に坐し給ひ、悟空等に辭して西天に走去り給ひけり。

○嬰兒戯化禪心亂　猿馬刀歸木母空

却説行者沙僧八戒三人、雲頭を按下り朝内にいたれば、君臣宮妃一齊に迎へて拜謝す。行者其時文殊菩薩の怪を收め給ふことを説聞せければ、國王階下に跪いて啼哭し、佛の誡を恐れ、三藏に向ひ、「我死して三年、今師父の救を蒙りて幸に回生す。されども何の面目有つてか王位を踐まん。願はくは師父を請ふて此國を讓り、我永く其臣下たらん」と申されけれども、三藏敢て不肯。又行者を請うて君とせんとあれども、行者も又不肯。國王不得已天下に大赦を行ひ、東閣に筵宴を設け三藏師徒を欵待す處に、寶林寺の寺僧四人、王の冠履袍帶を捧來り、重祚の賀を演べければ、國王是に恩賞を賜ひ、ともに宴席へ請じて欵待る。斯て其次の日、三藏師徒國王に辭して立出づれば、國王太子を始め、上下大いに餘波を惜み、種々の寶貝金銀を、餞別のため獻るといへども、三藏固く辭して分毫をも不受。玆において君臣太子送つて、百里の外にいたりて別去る。

此時正に秋盡きて冬の初なり。師徒朝に行き夕に宿りて、行路を經ること半月餘、然るに一坐の高山に行きかゝる。十分險峻にして、半空に一朶の紅雲聚り、一塊の火氣有るを見る。行者大いにおどろき、師父を馬より搦下し、八戒沙僧をも呼びとゞめ、「兄弟みだりに走ることなかれ。妖怪來れり」といひければ、兩人も愕然として師父を圍繞ふ。此時雲中にある妖怪おもへらく、我人の説を聞くに、唐僧西天に行き經をとる。他は原金蟬長老の轉生なり。他が一塊の肉を吃ふ時は、延年長壽ならしむと、故に我日々山間に在つて候ふに、果して此一連の和尚は那唐王の使ならめ。中にも馬に乘つたるは其三藏にこそ。但し徒弟三人の醜き和尚、只今唐僧を圍遶するは、他眼力有りて我が窺ふを知るならめ。我今勢をもつて捉へんとせば容易からじ。我一計を施して捉へんと、遂に紅光を散し、雲頭を下りて身を搖し、七才許の頑童となり、麻繩をもつて手足を綑め、松樹の梢に鈎下げられ、「我を救へ」とぞ叫び居ける。行者紅光の散じ盡るを見て、師父を請うて馬に乘しめ、路を走る。三藏が曰く、「汝妖怪來るといひしに、又

路を行くは何事ぞ」行者が曰く、「弟子先に雲中を見れば、紅光火氣あり。是必ず妖精きたれるなり。今紅雲散じ盡すは、他人を害ふ心なく行き過ぎしならめ」三藏師徒、扨は心安しとよろこび、馬を進めて行く事半里ばかり、忽ち樹上に人在りて、「我を救ひ給へ」と叫ぶ。三藏頭を拾げて見れば、一個の小孩童、赤身にて手足を綑められ、樹上に鈎られて有り。三藏大いに憐み、「早く救へよ」と命ず。行者推止め、「師父、他に怪され給ふな。是妖怪なり」三藏更に信ぜず、「汝動もすれば人を見て妖怪とす。多くいふ事勿れ」と叱懲らし、樹下にいたりて問うて曰く、「汝は那家の孩兒にて、何とて鈎られて有るや」妖怪 泪を流していふ、「師父聞き給へ。我家は這山の西にあり。我父を呼んで紅十萬といふ。金銀を借りて利を量るに、无籍の人騙借つて元利とも回さず。我父それより後は誓を立て分毫も人に不借。那夥の兇黨をかたらひ、白日に我家にきたり、財物を搶しとり、我が父親を殺し、母親を擄去る。母親我を懐の裡に把れて、哀々哭々此山中にいたるを、那また要め、我を殺し母親に戯れんとす。母親種々に哀み賴みしかば、那賊やう〳〵に刀を收め、繩をもて斯木の上に鈎提げ、母親を掠めて那里へか去れり。我此に吊れて在る事已に三日、更に一個の行人もなし。然るに今 師父に逢ふ。願はくは救ひ給へ。世沒まで恩惠を忘れじ」三藏聞きて泪を流し、八戒に分付けて繩索を解き放し救ひ

來らしむ。行者喝つて曰く、「這 潑妖、架穴搗鬼することなかれ。汝が父賊に殺され、母も賊に擄はれ、汝ばかり助りて誰人にか交る」那怪聞きて曰く、「和尚うたがひ給ふな。我が父母亡ぶといへども、親戚みな存す。我外公山南にあり、姑娘嶺北にあり。林内 紅三は、是族伯なり」八戒が曰く、「哥々這小兒强て尋ぬるに及ばず」とて、戒刀を把つて索を斷り、怪者を扶下す、三藏問うて曰く、「汝猶よく路を行くや」妖怪が曰く、「我手脚すべて痲れ、腰骨疼みて路を走りがたし」と。玆において三藏行者に命じて曰く、「汝他を駄ひて行け」悟空唯々として那怪を駄ひ、行々心中に、あはよくば攢殺さんとおもふ。那怪早く知覺りて、すなはち一口の氣を放ち吹いて背上に有るに、忽ち重き事千斤ばかり、行者大に怒り、石頭を望んで攢殺すに、妖怪早く解死の法をつかひ、空中に上りて一聲响喨び、一陣の旋風を吹出す程に、石を走らし、砂を揚ぐる。三藏大いに駭き、馬上にたまり得ず、八戒沙僧も頭を低れ面を掩うて風を避く。行者怪風の起るを見て急に走りきたるに、早怪物唐僧を捉へ去り、霎時して風聲息み、日色また明なり。行者大に喝して、「師父は那里へ行き給ひしぞ」と問ふ。八戒沙僧爬ひ起きて曰く、「風緊しく吹來りしゆゑ眼を開く事能はず。師父も伏して馬上に居給ひしが、何地へ行きしや不知」行者牙を咬み、「師父我が言を不納して毒手にあふ。前の旋風は樹上の孩兒のなす處なり。我他を

妖怪約ニ孩兒騙ニ三藏

認得て摜殺したれども、解死の法をつかひ、風を發して師父を把れり。我那妖魔を尋ねて師父をすくひきたらん」とて、八戒沙僧と倶に行李を收め、馬を匹いて山に尋ねのぼり、行く事五七十里におよべども跡方なし。行者身を將て一度縱して峰頭に上り、念・訣念・呪へければ、山神土地神きたる。行者問うて曰く、「這山は何山といひ、妖怪の住所は何所にかある」土地山神跪下いて曰く、「這山を呼んで鑽頭號山と做す。山中に一條の枯松澗あり。澗邊に洞あり。火雲洞と號く。他妖精の住所なり。他神通廣大にして、常々我等を唱號とし攻使へり」行者が曰く、「他は那里の妖精、字を麼と呼ぶや」衆神が曰く、「他は牛魔王の兒子、羅刹女に養はれ、曾て火焰山に在つて三百年修行し、三昧眞火を煉成す。牛魔王他を使うて此山中の鎭守とし、名を呼で紅孩兒といひ、號を聖嬰文王ともいへり」と語りければ、行者山神土地を退かしめ、峯頭を跳下て八戒沙僧に曰く、「兄弟等心を安んぜよ。他妖怪をいかなる者とおもひしに、牛魔王が兒子なり。老孫、五百年前、牛魔王と結んで兄弟となる。他が孩兒はすなはち我が姪なり。他敢て師父を害せじ。早く行きて他を尋ねん」と。三人遂に路を急ぎ、進み行く事又百餘里、忽ち一派の松林を見る。中に一條の澗あり、澗の邊に一個の洞府あり。行者が曰く、「這必ず妖精の住所ならん」とて、沙僧に馬行李を守らせ、八戒を連れて進み入る。

○心猿遭レ火敗　木母被ニ魔擒一

却說兩人は、枯松澗を跳起え、逕に石洞前に至り見るに、門外に一個の石碣あり、上に八個の大字を鐫りて、「號山枯松澗火雲洞」とあり。一群の小怪那裡に在て、鎗を輪し劍を舞ひ居たり。行者叫んで曰く、「小妖們、早く去て洞主に報知せ、我が師父を送りきたれ。汝等が性命を免し得させん」小怪聞きて忙しく洞に入りて報じて曰く、「洞外に、一個の毛臉雷公の如き和尚と、長嘴大耳の和尚來て、唐僧を要めんとす」魔王是を聞きて、小妖等に令して、五輛の小車を推出ださせ、其身は手に一妖の火焰鎗を執り、盛甲なく、只見る腰の間に一條の赤き錦繡の裙を束ね、門前に走り出る。行者倩他を見るに、面は傳粉のごとく、唇ば塗朱のごとし。青雲の鬢、新月の眉端的なり。妖魔高く呼んで曰く、「汝等何者なれは喧しく吆喝くや」行者笑つて曰く、「賢姪早く我が師父を送り出し、親情を失ふ事なかれ」妖怪大きに喝つて曰く、「汝潑猴、我汝と何の親情かある」行者が曰く、「汝はいまだ知らずや。我は、五百年前大に天宮を鬧せし、齊天大聖孫悟空なり。我往年もつぱら豪傑と交を結ぶ。汝が令尊牛魔王と結んで兄弟となる。其時は汝未だ不生、知らざるも宜なり」那怪是を信とせず、嘲わらうて、火焰鎗を捻り

突いてかゝる。行者大に怒り、鐵棒を輪して相迎へ、戰ふ事二十餘合、いまだ勝敗を分たざるに、八戒また鈀を上げて擊てかゝる。妖精兩雄に敵し難く、鎗を收めて引退くを、行者八戒透さず追蒐る所に、只見る那怪、鎗を擧げて中間なる一輛の車の上に立つて、一個の咒語を念ずれば、口裡より火を噴出だし、鼻子より濃烟逆出づると見れば、火焰齊しく生じて、五輛の車の上に火光湧出る。妖精連ねて數口の火を吹けば、紅烟焰々として空を燒し、烟火四方に充滿たり。八戒慌てて曰く、「哥々、這火裡に在らば、我徒活る事を得じ。早く走れ」といひさま澗を過つて跑走る。行者は避火の訣を結び、火中に撞入て妖精を尋ぬ。されども、他只管烟火を吹出し、行者の眼を迷漫しぬ。此火は、金角が呼びし天火と齊しからず、是妖魔の修煉成眞の三昧火なり。五輛の車は五行を合し、五行生化して火を煎成す。さしもの行者、妖火の飛騰するによりて、洞門路徑をだも見る事能はず、身を抽でて火中を跳り出づれば、妖精も火具を收めて洞中へぞ引入りける。

却說行者は、枯松澗に走りかへりて、八戒を喝つて曰く、「汝這獸子、妖火を懼れて敗走り、老孫を捨殺にせんとす。もし汝を如此くせば如何」八戒が曰く、「時務を識る者を呼んで俊傑とす。妖精已に汝を認親ること能はず、却て不義の火を出す。走らずして戀戰し、空しく死を需んは謀なきに似たり」行者が曰く、「他が鎗法恐るゝに不足といへども、多くの火勢有るを奈何せん」沙僧が曰く、「他に火勢あるうちは勝を取る事不能。師兄何ぞ相生相尅の理をもつて他に勝ざる」行者手を拍ち、「汝のいふ處理有り。もし相生相尅をもつて論ぜば、是水をもつて火を尅すべし。汝等須臾茲に待て。我海龍王に水を借來り、妖火を潑息し、這妖精を捉へん」と遂に雲頭に跳上り、須臾に東海にいたり、水晶宮に入り龍王に見えて曰く、「號山の紅孩兒、我が師父を捉去る。我他と交戰する時、忽ち妖火を出して我勝を取る事を不得。思ふに水よく火を尅す。願はくは我他と戰を挑むとき、大雨を降して妖火を潑滅し、唐僧の一難を救ひ給へ」龍王が曰く、「然らば、我が舍弟三海龍王を將て行き、雨を降させ給へ」行者大いに悅び、即時に三海龍王を邀へ、ともに枯松澗の上にいたり、行者衆の龍王にいひつけ、「我他と交戰するを待つ、他もし火を放し出さば、我が呼ぶを聞きて一齊に雨を降せ」と約定し、頓て雲頭を降りて枯松澗に入り、八戒沙僧に云々のおもむきを云聞せ、澗を跳り越え洞門にいたり、「妖精師父を返せ」と叫ぶ。小妖入りて斯と報じければ、紅孩兒急に長鎗を挺げ、小妖に五輛の火車を推出させ走出づる。行者喝つて曰く、「賊怪早く師父を送り出して性命を全うせよ」紅孩兒笑つて曰く、「唐僧は我按酒之物とせり。汝今は救ふことを莫思」行者怒つて、鐵棒を輪して打つて蒐

る。妖精も火炎鎗を擧げて戰ふこと三十餘回、されど勝ちがたきを知て早く身を抽け、又も火を吹出せば、五輛の車の上烟火逆起り、赤焰飛騰る。行者頭を回し、一聲高く呼んで相圖をしければ、龍王水族心得て、一齊に雨を降し、妖火を消んとすれど、妖精修煉の眞火、よく消事能はず、却て火勢盛になり、火上に油を灑ぐに似たり。行者大いに焦燥ち、避火の訣を捻びて火中に跳入り、妖精を尋ねて討んとす。紅孩兒是を見て、行者が面を劈うて一口の烟を噴きかくる。行者急に頭を回し是を遮れども、烟眼中に入りて眼花霍亂て見ること能はず。原來行者火を恐れずといへども、只烟を怕るゝがゆゑなり。妖怪機に乘じ、又一口の烟を噴きければ、今は堪りかね、雲に縱て敗走るにぞ、妖精また火具を收めて洞中へかへりぬ。這時行者は、一身烟火に暴燥れ、禁難くて、逕に澗水に跳入り、水を以て身を冷すに、何ぞ知らん、冷水に逼られて火氣心を攻め、三魂散じ氣胸堂に塞り、口舌冷えて倒れたり。龍王雨澤を收め、高く呼んで曰く、「天蓬元帥、捲簾將軍、急ぎ師兄を救へ」と。八戒沙僧是を聞いて、急に馬を曳いて林を走り出で、澗邊を尋ぬる處に、流下に一人の人あり。沙僧走寄つて見るに、是行者なり。大いに駭き、抱上げて見るに、蹌踉四肢伸びず、渾身の冷なること氷のごとし。沙僧兩眼に涙を流して曰く、「可惜師兄、汝億萬年不老長生の身も、纔に妖火に燒れて中途短命の人となるかし」と聲を放つて哀哭す。八戒が曰く、「汝先哭くこと莫れ。汝脚を扯け。我擺佈げて見ん」沙僧是に同じ、脚を拽直して盤膝の上に坐せしむれば、八戒兩手を將つて搓熱げ、七竅を一個々々押して按摩禪法す。原來行者死せしにはあらず、冷水に逼められ、氣丹田に阻り、聲を出すこと不能りしに、幸に八戒に揉擦げられ、須臾に三關を透し明堂に轉じ、孔竅を開きて一聲「師父」と叫ぶ。沙僧よろこび、「師兄心を慥にせよ。我們這にあり」行者眼を開き、兩人を見て曰く、「那龍王水族は何所にある」龍神空中に在つて曰く、「小龍等玆にあり一行者が曰く、「汝を遠く勞すと雖、曾て功をなさず。只請ふ是より回去れ。後日に勞を謝すべし」龍王是を聞いて、唯々として水族を帥いて龍宮に回り去る。沙僧行者を松林の下に坐定せ、少時の間神を定め氣を順す。行者大いに嗟嘆して曰く、「師父妖怪の爲に困めらるゝといへども、殆救ふに術なし」沙僧が曰く、「師兄多く患ること勿れ。我等別に計策を定めん。先何里に行きてか助力の兵を請ひきたらん」行者が曰く、「那怪神通不少。もし、南海の觀音菩薩を請來つて事を謀らば、他を降す事あらん。然れども我渾身疼痛みて、觔斗雲に駕る事不能。奈何せんや」八戒が曰く、「我去きて請ひきたらん」と、卽ち雲霧を起し、是に駕して南に向つて去る。

是より先に紅孩兒、洞中に在つて想へらく、行者火術に拉がれ、かならず別所に往きて救の

兵を請ひきたらん、我また其裡をかゝんと、遂に洞を跳出で、空中に在つて見るに、忽ち猪八戒南に向つて走り去る。妖怪心中に思ふやう、果然八戒南に走る、是他なし、觀音を請きたらんためなるべし、とて急に雲端を下り、小妖を呼んで曰く、「我皮袋を把りきたれ。我一舉して八戒を兼して袋の内に裝りきたり、蒸して汝等に吃はしめん」小怪よろこび、一個の如意皮袋を拿つて勸めければ、紅孩兒雲頭に駕し、近路を走りて八戒より先にいたり、身を搖して假觀音となり、壁巖の上に端坐して居けり。八戒は斯ともしらず、雲に乘り路を急ぐ所に、前面に觀音菩薩端坐して居しければ、獸子是を假菩薩ともしらず、雲を停め禮拜して曰く、「不憶、菩薩茲に居給はんとは」妖怪が曰く、「汝唐僧を守りて西天には不行、茲にきたるは何事ぞ」八戒すなはち、紅孩兒が三藏を捉へ、且行者も他が妖火に燒壞られたる始末を說き、「萬望、菩薩大慈悲をたれ、師父の難を救ひ給へ」と乞ふ。妖怪が曰く、「那火雲洞の主は我が故人也。汝我跟にしたがひ洞の裡へきたれ。我洞主に說いて唐僧を放たしめん」八戒誠ぞと心得、是にしたがふ。妖怪仕すましたりとて、舊路をかへりきたり、雲を下りて八戒を帥る洞中に入るよと見えけるが、忽ち一聲吶喊いて、八戒を將つて捉倒ふし、袋の内に裝入れ、緊く口を束ねて梁の上に綑り上げ、本相を現して曰く、「汝八戒獸子、我が方寸の手段に陷れり。頓て蒸熟して小的等が下酒受用すべきぞ」と。八戒袋の中より罵つて曰く、「汝潑魔、我を騙して腫頭天瘟目に遭すや」と、袋の内にて亂跳めども、逃れ去る事不能。此時行者は沙僧と俱に林の内に坐して有しが、一陣の腥風面を刮つて過ぐ。行者噴噫して曰く、「這風凶多く吉少し。思ふに是猪八戒妖精に撞見したるならん。汝坐して這里に待て。我去て打聽ひきたらん」沙僧が曰く、「師兄腰疼り。小弟聽ひきたらん」行者が曰く、「汝にては不濟事。只我に任よ」とて遂に疼を忍で澗を跳り過ぎ、洞前にいたりて窺ふ。小妖等これを見つけ、急に入つて斯と報ず。妖精令を傳へて曰く、「行者我が火術に壞られ、敢て働く事不能。汝等去きて他を拿へきたれ」夥の小妖令を聞いて、一度に吶喊いて門を開き、都て行者を拿へ進む。行者果して疲倦れて戰ふ事不能、身をもつて鑽けて、變じて一個の包袱となり、路傍に居たり。小妖は此手段をしらず、已に行者を見失ひ、件の包袱を取つて立かへり、大王に報ずるやう、「孫行者氣力衰へ、包袱を丟下てゝ逃走り候」妖精喚つて曰く、「さも有りなめ。這包袱を諒りたりとも、甚値の錢も有るまじ」とて、不爲意門内に丟下ておきたり。行者又毫毛を拔いて包袱となし、本身は變じて蒼蠅となりて門上に在りけるが、八戒が皮袋の裡に在りて泣く聲きこゆ。又妖精六個の健將を呼んで曰く、「汝等行いて老大王の所に至り、我が唐僧を捉へし趣を說き、老大王とともに蒸吃うて千紀の

壽を延んといひ、請じきたれ」と令す。六怪命を領けて洞外に立出るにぞ、行者飛出でて、六怪の跟に隨ひ飛行きけり。必竟行者何事の手段をかなす。其は下回を看て分解るべし。

二編　卷之五

○大聖慇懃拜ニ南海一　觀音慈善縛ニ紅孩一

却説六個の妖怪、門を出でて逕に西南を望んで走り行く。行者思へらく、他が大王と稱するは是牛魔王ならん。我すでに牛魔王を記得れり、我今他が模樣に變じて紅孩兒を欺ん、と翅を開きて飛去り、六人の者より先に到り、身を變じて牛魔王となり、又幾根の毫毛を拔いて小怪となし、山の凹なる處に居て待居たり。六怪是をしらず、路を急ぎて行く所に、忽ち前面に牛魔王居たりたれば、大いによろこび、一齊に跪下していふやう、「是は老大王に在すや。小的們は是聖嬰大王の命を受け、大王を請うて唐僧の肉を獻り、千紀の壽を延べまゐらせんために來り候」と申したれば、行者牛魔王の趣して曰く、「孩兒我を請ふとや。然らば汝等前に立つて路を開けよ」六怪唯々として、前に立ちて路開す。ほどなく洞口にいたり、六個の妖怪かくと報じければ、紅孩兒急ぎ洞を出でて迎接けたり。行者拽開大步、門の裡に入り、南面に坐して當正に居たり。妖王跪拜して下手に就く。行者が曰く、「我兒我を請來つて何事かある」妖王が

曰く、「孩兒昨日唐僧を捉得たり。他は十世修行の人なり。もし他が一塊の肉を吃ふ時は、延壽千紀といへり。故に愚男一人受用せず、特に父王を請じて同じく享はんとす」行者驚きし體にて曰く、「唐僧は、もし孫悟空といふ者是を保けて西天に往き經をとる人にあらずや」妖精が曰く、「正に是なり」行者手を搖つて曰く、「莫惹々々。那孫行者は神通廣大變化多端なし。他曾て天宮を鬧せし時、玉帝十萬の天兵を下しても、猶他を捉ふること不能。汝みだりに他を吃はば爲よからじ。早く送出して他に還せ」妖怪が曰く、「父王何ゆゑ他を長として自己の威風を滅し給ふや。那孫行者、孩兒と交戰うて、兩番ともに我が三昧火に燒敗られ、今早またきたつて門に吆喝き、小妖們に追立てられ、慌得て包袱まで丟下して逃走れり。故に父王を請ひきたつて唐僧の活像を見せ奉り、後ともに蒸吃はんとし候なり」行者笑つて曰く、「我兒只三昧火有つて他に勝をとれども、他に七十二般の變化有る事をしらず」妖精が曰く、「他變化を憑とするとも、我またよく他を認得り。他決して我門にきたる事能はじ」行者が曰く、「すでに斯のごとくならば心易し。我唐僧の肉を吃はん。しかれども今日は吃すべからず」妖精が曰く、「何の故にて今日は吃し給はざる」行者が曰く、「我斯老年にいたるにより、汝が母我に些の善事を作んことを勸む。我思ふに、是まで何の作善をもせず。依て些の齋戒を持てり」妖精が曰く、

「父王の齋、是長齋か是月齋か」行者が曰く、「長齋ならず月齋ならず、毎月只四日なり。喚んで雷齋といふ」妖精問うて曰く、「今日其四日の内に候や」行者が曰く、「三辛初六に逢ふ。今日辛酉の日に該つて齋日なり。明日他を蒸して汝と同く吃はん」妖精是を聞いて心中訝り、我が父平日人を吃するを爲生とす、怎麼して又齋戒をすべき。此言可疑、とて事によせて座を退き、六人の健將を呼んで問らく、「汝等老大王を那里にて乞ひきたるや」六怪が曰く、「路上に居給ひしを請ひきたり候」妖精が曰く、「扨こそ老大王は假的なり。汝們都て要準器械を備へて待つべし。我再び他に問ふ事あり。もし他不對時は、我一聲喂ばん。其時汝等一齊に手を下せ」小妖等命を領けて用意をなす。妖精また裡面に入り、行者に對して曰く、「愚男今日我王を請ふ事、一つには唐僧の肉を獻じ、二つには我が出産たる年月時日を忘れ候へば、それをも問ひ奉らん爲なり。願くは是を知せ給へ」行者笑つて曰く、「汝が生年月日、我老年に固り忘記れたり。明日家に回り、汝が母親に問うて敎へん」妖精嘲はらひ「妖王平日我に八字を說いて、同天不老の壽ありといへり。怎麼とて一旦に忘れ給はんや。かならず是假的ならん」とて一聲高く喂びたれば、衆怪鎗刀を舞して、行者を望んで砍つてかゝる。行者事の破れたるを見て、忽ち金光と變じて洞門をのがれ出で、澗を跳つて松林にきたる。沙僧待居て其消息を問ふ。行

者が曰く、「我他を欺き師父を救んとして事ならず。此上は我行きて觀音菩薩を乞ひきたらん」沙僧が曰く、「汝腰は痛まざるや」行者が曰く、「今は不疼」とて卽ち觔斗雲に縱り、逕に南海にいたり、直に落伽崖上に登り、菩薩を見て側下して拜し、紅孩兒の事を說き、「師父の難を救ひ給へ」と乞ふ。觀音宣はく、「他が三昧火、神通廣大なり。怎麽早く來つて我を請はざるや」行者が曰く、「弟子早くきたつて菩薩を請じ奉らんとすれど、他が三昧火に壞られ、雲に駕る事不能、八戒に命じて菩薩を請ひきたらしむるに、那獸子、いまだ寶山にも不到して、那妖精が菩薩の像に變じ居しに賺され、皮袋に裝れて洞中に在り。此故に遲くきたり候」觀音聞き給ひて大いに怒り、「這潑妖、敢て我が姿に變ずるや」とて、手中の淨瓶を海裡に投入れたまふ。悟空は其心をしらず、我が說的話不好に依つて、菩薩怒りに堪ず、淨瓶を擲了て給ふ、可惜々々、と心の裡に思ふ事未だ終らざるに、忽ち海中波を翻し、一個の烏龜浮み出づ。那龜淨瓶を駝うて崖に爬上りて、菩薩に對し點頭する事二十四點、菩薩行者に向ひ、「汝那淨瓶を拿上げきたれよ」と命じ給ふ。行者領掌して瓶をとらんとするに、双手を掛けて猶分毫も動かす事不能。是は如何にと惘果て、左右するを、菩薩見て微笑し給ひ、「這淨瓶は、當時は空瓶なり、今海に拋下して、一時一海の水を收めて裡面にあり。汝未だ海を架る力量なき故に、拿て動かす事能はず」

とて、遂に走下りて、右の手にて輕々と提起げ、左の掌に乘せ給へば、那龜は點頭いて海中に沈み去る。菩薩曰く、「我が此瓶中の甘露水、那龍王の私雨と同じからず。よく那妖精が三昧火を滅す。汝に與へて師父を救はせんと要すれども、汝今動かす事不能。今我汝と同じく去きて唐僧を救ふべし」行者磕頭いて恩を謝す。菩薩惠岸に分付け、「上界に行きて、汝が父王の三十六把の天罡刀を借りきたれ」と命じ給へば、惠岸命を領けて去り、須臾して回轉り、天罡刀を菩薩に捧げ奉る。菩薩是を手にとり、拋下して咒語を念じ給へば、那多くの刀、化して一坐の千葉蓮臺となりけり。菩薩身を縱して中間に端坐し給ひ、祥雲を起し、普陀岩を離れて、行者惠岸とともに須臾の間に號山につき給ふ。

菩薩淨瓶の口を拔傾けて、喇々と水を出し給ふ。其音雷のごとし。又悟空を呼んで他が手を出させ楊柳の枝を甘露水に蘸し、一个の迷の字を書し、行者に敎へて曰く、「汝這拳を揑著め、往て妖精と戰ひ、僞り敗けて我が面前へ引ききたれ。他もし一度汝を追はば、掌を開きて見せよ、那必然住ることを忘れて追ひきたるべし」と。行者命を領けて徑に洞口にいたり、棒を揚げて洞門を丁々と打破ぶる。小妖駭き、走り入りて斯と報じければ、妖王大いに怒り、火炎鎗を挺げて門を跳出で、行者を見て罵つて曰く、「這潑猴、无禮なり。數回の敗績にも懲りず、尙きたつ

て我が大門を破るや」行者曰く、「汝早く我が師父を送り出さば、再度門を破らじ」妖怪大きに怒り、長鎗を綽つて刺いて蒐る。行者棒を擧げて相迎へ、戰ふこと四五合にして、哩り敗けて逃走る。妖怪立住り、「我何ぞ汝に賺され、長追すべき。我先飯つて唐僧を刷洗して後、汝を捉ふべし」行者他を哩いて曰く、「好兒子、大看着、爰哩儞來」那妖行者に哩られ、嗔怒、一聲喝して面前に走り到り、鎗を上げて又刺いてかゝる。行者再び戰ふこと五六回、引返して逃さま、拳を開きて妖怪を招きければ、那魔忽ち迷亂せられ、我を忘れて追走る。行者は妖精を釣出して、早く身を菩薩の金光の影に隱しぬ。妖怪猶追進みて、睜眼に菩薩を見て、罵つて曰く、「汝孫行者を扶んとてきたれるか。そも如何なる菩薩ぞ」觀音是を聞召せども、一言も答へ給はず、自若として端坐し給ふ。妖怪大いに怒り、劈心に一鎗を擧げて刺し奉るに、菩薩早く金光と變じて、九霄空内に走り昇り、行者惠岸とともに、空中に在つて是を見給ふ。那妖笑つて曰く、「潑猴、我と幾度交戰うても勝つ事能はず、又去つて膿包菩薩を請ひきたるといへども、我が一鎗を吃して影も形もなく逃走せたり。しかのみならず、蓮臺まで舍下きたる可笑さよ。且、我上つて坐せん」とて、自ら菩薩を學んで、手を盤め脚を盤げて、蓮臺の中間に坐す。其時菩薩、楊柳の枝を持つて指招き給へば、今迄花彩祥光の千葉蓮臺、忽然として三十六把の天罡刀となり、妖怪が兩脚を穿ち、血流れて住らず。妖魔大いにおどろき、牙を咬んで疼痛を忍へ、火焔鎗を舍り、刀を將て搜り捨んとす。菩薩また呪語を念へ給へば、那刀、脚を貫きしまゝ鈎針のごとく曲つて、褪く事能はず。玆に於て、さしもの惡怪疼痛禁じがたく、哀み叫びて曰く、「菩薩免させ給へ。我眼有れども瞳なく、廣大の法力をしらず、多く无禮をなせり。願はくは垂慈を乞奉る。我性命をだに饒し給はゞ、再び惡業をなさず、法門の戒行を保ち候はん」といひければ、菩薩行者とともに九霄を下りて曰く、「汝今の言に背くまじきか」妖怪泪を流し、「命だに助け給はゞ、長く徒弟となり候はん」觀音其時、柳葉を將つて變じて剃頭刀となし、近く進んで妖怪が頂の髮を分剃つて、只三箇の搭を留下し、挽起で三箇の窩角楸兒となして宣く、「汝今より長く惡念を斷つて我に奉侍せよ。今より汝を善財童子となすべし」妖怪是を聞いて大いによろこび、「只望むらくは疼痛を饒し給へ」菩薩點首き給ひ、手を持へて指ざし、一聲呼び給へば、天罡刀すべて脫落ち、童子が身軀一點の痕もあらず。菩薩天罡刀を拾ひ收て、惠岸に命じ天宮へ送り返し給ふ。童子は野性いまだ定まらず、腿脚の痕なく疼止たるに付きておもへらく、他眞の法力にはあらじ、只一個の妖術のみ、何程の事あらんと、また鎗をとつて菩薩を劈ひ刺きかゝる。行者大いに怒り、鐵棒を上げて擊んとするを、菩薩早く制し給ひ、一個

の籠兒を將つて、童子を望み提げ給へば、忽ち變じて五個の籠兒となり、一箇は童子が頭に入り、四箇は童子が四肢に入る。童子おどろき、是を捜り捨んとすれども恊はず。急に呪語を念じ三昧火を吹かんとすれども、前に菩薩淨瓶の水を出し散し給へば、三昧火生ずる事能はず。童子も惘果てて忙然たるに、菩薩徐に訣呪念呪語へ給へば、童子が五體疼痛する事襞くが如くなれば、大いに慌て、耳を搓り腮を揉み、踵を攢めて打滾び、「饒し給へ〳〵」とて哀叫びてぞ悶ける。

○黑河妖孽擒僧去　西洋龍子捉鼉回

此時觀音菩薩、童子が悶亂するを耳にも入け給はず、行者に示して宣はく、「汝是を見よ。曾て我佛如來、我に金緊禁三個の籠兒を授け給ふ。緊籠兒は先に汝に與へ、禁籠兒は守山大神を收む。殘りし金籠兒は未だ授くべき者なかりしに、今這童子に授けたり」と說き給ひ、又童子に向ひ、「汝猶も惡念を斷たざるや。いかに」と責め給ふ。童子困み泣いて曰く、「菩薩饒し給へ。我此後は決して惡心を起し候まじ」菩薩聞き給ひ、御手に捻び給ひし訣をはらひ給へば、忽ち苦痛を忘れたり。童子靑きいきを吐き、手足の金籠を除き去てんとすれども、只一般の肉根を生じたれば、除く事能はず。行者笑つて曰く、「汝菩薩の戒行を受け、奉侍するとも、何の役にも立つまじ」と嘲るにぞ、童子また煩惱心を焦し、鎗をとつて行者を刺さんとす。菩薩早く楊柳の枝を擧げて他が鎗を打落し、一聲「合掌せよ」と宣へば、童子我しらず一雙の手を合せ、胸に當てしが、再び開かんとするに更に開く事能はず。玆において童子菩薩の不可思議法力を感歎し、頭を低れて心誠に正果に皈しけり。末世に至りても觀音菩薩の傍に侍立する善財童子とは、這紅孩兒が事なりけり。斯て菩薩行者に分付け、「汝早く洞中に往きて師父八戒を救ひ、西天に赴よ」と命じ給ひ、貂も善財童子を引領れ、祥雲に駕つて普陀洛山へぞかへり給ひける。却說沙僧は、久しく林間に有つて行者が音信を待てども、曾てかへり來らざれば、又奈何なる難にか遭ふらんと、安き心もなかりしに、忽雲頭より孫行者歡喜みて下りきたる。沙僧むかへて其故を問ふ。行者一々說しければ、沙僧大いによろこび、兩個澗ゐ跳り過ぎ、火雲洞に打入り、群妖を拂ひ盡して三藏八戒を解放し、觀音を請て妖魔を收めし事を一遍說きければ、三藏感泪にむせて南方を禮拜す。沙僧は洞内にて齋飯を安排へ、師徒飽まて吃し、夫より四衆號山を立出でて、西を志し、行く事數月におよぶ。

然るに一流の大河に行きかゝる。其水黑くして水勢箭を射るが如し。三藏馬をとゞめ徒弟に向

ひ、「這川何によつてか如斯く黑きや」と問ふ。八戒が曰く、「是家潑の靛缸するならん」沙僧が曰く、「不然。是源の里に筆墨を洗ふならん」行者腹を立て、「汝等亂道をいふ事を休めて、只師父を渡す工夫をせよ」三藏が曰く、「這河多少の寬ありや」八戒が曰く、「凡十里の寬あらん」三藏が曰く、「汝等三人計較して、誰にても我を駝うてわたれ」行者が曰く、「八戒師父を駝へ」八戒が曰く、「不好々々。もし我師父を駝うて雲に駕らば、三尺も地を放るゝ事を不得。常に人のいへる事あり。凡人の重さ傾山のごとしと。今師父を駝うて往かんとせば、我も轉連に成りて水に墜去ん」と。師徒是彼商議して居る所に、只看一個、上流より小船に棹下してきたる者あり。三藏よろこび、「幸かな、船きたれり。呼んで乘りわたらん事を憑め」沙僧手を擧げ、撑船的來て我等をわたし給へ。深く恩を謝すべし」と呼ぶ。梢公是を聞きて船を岸邊に近着けて曰く、「和尙們、我が這船小くして、多の人乘る事能はじ。各は多人數なれば、此船にてわたり給ふ事能はじ」三藏此船を見るに、一段の木頭を刻んで、中間に一个の倉口あり。纔に兩个の人を乘すべし。三藏徒弟と商議し、奈何せんといふに、沙僧が曰く、「兩個づつ乘つて二度にわたらば安からん。八戒まづ師父を扶けて船に乘り、先へわたれ。我は師兄と二番の船にのりて渡らん」八戒然りとして、三藏を馬より下し、船に扶けのせ、己も乘移れば、梢公撑開棹棹、稍中流にいたる處、忽ち一陣の怪風吹出し、浪を捲き波を翻して、遮天迷目十分利害。あはやと見るうちに、梢公はいふに及ばず、唐僧八戒船とともに浪に捲こまれ、影も形もなく成行きけり。行者沙僧は岸に有つて、大いに驚き慌けれども、方便なし。行者沙僧に向ひ、「我思ふに、那梢公初より不正の氣あり。他風を弄ひて師父を水中へ把去しならずや」といふ。沙僧が曰く、「師兄茲に馬と行李を守りて待て。我水中に入りて尋ねきたらん」と遂に偏衫をぬぎすて、寶杖を提げて水路を開き、進み走る處に、只見一座の亭臺有り、門外に八個の大字あり。「是衡陽峪黑水河神府」と鐫付けたり。然るに裡面に說話する聲聞ゆ。沙僧是を聞くに、他が曰く、「多年辛苦せしに、今日方によく這和尙を捉得たり。乃是十世修行の好人にて、他が一塊の肉を吃ふときは、便ち長生不老なりと聞けり。儞的等早く鐵籠を把て抬ちきたれ。唐僧を鐵籠の上にて蒸熟し、舅姑を請ひきたつて他とともに受用して壽を暖べん」と。沙僧是を聞きて大いに怒り、寶杖を掣げて門を亂打いて曰く、「潑物、性命を惜まば、快く我が師父を送り出し來れ」小妖驚き、斯と報じければ、妖怪急に一根の竹節鋼鞭を拿つて門に走り出で、喝して曰く、「汝何者なれば我門にきたつて亂打するや」沙僧が曰く、「汝潑怪、前に這虛を弄ひ、我師父を將て攝去れり。早く送り返さば汝が性命を饒さん」那怪呵々とわらひ、「這和尙の不知死活。唐僧は我拿

へて蒸熟にし、客を請うてともに下酒にせんとす。汝も又拿へて一發に吃はんや」沙僧暴燥、寶杖を輪して打つてかゝる。那怪物も鋼鞭を擧げて相迎へ、交戰ふこと三十餘合。沙僧暗に思へらく、這怪是我が敵手にあらず。迚も勝つ事を得じ。只僞つて他を引出し、哥々を呼んで打たしめんと、虛舍了て敗走る。那怪嘲らひ、「汝去らば去れ。我敢て追はじ。客を請うて汝が師父を蒸吃はん」とて早く門内に引入りたり。沙僧力なく、氣呼々々いひて水を跳り出で、行者を見て前事を說しければ、行者が曰く、「不知、他は何の怪にて、那の二个の舅は又何の怪ぞや」といふ事未だ不了に、只見灣裡より一個の老翁走り出で、行者が前に跪下て磕頭。行者が曰く、「汝は是何者ぞ」老翁泪を流して曰く、「我は這河の伯なり。那妖、舊年五月、西洋より這大湖にきたり、すなはち小神と交鬪。小神年老いて他に敵する事不能、終に他が爲に我黑水神府を奪はれ、奈何ともする事不能、逕に海内に往きて訴ふるに、他原來西洋龍王の聟なるが故に、不取敢却て他に讓與へて住ましむ。今聞く、大聖此にいたる。特にきたつて願奉る。望むらくは我が爲に寃を報じ給へ」行者が曰く、「然らば西洋龍王罪有り。沙僧は玆に待て、我海中に入りて先龍王を捉へきたり、他に敎て此怪物を擒へん」河伯深く大恩を感ず。行者すなはち雲に駕し、徑に西洋大海にいたり、避水の訣をむすび、波浪を開いて往く處に、忽ち一個の黑魚精に往逢ふたり。他一個の請書匣兒を捧げ居れり。行者耳裡より鐵棒を引出して一打に打殺し、匣兒を開き見るに、裡に一張の簡帖あり、上に、「愚甥龍潔頓首啓上二舅敖老臺下」と書きたり。すなはち開封して見れば、「今唐僧を獲得たり。實に世間に罕き物なり。甥あへて自ら不用。伏て思ふ、舅爺聖誕邇きにあり。因て筵席を設け、あらかじめ千秋を祝せんとす。萬望車駕速に臨行を願ふ」と書したり。行者打わらひ、「這厮供狀を我に遞與へたり」と袖了帖子めて行く處に、早く巡水夜叉望み見て、急に宮門に入りて斯くと報ず。龍王敖順忙しく出迎へ、問うて曰く、「大聖何のため此に來給へる」行者が曰く、「特來て汝に請つて酒を吃んためなり。先汝に見する物あり」と袖中より簡帖を取出し、龍王に遞與。龍王是を見て魂飛魄散慌忙て跪下いて曰く、「大聖まづ怒を休め給へ。那厮は是舍妹第九人目の兒。かの雨を錯行りたる罪此事初篇に有によつて魏徵に斬れたる者の、遺胄の舍甥なり。ゆゑに他を黑水河に遣し、性を養ひ眞を修せしむ。然るに不期もかゝる惡孽をなす。小龍すなはち人を差して、他をとらへ罪を謝せん」と、急に太子摩昂を換んで、五百の壯兵を附屬し、「汝往いて小龍を捉へきたれ」と命じければ、太子命を領掌す。玆において行者龍王に別れて、摩昂とともに兵を領し、黑水河の水府にいたる。摩昂まづ水族をいれて妖怪に面會せん事を請ふ。那怪心疑うて曰く、「我黑

魚精に投帖を持し差して二舅を請ふに、怎麽きたらず、却て表兄のきたるや。是かならず仔細あらめ」と銅鞭を帶して門に立出で、「表兄遠くきたるは何事の用ぞ」と呼はる。摩昂が曰く、「汝舅を請うて何事をなすや」妖怪が曰く、「小弟多く舅爺の恩を蒙り、此に住む事を得るといへども、露ばかりの孝順をもなさず。昨日幸に唐僧を捉得たり。他は十世修行の元躰、もし他が肉を吃ふ者は壽しと聞く。故に舅爺を請うて蒸吃んためなり」摩昂聞きて喝つて曰く、「汝不知死活、今いふ唐僧の大徒弟に、齊天大聖といふ人有るをしらずや。五百年前天宮を鬧せし豪傑なり。今は正果に皈して孫行者といふ。他が神通變化究りなし。汝早く唐僧八戒を饒し、厚く陪禮せば、幸にして性命を全うする事を得ん。もし迷をとりて半時にても遲滯らば、忽ち生を害れん」妖怪聞きて大いに怒り、「我は是汝と嫡親姑表なるに、汝却て猴の左祖つこそ安からね。よし汝は他を恐るゝとも、我は少しも恐れず。他もしきたつて我とよく三合を鬪はば、唐僧を還し得させん。もし鬪ふ事不能ば、我一連に他をも捉へて、一齊に蒸吃はん」摩昂罵つて曰く、「這潑呆、无禮なり。我今父王の命を奉けて、特汝を捉へに向ひたり」とて、遂に兩個英雄を逞うし、戰ふ事二十餘合。太子三稜簡を閃かして、妖怪が右の臂を一簡に打下すにぞ、妖怪堪らず地に跌倒れけり。其時海兵一齊に擁り、繩を將つて兩手を背に綁め、鐵索を將つて琵琶骨を穿ち、岸に引上りて行者の前に引居ゑけり。行者喝つて曰く、「汝が舅爺、汝を此に在せて性を養ひ身を存せしむるに、其令旨に不遵、怎麽水神の宅を强占、勢に乘じて兇行をなし、我が師父師弟を捉ふるは、つみ輕からず。我が此五棍の棒を吃へ」と睨付けければ、妖怪行者が勢に呑まれ、頭を叩いて罪を謝し、「大聖願はくは小竈が綁を饒し給へ。我河中にいたり、唐僧師弟を送りきたらん」摩昂が曰く、「大聖他を放し給ふな。水府へ回らば又惡念を生じ候はん」沙僧が曰く、「我他が水府をしれり。師父を迎へきたらん」と、河伯と打連れ水中に跳入つて、逕に水府にいたり、小妖を打退け、唐僧八戒が綑を解去り、水面に背出づる。八戒那妖怪が綁られて岸に在るを見、急に鈀を上げて擊たんとす。行者其手をとどめて曰く、「他罪ありといへども、敖家賢父子の情默止しがたし。汝他が罪を免せ」摩昂が曰く、「今既に師父師弟を救ひ得たれば、小龍は這厮を引連れかへり候はん。大聖は他が死罪を饒し給へども、家父は決して罪を宥し候まじ」行者曰く、「如此なれば、汝は他を領いてかへれ。令尊に拜上して、深く恩を謝せよ」と申しければ、摩昂唯々として那妖を引立て、徑に西洋大海にかへりぬ。扨河伯は、水府を奪かへしたるをよろこび、三藏師弟に深く恩を謝し、小神道を開き候はん」とて、すなはち法術を起し、水を阻め上流をせきとめければ、須臾の間に下流の水乾きつきて、一大路を

開きたり。三藏師徒大いによろこび、西岸に行著き後をかへり見れば、已に河伯の像はなく、上流の水漲り流れて、以前の大河とぞなりにける。

○法身元運逢二車力一　心正妖邪度二眷關一

話說三藏師弟、黑水河を過ぎて行く事多時にして、また春の天氣に値ひ、師徒路上の景色を遊觀し、笑語りて行く處に、忽ち數萬人の吶喊ぶ聲聞ゆ。三藏害怕れて曰く、「悟空、那响聲は那里なりや」行者が曰く、「老孫見とゞけ候はん」と、身を動して空中にあがり、淨眼に是を見るに、一坐の城地あり。那城門の外に一座の沙灘あり、數多の僧人攢簇りて車を扯く。原來是一齊に著力打號して齊しく喊ぶ聲なり。行者雲頭を下り往きて見るに、那車に裝みたるは、すべて磚瓦木植なり。又見る一道の夾背小路有りて、兩坐の大關を居たり。關下の路すべて直立壁を立たるごとく、崖陡くして、那車いかにも引上りがたく見ゆ。然に城門の裡より、搖搖擺て兩個の道士出來る。數多の僧徒道士のきたるを見て心驚胆戰て、力を加倍車を拽く。行者此躰を見て心におもへらく、我聞く、西方の路上、一個の道士を敬ひ僧を滅す國ありと云へり。必竟此里ならめ。我行きて他に問はんと、遂に身を搖して、變じて遊方水雲的となり、漁鼓を敲き、口に道情を唱へ、兩個の道士が前にいたり、身を躬めて曰く、「長道に問ひ申す事あり。這城中那條の街に出てか、貧道些の齋を請うて吃する事を得ん」道士笑つて曰く、「汝這野僧、不是ことをいふことなかれ。汝遠國よりきたりて、我が這里の事をしらずや」行者が曰く、「貧道何の子細をもしらず。願はくは說教へ給へ」道士が曰く、「此城の名を車遲國といふ。國王我們と親みあり。因に說示さん。二十年前、這里亢旱に遭ふ。國王沐浴し香を焚き、天を拜して雨を求む。正に倒懸の所に臨み、忽ち天より三個の仙長を降し、生靈を救ふ。我家の師父すなはち是なり。天師を號けて虎力大仙といひ、二師を羊力大仙といひ、三師を鹿力大仙といふ。皆よく風を呼び雨を呼び、石を點じて金となす。是國王の相敬ふ所以なり」行者曰く、「道長の師父如斯手段あり。貧道一面見る事を得べけんや」道士が曰く、「是最安し。我們公事を把了いて、すなはち汝を引いて師父に見えしむべし」行者が曰く、「道長何の公事かある」道士手をもつて那沙灘上の僧人を指定して曰く、「他が車に裝む處の的、我が家生活なり。先一應改めきたらん」行者又其ゆゑを問ふ。道士が曰く、「當年雨を求るの時、國王僧人を請ひて、佛を拜し雨を祈しむるに、那和尙等空經を念んで不濟事。後來我が師父一到に雨を喚び風を呼び、萬民の塗炭を拔濟了。其時朝廷惱りて、那和尙を无用の者なりとし、他が門を折了追

悟空
救車遲
國於飛
僧患
難

了、他が度牒御賜を我們に賜ふ。因て後邊の住房未完なるゆゑに、這和尚們に分付け、磚瓦木植等を拽運ばせ、房宇の起蓋をなす。只恐は、他が徒貪閑を疑ひ、我們兩們を著けて査めしむる所なり」行者說を聞了りて泪をながし、「貧道一個の叔父あり、出家剃髮して僧となり、這幾年家にかへらず。我思ふに、祖上の一派なれば、特きたつて尋ぬれども、未知。此衆僧の中にあらんも知りがたし。祈くは我往て査ん」道士が曰く、「罷々、我們兩個しばらく坐下ん。汝沙灘に去きて、我に替つて一々査只點へて、五百の名數あらばすなはちよし。中にもし汝が令叔あらば、我等道中の情をもつて、他を放ち去らしめん」行者恩を謝して道士に別れ、徑に沙灘に往き、雙關を過ぎて背夾を下るに、僧人一齊に跪いて頭を磕く。行者が曰く、「我は監工にあらず。親的を尋ねにきたる者なり」衆僧聞きて個々頭を出し面を露して、あはれ擇出されて遁れまほしき面色なり。行者大口開いて呵々とわらひ、「汝等衆不長俊、怎麽不去して那道士の傭工に與るや」衆僧等が曰く、「是には深き利害あり。這里の國王三個の道士を信仰し、我等を滅して寺を折了、度牒を追拂ひ、那仙長に賜ふ」行者が曰く、「那道士、何の巧術有てか國王を誘動すや」衆僧が曰く、「會燒して丹を煉り、石を點じて金となし、或は雨を呼び、或は風を呼ぶ。今觀裡に在つて晝夜看經、君王の萬年不老を祈る。是すなはち君心を感動せしむる所以なり」行者が曰く、「如此ならば、汝們何として不走や」衆僧が曰く、「敢て走りがたし。其ゆゑは、那道士君王に奏し、我們が畫了形圖を把つて四下に張掛け、官職ある者一个の和尚を拿得る時は、官三級を陞せ、无官の者一个の和尚を拿得る時は、賞金五十兩を賜ふ。此故に去脫るょ事能はず」行者が曰く、「既に如斯ならば、汝們死了罷」衆僧が曰く、「死的儘多し。我徒捉られしもの二千餘衆ありしに、艱難苦楚に堪かね、死するもの六七百人、其後また死するもの七八百人、只剩了て我們五百個、不得死、日に一度稀き粥を食ひて、夜は沙灘に臥して纔に眼を合すのみ。然るに一夜神人有りて、我徒に勸說いて曰く、汝等只管に死を要ることなかれ、しばらく苦楚を捱へよ。東土より西天に往きて經をとる羅漢の大徒弟、齊天大聖孫悟空といふあり、もつぱら不平の事を收む。遠からずして他這里へきたり、道士を滅し汝們をすくひ、再度沙門禪敎を國に弘むる時を得べし、と告げて、行方なく失せたり。因て我徒多くの憂苦を忍び、もつぱら齊天大聖のきたり救はんことを望むこと、赤子の母を戀ふが如し」とさめ〴〵と泣きてぞ語りける。

二編　卷之六

○三清觀大聖留名　車遲國猴王顯法

話說孫行者は、衆僧の說を聞きて、別を告げて遲に城門の口に來る。道士が曰く、「爾が令叔那裡に有りしや否や」行者が曰く、「在り。那五百人皆我が伯父なり。爾五百人をすべて放免せ」道士大いに惘れて曰く、「おもふに爾些風病しと見えたり。心を鎭めて亂說をいふ事なかれ。那和尙們は、國王の命にて、若一人を放つだにも、師父に遞了をつけて、疾病に付き補死狀といひ立て、纔に放す事を得べし。怎麽都て放す事を得ん」行者が曰く、「爾しかと放すまじきか」道士が曰く、「斷然放さじ」行者大いに怒り、耳朶の內より鐵棍を取出し、一晃ふつて道士の頭上より打下せば、只一棍に二人とも、頭を碎かれ、斃死したり。灘上の僧徒是を臨み見て、車を丟りて進み來り、道へかけ上り、惘れはて、「不好々々。皇親を打殺せり。他が師父必ず我們を捉へ、連坐に謀殺せん。是は怎了々々。只進み行きて此事を訟へ、わが命を助くるには不如」と慌惑ふ。行者が曰く、「爾們氣遣する事勿れ。我は是雲水全眞ならず。實は唐僧の大徒弟、齊天大聖孫行者なり。特來つて爾們を救はんとす」衆僧信ぜずして曰く、「不是々々。我們那老爺を認得れり」行者訝りて曰く、「我曾て爾們に不會。如何して認得るや」僧徒が曰く、「我們夢に一個の神將を見る。他自ら曰く、我は大白金星なり、爾們に那大聖の模樣を告知らせん。那孫行者は、磕額金睛、圓頭毛臉にて、貌雷公のごとく、金箍棒を使ひ、專ら人の災害を救ふ、と告畢つて夢醒めたり」行者聞きて大いにわらひ、「然らば我實の模樣を見せん」と遂に本相を現はしければ、衆僧見て倒身し、手を合せ拜みて曰く、「大聖我們を憐み、恨を雪ぎ災を消して給はれ」と泣訟ふ。行者點づき、「爾們大勢しばらく散じて、我が手足の邊に居る事勿れ。我明日國王に見えて、那道士們を滅亡させん」衆僧が曰く、「我等遠く逃走らば、恐らくは人に捉へられ、反て禍を惹出さん」行者が曰く、「然らば我爾等に護身法を與ん」と、遂に毫毛を一把拔いて、一人に各一根を分與へ、扨教へて曰く、「爾等此毛を無名指の甲の裡に藏し、拳を捻つて只管に路を走れ。もし人有りて捉へんとする時、卽ち拳を放き、一聲大聖と呼べ。然らば到りて爾們を護らん」衆僧聞きて、試に那毛を甲に隱し、手を啓いて、「齊天大聖」と一聲呼ぶに、只看、一人の行者面前に現れ出で、手に鐵棍を執つて站みたるは、千軍萬馬も近付きがたく見ゆ。亦拳を捻れば、忽ち行者の像手中に收まりぬ。衆僧此奇特を見て悅びいさみ、

拜謝して、各〳〵一齊に逃去らんとす。行者暫しと呼留めて曰く、「爾們遠く遁るべからず。我那道士を滅さば、城外に榜をいださん。其時回り來て我が毫毛を還せ」衆僧奉手、四方に散じ去りにけり。

却説唐僧は、行者が久しく歸り來らざれば、八戒沙僧と俱に城邊にきたり見るに、行者いまだ散殘りたる和尚數十個の裡にありて、三藏のきたるを見、急に僧徒を引きて師父を迎へ、上項條を說しければ、三藏半は悅び半は恐れ、此事如何あらんと危めり。那和尚等が曰く、「活佛放心し給へ。明日早朝、大聖かならず處置あらん。我們は是、城裡の勅建知淵寺の僧人なり。我が寺は先王大祖の御建立故に、いまだ曾て折毀ず。老師父を請うて寺內に安寐まゐらせん」三藏聞いて大いに悅び、馬を下りて城裡に入り、不多時三門に至り、正殿に上りて三藏佛前に禮拜す。此間に、衆僧去て齋を安排へきたりぬ。師徒十分に吃し畢り、方丈に入りて安寢しけり。斯て時二更に及ぶ比、行者ふと眼を覺すに、吹打聞えければ、急に衣服を穿了、跳て雲中に上り、是を見るに、是三淸觀に、那三個の道士法衣を披了、禳星し、兩邊には七八百の徒弟寄集り、鼓を司し鐘を司し、香を待きて表白するなり。行者看了りて雲端を按落り、悟淨を呼ぶにぞ、沙僧醒來つて曰く、「哥々、還曾睡らざるや」行者が曰く、「爾起ききたれ。一个の受用をさせん。

這城裡に一座の三淸觀あり。觀裡の修殿の殿上に、許多の供養饅頭あり。また大きさ斗許づつ、又五六十斤の燒餅もあり。糊物無數、果品新鮮なり。我と爾と和にて受用せん」八戒睡夢裡に是を聞き、醒來つて曰く、「哥々、何ゆゑ我をも帶挈き給はざるや」行者目語し、「爾喧しくいふ事なかれ。師父の睡を驚さば妨あらん。只我に著きてきたれ」といふ。兩個悅びて衣服を套上、悄々門を出で、雲に駕りて逕に三淸觀にいたり見るに、燈を點し連ね、星のごとくなれば、八戒既に入らんとするを、行者扯住、且く忙ぐ事を休めよ。我方便あり。他等が退散するを待ちて下らん」と念訣念咒て、巽地の方に向ひ一口の氣を吸ひ吹下せば、忽ち一陣の狂風となりて、三淸殿上に吹きいたり、數萬の燈燭を一齊に吹消したり。衆の道士大いに心おどろき胆戰を見て、虎力大仙が曰く、「徒弟且く散ぜよ。この陣風凶多く吉小し。明早餘の經を念じて數を補はん」と。是によりて衆道士各散じ回りぬ。行者仕遂したりと、八戒沙僧を引いて殿上に入る。八戒彭子早く燒餅を拿つて張口吃ふ。行者の曰く、「上座に座したるは是元始天尊、靈寶道君、太上老君の木像なり。我們三人、都て這すがたに變じて安穩と吃はん」八戒聞いて忽ち高臺に爬上り、老君の像を把て拱下し、己太上老君に變ずれば、行者は變じて元始天尊になり、沙僧は靈寶道君となり、各原像をとつて推下す。行者が曰く、「這聖像を玆に置き、

道士倘來つて是を見ば、巧謀あらはれん。八戒往きて門口の大池の裡へ丟込みきたれ」獸子心得、跳下りて、三個の像を把つて肩に膊上、池水へ抛込んで殿上へはしり回り、依舊老君に變じ、三個坐して供物をことゞく盡情受用。行者は未だ幾干も吃ざるに、那二個は、風の雲を捲くがごとく、悉く吃盡しぬ。玆に東廊下に、一個の小道士潛み居たりしが、鈴を殿上に丟れたる事を思ひ出し、殿上へ探りきたり、手鈴を摸取り、頭を傾けて聞くに、三聖の像に呼吸の聲あり。小道士仰天して害怕き、急に走り出でしが、一个の荔の核を踏みすべりて、撲的と跌び、一聲噹的と響きて鈴を粉碎とす。八戒忍へかねて呵々とわらふにぞ、小道士益〻謔得てて、一歩一跌撞到て方丈の外へ逃出て、叫んで曰く、「師公きたり給へ。〳〵」と。三個の老道士、卽ち門を開いて、何事やらんと問ふ。小道士戰々兢々曰く、「小弟殿上に鈴を忘れたるに依り、尋ねきたらんとする時、忽ち人有りて呵々とわらひ候。更に何者なる事をしらず候へども、此旨達し候」と顏色如菜いひければ、老道士急に令を傳へて、衆道士を呼起し、掌燈を拿つて正殿に進み入る。行者以下三個は、是を見て、就板著臉ごとく動身もせず坐し居たり。時に虎力大仙、燈を點じ前後を照し見て曰く、「歹人一個も有る事なし。然るに何者か此供獻を把つて都吃了たるや」鹿力大仙が曰く、「小弟おもふに、是我徒虔心に誦經する故に、天尊聖駕を降臨して這供養を受用し給ひしならん」羊力大仙が曰く、「既に如此ならば、仙駕未だ皈り給ふまじ。我們拜して些の金丹水を求めて朝廷に進めば、是我們が大功ならん」虎力大仙聞いて曰く、「此說的是なり。徒弟們急ぎ動樂を奏せよ」と令して面白く囃さしめ、三個の道士は、法衣を披して、塵を揚げつゝ舞踏り、拜伏して、「願はくは天尊些の金丹聖水をたまへ。朝廷に進め獻らん」と一心不亂に祈るを見て、八戒行者に耳語いて曰く、「我們供物を受用せしは美かりけれども這般なる祈を受けて答應のしやうなし。何としてかよからん」行者暗に喝つて曰く、「爾何事をもいふ事なかれ、たゞ我に憑よ」とて聲を麗して曰く、「仙輩且く拜祝する事を休よ。我們蟠桃會より直にきたりたれば、曾て金丹聖水をもたず。後日に再びきたりて垂賜へん」那大小の道士、木像の說出したるを聞いて大いに悅び、「活天尊臨降給ふ。かならず放す事勿れ。好歹に長生の法兒を求めん」とそより立つ。鹿力大仙また拜して曰く、「是非にすこしの聖水を留めて弟子們にあたへ、延壽長生ならしめ給へ」と祈りて休まず。行者が曰く、「然らは力なし。我些の聖水を與へん。去ながら、恐らくは爾等が苗裔を減すにいたるべし」衆の道士頭を叩いて曰く、「子孫の事は力なし。弟子等斯まて恭敬心を念ひやりて、些の聖水をたまへ。廣く道德を宣べ、國王に奏して普く位門を敬ひ申すべし」行者が曰く、「此上は些の聖水を與へん。器物

をとりきたれ」衆道士大いに悅び、稽首謝恩、那三個の老道士、或は大鉦を抬ち、或は砂盆を取り、或は花瓶の花を捨移して、三人の前に置く。行者が曰く、「爾等ことぐく出去て格子を掩へ。少しにても覗見て天機をもらす者あらば、眼前に天罰を受くべし」と怕しければ、衆道士敬んで命に順ひ、一齊に出退きけり。其時行者立起り、虎皮の裙を掀著り、一个の花瓶へ臊溺を垂込みけるにぞ、八戒も同じく犢鼻褌をまくりて砂盆の中へ溺了む。沙僧も鉦の中へ溺を撒了ひ、依舊坐し居たり。行者呼んで曰く、「仙輩きたつて聖水を領けとれ」其時衆道士格子を推ひらき、頭を叩き恩を謝し、鉦瓶砂盆を、都て抬出して一處に集め、徒弟に命じて鍾子を取來らせ、虎力大仙先一鍾汲みて一口呷下、只管唇を抹め、嘴を努めて居たりければ、鹿力仙が曰く、「師兄、好吃や否や」虎力が曰く、「甚だ不好。些酣醂味あり」羊力また一口呷ひて曰く、「些猪の溺のごとく臊氣あり」行者是を聞きて、今は事露れん事を察し、悟淨八戒に曰く、「一個の手段を弄ひて箇名を留めん」と、忽ち大に叫んで曰く、「汝等たしかに聞け。是は誠の天尊ならず。大唐の僧官、旨を奉はり西天におもむく路上、當國にきたりしに、おもはず供養を吃ひ、嘻々。今汝等が吃ひしは、其麽の聖水とか思ふ。是我等が一溺の尿なり」と呼はり、三個ひとしく呵々とわらふ。道士等大きに怒り、一齊に叉鈀掃箒を動し、瓦塊石頭を投付け、紲

捉んとぞ鬪きける。行者八戒沙僧は、早く殿外に闖出で、雲に跳り駕つて、徑に智淵寺へ回り、敢て師父にも告ずまた眠に付きけり。

扨次の日早朝に、三藏起出でて徒弟を呼び、「我關文を換來らん。汝等も來れよ」と命じければ、三人ともに師父の跡に隨ひ行く。三藏逕に五鳳樓に至り、黃門官に對し、禮をなして姓名を報じ、轉奏を憑みければ、黃門官則ち是を奏す。國王奏を聞いて曰く、「這和尚死を要めてたづね來れり」とて、門を開いて唐僧等を宣入る。師徒階の前に排列び、關文を國王に呈す。其折から、黃門官きたつて奏して曰く、「三位の國師來れり」と。國王奏を聞いて急に龍座を下り、身を躬めて上殿へ迎ふるに、三個の道士、國王を見ても敢て禮を行はず、甚だ慢れり。國王道士に對して曰く「國師朕が未だ請じ奉らざるに來給ひしは、何事の有るや」虎力大仙が曰く、「一大事の候へば告奉らん爲來れり。夫は先さし置き、那階前に立ちし四個の和尚は、那里より來り候者ぞ」國王が曰く、「是唐土大唐の差、西天に往きて經を取來らんとて此に到り、關文を換ん事を願ふなり」道士大いに笑ひて曰く、「我他が事を奏せんとて來れるに、不圖他們此に在るこそ幸なれ」國王驚いて曰く、「他が徒何に因て、尊顏を冒し罪を得たるや」道士が曰く、「陛下は未だ知り給ふまじ。他昨日きたつて、城外に於て兩個の徒弟を打殺し、五百個の囚僧

を走らせ、剩へ三清觀に忍び入りて、三聖の像を毀壞、御賜の供物を偸み吃ふ。我等は只天尊の下降り給へると心得、金丹聖水を求めて陛下に奉らんと思ひ候に、那斯器の中へ小便を遺れて我等を嘲弄し候。陛下宜しく是等の罪を糺し給へ」國王聞いて大いに怒り、武士に命じて四衆を誅せんとす。行者叫んで曰く、「陛下且く逆鱗を息て、貧僧が啓奏を聞き給へ。昨日我等他が兩個の徒弟を打殺せし覺なし。亦囚僧を放せし事は、猶々知り候はず。其上三清觀とやらんへ忍込み、供物を偸み尿を垂しなんど、誠に見證なき无實といふべし。我們は東土の產にて、初て此國にきたり、未だ街道だもしらず。況や其三清觀に於てをや。陛下是等を以てもよく察し給へ」國王是を聞いて更に決斷定まらざる處に、又黃門官來つて奏すらく「許多の鄕老きたりて、轉奏を願ひ候」と啓す。國王聞いて、卽時に命宣て其奏問をとふ。衆民頭を叩いて曰く、「一春雨不降、夏にいたりて乾荒甚しく候間、願はくは國師を請じ奉り、雨を祈りて、普く下民の塗炭を濟ひ給へ」國王奏を聞いて三藏們に向ひ「朕道士を敬ひ僧を滅す事は、當年乾荒の時、僧に命じて雨を要めしむるに、更に一點の雨をも降し得ず。然るに天幸に國師を降して雨を祈るに、忽ち其驗を現はし、民の塗炭を援く。爾今遠く來つて我國師の顏を冒す。卽時に誅戮すべけれども、姑く其罪を恕さん。汝よく國師と行力を競べ、雨を要んや麽や。もし雨を祈り得るならば、其罪を饒し、關文を換へて西天に赴かしめん。將また雨を得る事能はずんば、汝を典刑せん」行者答へて曰く、「是何より易き事なり。早く國師と勝劣をくらべしめ給へ」國王其時衆官に命じ、壇場を打掃させ、親は五鳳樓に登つて是を觀看す。斯て虎力大仙まづ上壇へ昇らんとするを、行者引住めて曰く、「先生今日雨を祈る。望むらくは明白に講を得よ。方知雨下らば是卿が功績なり」虎力嘲笑うて曰く、「われ壇上に一度唱ばゝ風起り、二聲唱ばゝ雲起り、三聲に雷なり、四聲に大雨降り、五聲にして雨晴ん事、何の疑かあらん」行者笑うて曰く、「妙々、呵果てたり。早々請了々々」虎力其時拽開に歩みて壇に上りければ、衆人息を詰めて是を見る。虎力は壇上に立定ちて、小道士に符を棒げさせて周に立たせ、躬一口の寶劍を執り、呪語を念へ、一道の符をやきて一聲令牌すれば、忽ち半空のうち悠々と風色飄りきたる。行者是を見て、一根の毫を拔きて變じて我假身としつ、唐僧の傍に立たせ、本身は走つて空中に至り、高く「司風々々」と呼ぶ。風婆々慌てて布袋の口を捻住め、巽二郎は口繩をとどめて、行者が前にきたり禮をなす。行者が曰く、「我唐僧を保護して、西天にいたり經をとらんとす。然るに今計らず妖道と勝を賭にして雨を祈る。汝怎麽老孫を助けずして却て妖道を助るや。汝今風を把收めず、些の風兒にてもさゝば、我鐵棒をもつて汝を二十棒打たん」司

三道士阻唐僧師弟

風大いに恐れ、「我敢て風を吹かし候はじ」といひて走り去る。道士は斯ともしらず、又令牌を執り、符を燒きて撲と下一打てば、推雲童子忽然として雲を佈き、作霧郎君霧を起し來る。行者急に喝止め、前のごとく分付ければ、推雲童子雲を收めさる。道士は既に二度まで手をとりて大いに焦燥、劍に仗り髪を散し、咒を念じて符を燒き、また令牌を一下すれば、只看鄧天君、雷公雲母を領いて當空に到る。行者又喝止めて前のごとく令し、扨問うて曰く、「那道士、そも何の法をなしてか、天君かく肯ずるや」鄧天君答へて曰く、「那道士、五雷法をならひ得て、符を燒き玉帝を驚かす。因て我們旨を奉はり、雷電を助け雨を下さんとし候」行者が曰く、「既に如此ならば、且く住りて老孫が行ふ事を伺ひ待てよ」鄧君唯々として、雷電を鳴閃めかさず。玆に於て道士は案に相違し、愈加著忙、また符を燒き咒を念へて令牌を打下すに、半空の中、四海の龍王ひとしく來り集りけるが、行者を見て急に上禮を施す。行者また前のごとく說了りて雨を止め、扨いひけるは「那妖道が四聲の令牌已に畢る。是より老孫が輪到なり、衆列俱に我を助けよ。我棍を上げて爲號する時、一指に風至り、二指に雲を佈き、三指に雷電を發し、四指に雨を下し、五指に天晴れ日出づべし。若是に違ふ者は、我が鐵棍を吃はすべし」と分付けければ、衆神命を領して去る。行者今は心易しと雲頭下りて、毫を把つて上身に收め、高く呼んで曰く、「先生々々〜、四聲の令牌ともに已に呼終ると雖、更に風雲雷雨なきは何事ぞ」と嘲笑ふ。虎力大いに面目を失ひ、すごくと壇を下り、五鳳樓に進み昇る。國王問うて曰く、「國師、已に令牌四聲に及びてなほ風雨なきは何故ぞ」道士が曰く、「今日は龍神他行して家に在宿さず。故に雨降候はず」行者階下に在りて是を聞き、大いに叫んで曰く、「陛下、道士が忘言に迷され給ふな。諸神みな在宿すといへども、只是國師の法術靈ならざるに因つて、雨風降らず。貧僧が師父一度祈らば、風雲雷雨須臾に到り候べし」國王が曰く、「如此ならば、早く壇に上り、祈つて雨を降らせ、我玆に在つて親しく看ん」三藏行者が袖をひかへ、耳語きけるは、「我敢て雨を祈るの法を知らず。汝みだりにいふ事勿れ」行者が曰く、「心を勞し給ふまじ。只管經を念み給へ。我宜しく手段あり」と。玆に於て、三藏壇に上り經を念ず。行者師父が經を念盡るを聞きて、一棍を上げ空を臨んで一指を揮れば、俄然として風吹きいだし、砂を飛し石を走らす。行者また棍をとつて一指すれば、只看昏霧朦朧として濃雲たなびき起る。又一指すれば、雷响電閃、大地も裂け山岳も崩るゝが如し。又一指すれば、忽ち大雨盆を傾すがごとく、辰の剋より降いだして午の剋に至る。國王旨を傳へて、雨を彀了と有りければ、行者就ち棍を把つて空に向ひ一指すれば、霎時の間に雷止み風息み、雲散じ雨收りて、依舊日輪

杲々として曦き出でたり。國王大いに其道德を感じ、駕を促して宮中に回り、已に關文を換へて唐僧を放し去しめんとするに、那三個の道士國王を制し、「陛下且く關文を換へ給ふ事なかれ。一言申す事有り」とぞ妨へける。

○外道弄レ强欺ニ正法一　心猿顯レ聖滅ニ諸邪一

此時國王道士に向ひ、其故を問ふに、道士が曰く、「陛下よくおもひ給へ。我們這國にきたりて政を保る事二十餘年なり。然るに今這和尙、法力を弄ひて我們が聲名を敗る。陛下只一場の雨をもつて死刑を恕し給はん事、いと輕忽のはからひなり。我望むらくは、再び賭をなして勝劣を試みん事を欲す。願はくは他にも命じ給へ」國王また那に迷はされて、關文を收めて曰く、「國師の望、何事か協へざらん。さばれ此度は何を賭にせんとするや」虎力大仙が曰く、「我他と坐禪を賭にせん」國王が曰く、「國師の見大に差へり。那和尙は元來禪敎の出身なり。汝怎麼他に勝つ事を得ん」虎力が曰く、「我がいふ坐禪は是別趣なり。異名を呼んで雲梯顯聖と做す。百張の卓子を要めて五十張を一禪臺となし、一張々々たゝみ重ね、一朶の雲頭に駕し、臺上に上り坐して、約をさだめ幾干時動かず坐禪する事に候」國王よろこび、三藏に向ひ問うて曰く、

「我が國師汝と雲梯顯聖の坐禪を賭にせんとす。汝において奈何」三藏行者に耳語いて曰く、「我坐禪は會ふべけれども、雲頭に駕ること能はず。是をいかゞせん」行者が曰く、「師父たゞ命に應じ給へ。老孫師父を送りて雲上に駕んこと、何の難き事あらん」三藏是に依つて對へて曰く、「貧道雲梯顯聖の坐禪をなし候はん」國王聞いて、官人に命じて、殿前の左右に兩坐の禪臺を高く設けしむ。虎力大仙其時殿を下り、身を一度縱して、一朶の祥雲を踏んで逕に西邊の臺に上りて坐す。行者是を見て、一根の毫を抜きて、變じて我が假像となし、八戒沙僧二個を五色の祥雲に化作りて、三藏を駕せて空中へ撮起げ、逕に東邊の臺上に至り坐せしむ。斯て兩個坐する事多時して、勝負を分たず。此時行者心中に一个の計を生じ、身を變じて蟭蟟虫となり、飛んで西邊の禪臺にいたり、又變じて一條七寸計の蜈蚣となり、逕に道士の鼻へ入りければ、虎力大いに驚き、忽ち法力を失ひ、臺上より眞逆に落ちて、幾乎絶死したり。小道士們慌騷ぎ、救起して藥湯を服さしめて介抱す。國王も大いに驚き、華文殿へ扶入れしめ、醫官に命じて保養せしめらる。行者は祥雲に駕りて師父を駄下し、階前に至つて曰く、「我が長老已に勝を得たり。快く關文を換て出し給へ」と叫ぶ。鹿力大仙又奏して曰く、「陛下、先他に關文を與へ給ふな。我が師兄頃日風疾たり、是に依て高き所に到る時は、天風に冒されて、おもはず

唐僧に負けたり。我また唐僧と一个の賭をなさん」國王悅び、其賭の趣意を問ふ。鹿力が曰く、「我が賭を號けて隔板猜枚と云ふ。是別事ならず。筐の裡に物を入れ猜し當る事なり。唐僧よく猜し得ば、罪を免して關文を與へ給へ。もし猜し得ずんば、斷罪して我師兄の恨を雪がん」國王聞得て、旨を傳て一個の硃紅漆の櫃を取よせ、內宮に命じて、後宮に入り娘々をして寶貝を放めて殿前へ抬出させ、唐僧道士に令を下し、「櫃の裡なるは何物なるや猜し中よ」と命ず。行者は變じて蟭蟟虫となり、唐僧の頭上にとまり、暗に曰く、「師父心易くおもひ給へ。我飛去つて見きたらん」と。遂に飛んで櫃の脚の下にいたり、一條の縫兒より鑽入つて是を見るに、山河社稷襖、乾坤地理の裙なり。行者散々に抖亂り、指を咬んで一口の血を噴きかけ、變じて破爛流丟と一口の錘となし、又縫裡より鑽出で、飛びきたつて三藏の耳朶の上にとまりて曰く、「櫃の裡なるは破爛流丟と錘なり」と敎ふ。三藏聞いて前に進み出で、「貧僧よく猜し候はん」といふ、鹿力喝つて曰く、「我先猜し中ん。那の櫃の裡なるは、山河社稷の襖、乾坤地理の裙なり」三藏が曰く、「我が見は是と大に違へり。只破爛流丟と一口の錘を入れられたり」國王大いに腹を立て、「這野僧、朕を悔りて寶なしとするや。甚麼流丟錘の如きものを入れんや」三藏が曰く、「陛下まづ櫃を開き見給へ。若是寶貝ならば、貧道罪に伏せん」國王、此上はとて櫃を開しむるに、果然唐僧の猜せし如くなれば、國王大いに怒り、「誰かかょる物を入れおきて朕を辱しむるや。待々、我自ら一個の寶を入れて猜させん」と、又櫃を後宮へ抬入れさせ、國王御花園に下りて、一个の桃を摘つて櫃の內に藏し、官人に命じて殿前へ抬出しきたらしむ。行者また飛去つて縫兒より鑽入りて見るに、大きなる桃子なりしかば、卽ち原身を現はして、櫃の內に坐して桃を吃了、核ばかりを遺しおき、又蟭蟟虫となり、飛出でて三藏が耳朶の上にとまり、櫃の裡なるは桃の核なる事を告げけるにより、三藏また猜せん事をもとむ。羊力が曰く、「我先猜せん。櫃の內なるは一つの仙桃なり」三藏が曰く、「是は桃にあらず、桃の核を入れられたり」國王心中に唐僧が猜し不得を悅び、官人に命じて櫃を開しむるに、果然桃の核なれば、大いに驚き、我親ら桃を藏し入れ置きしに、何故核ばかりに成りしにやと、更に不可解、惘然いふ處をしらず。此時虎力大仙、保養を加へ衣服を改めて出來り、殿に昇つて曰く、「這唐僧搬運抵物の術ありとおほえ候。我其術を破り候はん」と乞ひて、櫃を後殿に抬入れさせ、心中におもひけるは、他よく物を抵得術有りとも人身を抵得事は能はじ、と思惟し、一個の小道童を櫃の內へ入れて抬出させ、三藏を呼んで猜させんとす。行者又例のごとく飛去り鑽入つて見るに、一個の小道童なりしかば、身を搖がして一變して虎力仙となり、櫃の內に進んで曰く、

「我遁法を以て玆に來る事別事ならず。おもふに那唐僧、必ず是小童なりと猜し當ん。よつて儒が頭を剃りて和尚となし、我和尚なりと云猜てゝ他に勝ん」童子が曰く、「只師父の意に憑さん。兎も角もして他唐僧に勝ち給へ」と承引くにぞ、行者悅び、鐵棒を變じて剃刀となし、童子の髮を剃落して曰く、「頭は已に和尚となれども、未だ衣裳は道服なり、快く脫ぎて出せ」、我是を變ぜん」那童子唯々として、穿處の葱白色の鶴氅を脫ぎて出しければ、行者一口の仙氣を吹きかけ、變じて黃色の直裰となして他に穿せ、又一棍の毛を拔きて、變じて木魚となし、他に授けて曰く、「爾此櫃の內に居て、もし道童と呼ぶ時は、千言するとも出る事勿れ。若一聲和尚と呼ばゝ、自ら蓋を開いて、木魚をたゝき、口の裡に阿彌陀佛を念じて出來れ」と命じ、又蟭螟虫と變じて鑽り出で、去つて三藏の耳朶にとまり、「櫃の內なるは和尚なり」と敎ふ。時に虎力三藏に向ひ、「汝櫃の中なる物を猜よ」といふ。三藏が曰く、「是何より易し。櫃の內なるは一箇の和尚なり」と只一聲呼ぶところに、那童兒、頂をもつて櫃の蓋を開き、魚鼓を敲き、佛名を念へて出來る。三人の道士案に相違し、惘惑ひ、口を箝んでいふ處をしらず。國王が曰く、「這和尚の法力、神鬼の輔有るに似たり。今は他に關文を換與へん」虎力大仙また奏すらく「陛下まづ其ことを待ち給へ。我們別に一奇藝あり、他と再び此賭をなさん」國王の曰く、「甚麽の

奇藝なるや」虎力が曰く、「我們兄弟三人ともに一術あり、頭を砍つて再舊のごとく還接ぎ、腹を割き心を剜ちて再ひ疵全く癒え、油を鍋に滾してよく洗澡す」國王大いに驚き「此事都て死を尋むるの路なり。恐らくは危からずや」と難ず。虎力がいふ我等法力有りて些も身を過つ事なし。陛下心を易んじて快く用意をなし給へ」と申しければ、國王是非なく三藏們を呼んで曰く、「國師汝徒を放す事を肯ず。今一度賭をせん事を望む。則ち砍頭剖腹下、滾油洗澡するを賭にせんとす。爾よくせんや否や」行者本相を現して曰く、「貧道此三事を恐れず。望に任せて賭をなさん」と應ず。是によりて國王旨を傳へ、行者を捉へて敎場に到つて頭を砍らしむ。劊子手命を得て、行者を綑り、劍を拔き聲をかけて、丁と首を斬りおとし、三四十步も踢去ると ころに、行者が頭の腔子中より更に血出でず、只きく肚の裡に叫聲あり。須臾して、頭おのれと回りて腔子中に接合ひ、些の痕をも殘さず舊のごとし。監斬大いにおどろき、急ぎ朝に入りて斯と奏聞す。行者は拳を捻つて綑繩を掙斷り、走つて殿前に至り、「我首すでに砍つて又接ぐ事を得。早く國師の頭をも砍つて試みよ」と叫ぶ。虎力心得たりとて場所に至れば、劊手また虎力が首を砍落すに、是も腔子裡より血出でず、あはや頭還りきたらんとす。行者早く身を變じて一羽の大鳥となり、虎力が頭を啣んで御水河の深淵に落し沈む。虎力が骸、胸の裡より三

聲連けて叫べども頭かへり來らず、遂に腔子中より鮮血流れ出て、身體倒れ死す。衆人驚いて是を見れば、一隻の黄毛の虎なり。監斬走りて朝に入り斯と奏しければ、國王色を失ひ、驚き騒ぐ事大かたならず。鹿力が曰く、「師兄死せりといへども、黄虎となるべきやうなし。是必ず那和尚掩様法をつかうて、斯のごとく見するならん。我他と破腹の賭をなさん」國王聞きて劊子を呼び行者を拿へ去らしむ。行者が曰く、「拿ふる事勿れ。我自ら往き自ら腹を裂きて臓腑を洗刷せん」と搖々擺々歩みて遥に教場に至り、身を大椿の樹に靠り、衣帶を解開き肚腹を露出す。那劊子、短刀を把つて行者が心下に突立て、臍下まで斷割けば、行者双手を以て肚を爬み開き、腸臓を拿出し、一條々々理勾事多時して、又依舊腹に收め、一口の仙氣を吹けば、依然として一點の痕をとどめず。監斬駭き惘れて、此よしを回り奏す。國王益おどろき騒ぐ所へ、行者走り來り、「鹿力大仙肚を割いて見せよ」と請ふ。鹿力が曰く、「我又汝に不輪」と搖々擺擺と歩みて教場に至り、劊子に命じ腹を割開かせ、腸を把出す。行者早く變じて一羽の鵰鷹となり、翼を翅きて飛來り、鹿力が五臓をことゞく抓で、其所ともしらず捨置きけり。是に依て鹿力大仙、腹破れ屍倒れて死するを見れば、是一頭の白鹿なり。監斬慌得て又斯と報ず。國王大に怕れ恠しみて心決せず。羊力大仙奏して曰く、「師兄二個とも死して獣の形を露出す。是皆那和尚法術を弄うて人目を惑はすと覺えたり。我沸油の賭をなし、師兄の仇を報ぜん」と望みければ、國王又令を下し、一個の大鍋に滿々と香油を貯へ、烈火を燃して油を滾燒らし、行者を呼んで、「汝快く鍋の中に入りて洗澡せよ」と望む。行者一議にも及ばず、布の直裰を脱ぎ、虎皮の裙を解き、跳つて鍋の内に入り、翻波鬪浪する事、さながら水を沐るがごとし。八戒見て沙僧が袖を引き、「這老猴、這般の奇技あらんとは思ざりき」と喞々、兩個只管に誇奬す。行者是を見て心疑ひ、那獣子我を嘲り笑ふかと心得、一驚を吃はせ赦亂させんと巧み、遂に油鍋の底に沈み、變じて棗の核となり、再度浮み出でず。監斬官是を見て、大いに悅び、「那和尚滾油の中に烹死し候」と奏す。國王も大いに悅び、「急ぎ骸骨を撈上て取り來れ」と令しければ、「心得候」とて、一把の鐵笊籬をもつて油鍋の裡を撈すといへども、笊籬の目荒ければ、行者孔より漏落ちてすくひ得ず。依て又奏して曰く、「那和尚、骨まで幼嫩溶化了」と申す。國王曰く、「然らば、再び一箇の和尚を烹殺せよ」と命ず。兩邊の官人、八戒が面の兇なるを見て、先八戒を揪へて綑らんとしければ、八戒大いに慌て旬つて曰く、「此弼馬溫の潑猴、よしなき賭をなして油鍋の焦となり、尚我をも殺さんとするは何事ぞ」と亂跳で悲しみ啼く。行者鍋の底にて聞き、「獣子よ、亂罵な」と呼はり、本相を現して跳り出づ。諸人大いに驚き、急に朝に入り

「和尚猶死せず。油鍋より跳り出で候」と奏する間もなく、行者衣服を穿て走り來り、羊力に向ひ、「汝も油鍋に入りて洗浴せよ」と望みければ、羊力殿を下り、衣服を脱いで油鍋の内へ跳入り、洗澡する事行者に劣らず。行者油鍋の邊に行き、手を伸べてさぐり見るに、那滾油都て氷冷となれり。心中におもふやう、是必ず冷龍此に在て護持するならんと、急に毫毛を拔いて假身となし、本身は空中に跳上り、咒詛を念じて北海の龍王を喚寄せ、問うて曰く、「怎麼妖道を助けて、鍋の底に冷龍を住めて、滾油を冷油となすや」龍王が曰く、「小龍敢て他を助けず。大聖知り給はずや。這孽畜、苦心修行して那冷龍を自ら煉的作、此技をなす處なり。小龍今他が冷龍を把つて收去らん。然らば他が術盡きて、骨碎け皮焦げん」行者が曰く、「趂早收了めよ」龍王諾して一陣の狂風と化し、油鍋のほとりに到り、冷龍を捉つて北海に回りければ、羊力滾油の内に有つて爬出づる事能はず、七顚八倒して、須臾の間に骨脱け肉爛れて死しけるにぞ、監斬官急ぎ朝に走り行きて、羊力國師油鍋の内にて死し給へり」と奏しければ、國王聞いて、聲を放つて大いに哭く。不知其後の事迹は、下回を見て分解すべし。

二編　卷之七

○聖僧夜阻二通天水一　金木垂レ慈救二小童一

話説那國王は、三國師の死亡せしを傷み歎きて泪止まらず。行者殿前に進み、高く呼んで曰く、「陛下怎麼斯まで妖魔に昏亂て、深く哭き給ふや。見放著、三道師の屍骸、一個は虎、一個は鹿一個は羚羊なり。是原來成精たる山獸にて、假に道士と粧け、此に來りて陛下を害せんと謀れども、いまだ氣數盡きざるが故に、敢て手を下し得ず。僧道を破滅し佛法を亡す事、是其顯證なり。もし今二年の月日を送らば、陛下の氣數衰へ、他們が爲に性命を害せられ、江山ことごとく妖魔に奪はれ給はん。幸に我們此國にきたりて、妖邪を除き國害を救ふは、大なる幸福ならずや。快く迷ひの朦霧をはらひ、僧を招回し、政を正しく萬民を按撫し給へ」と理を盡して諫めければ、國王初めて悟り、深く感謝して曰く、「朕不明にして、妖邪の爲に惑溺せられ。殆ど國を失はんとせしに、天聖僧を來して國害を除かしめ給ふ。敢て謝するに所なし」とて、急に大師に命じて、唐僧徒弟を知淵寺に送り、種々に酹謝、其夜は寺に安歇、次の日五更に、國

王朝に出で、官人に旨を傳へて、快く僧を招回す榜文を四門の各路に張掛け、殿上に筵宴を設け、駕を擺して智淵寺にいたり、三藏師徒を請了うて殿中に回り、歡喜の興宴をなし、關文を換へ受與しければ、三藏大いに悅び、別を告げて立出るにぞ、國王皇后嬪妃をはじめ、兩班の文武是を送て朝門を出る。是より前、那行者がために脫命れたる五百們の和尙は、僧を饒し給ふとの傍文を掛けられしと聞き、個々勇み悅び、連々城に回りきたり、路上に跪き、三拜して、「齊天大聖爺々」と稱へ、「我等は是、沙灘の上にて脫命の恩を蒙りし僧人なり。聞知るに、大聖妖孽を掃除ひ、我等を救ひ給ふ難有さよ。願くは毫毛を納め給へ」と叩頭て申しければ、行者わらふて、一々毫毛を納め、君臣に對して曰く、「這和尙們、妖魔に役せられて、已に死に向たりしを、老孫前に救ひ走らしめ、兩個の妖道を打殺したり。向後再び胡爲なる事に惑はず、信を守り、三道を把つて一致に歸し、僧を敬ひ萬民を育て、國の長久を謀り給へ」と誡しかば、國王感謝に不盡、終に別れて城を送り出しけり。

斯て三藏等は、只管路を急ぎ、曉に行き夜に住り、渴しては飲み、飢ては飡し行く程に、春盡き夏殘けて、また秋光の天に至る。然るに一日、天色已に晚れければ、唐僧馬を勒へて曰く、「徒弟等、天已に晚れたり。一宿を乞ふべき人家はあらざるか」行者聲に應じて曰く、「此邊すべて嶮峻にして、更に一軒の人家もあらず。月光に乘して今一程走りて、人家ある所に至りて宿を要め候はん」と。師徒是によりて、沒奈何また行者に隨ひて行くこと幾干もあらざるに、只聞滔々〳〵浪々と响く聲あり。八戒が曰く、「罷了々々。路是にいたりて盡きたり、是一般の水撑なり」唐僧聞いて「怎生か此川を渡るべき」八戒が曰く、「我先此川の淺深を試し見ん」三藏が曰く、「汝獸子、亂談を休めよ。這川の淺深如何して知る事を得ん」八戒が曰く、「我一个の石頭を捃ひ來り、是を河の當中へ抛り、もし水の泡起つときは是淺し。もし骨都々々と沈む聲ある時は深し」行者打わらひ、「汝早く試みよ」八戒路旁の石頭を拾ひとり、水中を望んで抛込みけるに、只聞骨都として沈みぬ。八戒是を聞いて「深々〳〵」というて惘然たり。三藏が曰く、「汝川の淺深は試みたれども、未だ多少寬濶を不知。是をも試みよ」八戒が曰く、「其事は敢て知りがたし」行者大いにわらひ、「然らば何の益かあらん。いで老孫見きたらん」と觔斗雲に跳駕り、空中に上りて定時と觀るに、洋々として月光を浸し、浩々として影天に浮ぶ。靈波は花岳を呑み、長流百川を貫き、千層の河浪は滾上りて萬疊となり、岸口には漁火もなく、砂頭には只鷺のみ眠り居て、四方莎茫として海のごとく、一望さらに邊際なし。行者歎息して、雲を收め川邊に下りて曰く、扨も寬哩々々我が火眼金睛、日の裡八千里の内外を見、夜と雖も、五百里の間を

見る事を得。然るに今、通看所更に邊岸なく、寛濶の數を知る事能はず」三藏聞いて大いに驚き、泪に嗚咽んで曰く、「徒弟等、是は何とせん」と。沙僧諫めて曰く、「師父哭き給ふ事なかれ」我那里を見るに、水邊に立つ者あり。是大かた人ならん」行者が曰く、「おもふに是漁人ならん。我往きて他に問ひきたらん」と鐵棍を把て跑到り見るに、是人にはあらずして一面の石碑なり。碑上に三個の篆書の大字あり、下に兩行の十字の小字あり。三個の大字は、「通天河」とあり、小字は、「經過八百里亘古少行人」とあり。行者三藏を呼んで是を見するに、三藏一目見て涙をながし、「當年長安を出でしより、只西天に行きて經を取んとのみおもひて、或は妖魔に阻てられ、或は山水の遙なるに隔られ、百辛千苦せしに、今また此所に到りて渡るべき手段に盡ぬ。是は何とせん」と憂ひ悶ゆる折しも、幽に鼓鈸の音聞えたり。八戒が曰く、「おもふに是人家ありて齋を做と覺えたり。いざや倶に歩みて些の齋飯を請ひ、宿をも借らん」と勸むれば、師徒是に同じて、再び進行くに、一つの正路あり。四衆大いに力を得、漫々たる砂灘をすぎて望み見れば、果然一簇の人家四五百軒計あり。三藏馬を下りて路の頭の家を見るに、門外に一首の幢幡を建て燈を煌かし、香を馥せたり。三藏悟空を顧みて曰く、「此所、山凹河邊に比ぶれば、辟へ簷下に寐るとも、冷露を遮り、放心穩眠るべし。汝等は是に待て。我先いたりて宿を求めきたらん。もし肯ひて我を住めば、汝等を呼ん。假若不留とも、汝們撒潑る事なかれ。汝等が臉嘴醜露にて、恐らくは人を號了させて禍を引出し、住する所なからん」行者領掌し、「師父先行き給へ。我們這所にて待ち候べし」三藏遂に笠を持ち、錫杖を把つて、逕に人家の門外に到りみるに、門半開け半は掩りたり。三藏敢て擅に入らず、聊站むところに、裡より一個の老者走り出る、其體項下に珠數をかけ、口に阿彌陀佛を念へ、自ら門の戸を關んとす。三藏急に合掌し、高く呼んで曰く、「老施主、暫し待ち給へ。貧僧問訊あり」老者が曰く、「汝きたる事今些し遲し」と。三藏其理をしらず、「怎麽說に候や」と問ふ。老者が曰く、「來る事遲きゆゑに物なし。若早くきたらば、我舍に齋ありて、僧衆こと〴〵く飽まで飯を吃し、其上に熟米三舛、白布一端、銅錢十孔づつを施せり」三藏躬身て曰く、「貧僧は是齋に逢んとて來りたるにあらず。是は東土大唐の欽差にて、西天に至りて經をとる僧なるが、今這里にきたり、天色已に晩れたり。然るに宿るべき家もあらず。幸に鼓鈸の聲を聞きて、特來つて一宿を請はん爲なり」老者手を搖つて曰く、「和尚は、出家人に似げなく、誑話をいふ人かな。東土大唐より我が此里にいたるには、五萬四千里の路あり。然るに單身にて奈何ぞ來る事を得ん」三藏が曰く、「老施主の言理あり。但し貧道單身ならず、三個の小徒あり。山に逢うては路を開き、水に遇

うては橋を渡し、貧僧を保けて方に此所に來れり」老者が曰く、「已に徒弟あらば、何ぞ同じく來り給はざる。我舍に安歇申す所あり」三藏悅び、頭を回して「徒弟此處へ來れ」と呼ぶにぞ、行者は原來性急なり、八戒は粗魯しく、沙僧は生得莽壯なれば、三個師の聲を聞くとひとしく馬を牽き扭を排著、一陣の風の閃くがごとく走り來る。老者此徒を見て、謊得て趺倒れ、「妖妖來れり。命を救へ」と呼はりければ、三藏是を攙起して曰く、「施主怕れ給ふまじ。是妖怪にあらず。我が徒弟なり」老者が曰く、「這般の好師父に、怎麽また此やうに醜き徒弟を將れ給へる」と戰々兢々問ひければ、三藏答へて曰く、「人は相貌によらず。這三人の徒弟、皆神通有りて、龍を降し、虎を伏し、妖魔を捉ふる事、袋の物を探るがごとし。是に因て貧僧遠く此里まで來る事を得たり」老者未だ半疑半信ながら、先唐僧師徒を裡に入る。行者八戒は、馬を拴ぎ行李を丟下て、廳に至り見るに、幾个の僧經を念み居たりけるが、行者八戒沙僧が進みきたるを見て、衆人恐れ惧き、通跑り、花燈を踏倒し經机を蹴散して、儞頭撞我頭さま、葫蘆架に風の荒るゝに異ならず。三人は是を見て、思はず嘻々唸々と笑ふ。三藏喝つて曰く、「這兒頑、先には老施主を駭かし、今又多の和尙を謊倒させ、却て我に罪を與ふや」と言ひこらしければ、行者理に伏し、主翁に向ひ禮をなし、「老爺、我們が無禮を纔關了、早く花燈を了花て佛事を將

收め給へ」老者此言に心を安んじ、童僕を呼んで火を點さするに、皆行者八戒を見て、「妖怪來れり」とて逃入りけるにより、行者自ら燈燭を點ず。此時また一個の道士出できたり、「是はそも何の妖精なるや」と問ふ。先の老者が曰く、「那和尙等は妖怪ならず。大唐より西天に到り經をとる羅漢の徒弟にて、相貌兇なれども、皆是善人なり」那道士是を聞きて四衆に禮をなし、一齊に坐しければ、童僕等も方寸に怕をとゞめ、茶を獻じ齋を擺いて管待しけり。四個齋を罷ひて後、三藏老者に問へらく、「老施主の高姓は何と稱び候や」老者が曰く「姓は陳氏にて候」三藏が曰く、「貧僧も姓は陳氏なり。扨今は何の齋をかなし給ふ」老者が曰く、「是は預め亡齋を脩し候なり」三藏が曰く、「是何の亡齋ぞや」二個の老道士一齊に淚を流して曰く、「長老聞き給へ、我が這里に一座の靈感大王の廟あり。那大王、年々甘雨を施し慶雲を降し、五穀の豐饒を扶く。されども是正神にあらず。一年一次の祭賽に、童男童女を牲醴に供へしめて吃事を好む。是を供れば、我們を保けて雨を調へ風を順にし、若供へざれば、禍を降し害を生ず。今年我舍輪到にて、悲しきかな、老拙は陳澄とて今六十三、舍弟は陳淸とて五十八歲、我が止生の一女纔に八才、名を一秤金と申す。舍弟の止男の一男纔に七才、名を陳關保と呼び候。二人ともに今夜大王の廟へ牲醴に出し候。流石恩愛の情捨がたく、孩兒等と與に個の超生

道場をなし、預め亡齋を修し候なり」と語る裡より涙雨のごとく、聲を呑んで哭伏したり。三藏も此言を聞いて涙を不住、衣の袖をしぼりぬ。行者が曰く、「老公、汝が府上に多くの家財あらん」老者答へて曰く、「些の家寶あり。水田旱田一二百頃、草場九十處。舍下に不吃の糧、若干の衣服銅錢あり」行者が曰く、「已に斯のごとく富豪ならば、何ぞ兩個の童男女を買ひて祭に賽へざる」二老とも哭いて曰く、「和尚は子細を知り給はず。那大王甚だ靈異にして、平素我們が家に來通ひて、我們が孩兒を見しれり」行者が曰く、「他來通ふに甚麼の模樣なるや」老者が曰く、「未だ其形を見ず。只一陣の香風を聞く時は、是大王の來れるなり。依て忙しく香を焚きて禮拜す。他我等が一家の人等を個々に認得り。殊に親生の兒女を要めて吃はん事を望む。假令買要むるとも、一般の貌の者を得る事難し」行者が曰く、「我おもふ旨あり。汝が童女を抱き來つて我に看すべし。自ら手段あらん」陳清、何事かは知ざれど、房内に入りて陳關保を抱きて廳上へ出來る。小兒なれば、今死する身ともしらず、果子を拿り花を弄して餘念なし。行者定と見て、身を搖すよと見えたるが、忽ち變じて關保が模樣となり、兩個燈の前に在りて遊び戲るゝさま、只是二根の牡丹の咲出でしに異ならず。陳清大いにおどろき、「和尚何ゆゑ我が孩兒と一般姿とはなり給ふ。願はくは本相を現はし給へ」といふ。行者聲に應じて本相を現はし、問うて曰く、「今の像、汝が愛息と違へりや否や」陳清が曰く、「更に分毫も違ふ所なし」行者が曰く、「然らば我汝が孩兒に替りて牲醴とならんは如何に」陳清大いに悅び、跪下、頭を叩いて曰く、和尚慈を垂れて我が孩兒を救ひ給へ、香烟後代には、白銀一千兩を唐僧に獻り、盤纏となして西天に往給ふ便とせん」と說罷んで又磕頭して、只管に歎き懇む。陳澄は只默然として柱に倚りかゝり愁然として泪を流し居たり。行者進み問ふやう、「老爺、汝も女兒を痛哭くか」陳澄急に跪下いて曰く、「萬望我が女兒をも救ひ給へ」行者が曰く、「汝憂る事勿れ、那嘴の長き和尚を變じて汝が女兒となし。兩個の命を救ひ得させん」八戒是を聞き、大いに驚きて曰く、「哥々、汝左も左もせよ。我は代身となりて吃はれん事を要めず。我決して不肯」行者が曰く、「汝原來三十六般の變化あり。怎麼ぞ不會ざるや」三藏聞いて八戒に向ひ「行者が云ふごとく、人の性命を救ふは七級の浮屠を造るに勝れり。右も左もして女兒の命を救へ」と責めければ、行者陳澄に向ひ、「汝が女兒を抱ききたれ」と令付る。陳澄急に裡に入りて、一秤金を抱き廳上に出る。其後に就いて、一家の老幼男女都て出きたり、磕頭て禮拜す。一秤金は果子を吃て餘念なし。行者八戒に曰く、「汝快く變じて此女兒の模樣となれよ」八戒已む事を得ず、咒語を念じ、頭を數度搖了、稍多時して娘の模樣となる。されども面目頗る胖大にして像同

じからず。行者が曰く、「汝今一度變じ替へよ」八戒また左右して變じ替へたれども、益似つかはしからず。行者又「變じ替へよ」と責むれば、八戒汗を拭ひ頭をかき、「哥々、只此役を饒せ。我如何に變ずれども、是よりは不成」と辭退す。其時行者、一口の仙氣を吹きかくれば、八戒が身再び變じて、女兒の像と一般になりたり。行者陳氏兄弟に向ひ、「汝等は童男童女を將れて隱れ居よ。さりながら、今夜我們を怎麼にして那大王に獻ずるや」陳澄が曰く、「兩個の紅漆の盤に二位を請うて坐せしめ、兩張の桌の上に置き、抬いて廟裡に到らん」八戒が曰く、「我は是假に代身となれども、吃はれん事は不肯」行者笑うて曰く、「他先づ我を吃ふを見ば、汝は先へ逃回れ」八戒推返して曰く、「他もし我を先に吃はんとせば又如何すべき」陳清が曰く、「前年大胆の者ありて、廟の後より覗き見しに、他先童男を吃ひ、後に童女を吃ふと申せり」八戒聞いて少し心を安んじ、「造化々々」といひて、頓て兩箇の紅盤を取出させ、二張の桌の上に直し、兩個其上に坐する折しも、忽ち聞く、外面に鑼鼓天に喧しく、燈火照耀として、前門を打開き、「陳清昆弟快く童男童女を抬出せ」と口々に叫ぶ。是這里の者どもが、牲醴を供ぜんとて來れるなり。老者兄弟は泣々二人を抬出だしけり。

○魔弄寒風飄大雪　僧思拜佛履層氷

話說陳家の二老、衆人とともに、童男童女及び猪羊の牲を抬いて、鑼鼓を打鳴し、喧々嚷々、靈感王の廟の裡へ到り、先兩個の乘たる紅盤を上首に供へ、桌をならべ、敬々しく香を炷き燭を點す。行者頭を回らして看れば、廟の正面に金字に書きたる牌位あり。文字は是「靈感大王之神」と寫せり、時に衆人一齊に頭をもて地を磕きて曰く、「大王爺々、今年今月今時の祭主陳澄陳清等、例歲のごとく童男陳保關、童女一秤金、其余の供物にいたるまで、數のごとくに獻上。大王願はくは是等の牲を受用給ひ、風調ひ雨順ひ、五穀の豐登を護り給へ」と祝へ罷り、衆人迹をも見ずして回去りぬ。八戒人々の散りたるを見て行者に向て、「衆人已に回去れり。我們も家へ回るべきか」行者が曰く、「汝が家那里にあるや」八戒が曰く、「陳氏が家に行きて睡らん」行者喝つて曰く、「汝獸子、又亂談を吐くか。已に大王に吃はれんとて代身になりたる者の、其始終をも見ず回らば、他徒に災を降し害を貽さん」といふ言未だ終らざるに、一陣の腥風吹ききたる。八戒打おどろき、「是必ず那大王の來るしるしならん」行者急に制し、「汝必ず言語ふことなかれ。我他と說話すべし」と議する所に、忽ち廟門の外より一個の妖怪來りて廟に

入り、門を鎖固め、牲の兩人に近著き問ひけるは、「今年の祭主は是那の家にあたるや」行者答へて曰く、「仰にや及ぶべき。陳澄陳清が家にあたり候」那妖怪、行者が言を聞いて心中大いに疑ひ、這孩兒甚だ大胆にて、言語伶悧なり。常にきたる供養の的は、我が一聲を聞けば言なく再び問へは魂を失ひ、已に捉吃ふときに至りては、さながら死人の如し。怎麽今日の童よく應對するや、と訝り迷ひて、敢て猥に拿つて不吃、再び問ひけるは「汝童男女名を何と稱ふや」行者が曰く、「童男が名は陳保關といひ、童女は就ち一秤金と呼び候」妖精又曰く、「這祭は常年の舊規にて、今汝等を供獻へきたるなり。されば我徑に汝們を吃ふべきなり」と罵る。行者臆する色なく、「我等從來其旨を知れり。大王快く吃し給ひ、雨を順にし風を調へて、五穀の能く豐饒を守り給へ」那妖怪、是等の應對を聞いて彌疑ひ、大喝して曰く、「我つねには童男を先へ吃へども、今年は先女兒を吃はん」と號ぶを聞き、八戒大いに慌驚きて云ふやう、「大王舊例を壞りて、吾を先へ吃はんとは情なし。我生稟瘦肉にて、骨堅く、頗る味不好。舊によりて先童男を受　用し給へ」といへども、妖怪耳にも不容分說、大手を披きて八戒を捉へ吃はんとす。八戒今は堪りかね、本相を顯はして紅盤を跳り下り、鈀を掣つて妖怪が背を引掛けて倒さんとす。妖怪何ぞ驚かざるべき、手を縮めて逃走り、只一聲の響を殘せり。八戒したり顏に打わらひ、一定妖怪が甲の所を撞きたりと呼はる。行者も本相を露出、八戒を喝つて曰く、「汝獸子、短慮くて他を走らせたり。怎麽何里へ走りけん」と是彼を看に、大小の魚鱗兩個落散たり。然るに妖怪の喝聲、遙空中に聞えたれば、行者八戒續いて空中へ跳上る。那怪、兵器をも帶せず雲端に現はれ、行者八戒を見て問ひけるは、「汝等は是那里の和尙にて、童男女と粧けて我を欺くや」行者大音に呼はりけるは、「這潑怪、未だ我們をしらずや。是は大唐の僧を保けて西天に至り經を取んため、今日はからずも陳氏が家に寓りて聞けば、妖邪有りて假に靈感大王と稱し、年々童男女を要めて吃ふよし。我等慈悲の心を以て、假に童男女が代身となり、汝が如き潑物を捉へ禁めんとす。汝這里に住んで幾年か大王と稱し、幾千の童男女を拿吃ひたる。一々算へたてゝ白首的せば、纔に死罪を饒しくれん」といふを聞いて、「那妖怪また頭を回して逃走る。八戒早く鈀を輪して飛びかゝれば、他方に一陣の狂風と變じて、颯と通天河の裡に入り、更に像を見せず。行者是を見て曰く、「何とも合點ゆかず。おもふに他鱗を遺せしを以て見れば、河中に住める大魚の精にや」八戒賢げに曰く、「哥々しばらく待。明日謀を定め他を拿へ、安々と我が師父を送つて河を涉さん」行者是に從ひ、遂に廟の裡に回り、那猪羊を殘らす把て、陳氏が家に回りきたる。此時三藏は、沙僧陳清陳澄等と、廳上に有りて行者八戒が音信を待ちけ

るに、忽ち兩人勇みて回るを見、三藏卽ち祭賽の事を問ふに、行者那妖怪の事を一遍說了、陳清兄弟一家の男女大いに悅び、牀舖を排き師徒を請じ、枕を高うして一齊に安寐す。

却說那妖怪は、水府に回り、嘿然として憂ひの色面に表はれ、更に不言。是に依て水府に伺候する多少の小妖ども、不審り跪きて問ひけるやう、「大王例年享祭より回り給ふ時は、怡悅の色あり。怎麽今年は何の煩惱はしき事かある」那妖怪が曰く、「常年は、祭に臨んで些の餘物を持回つて、儞們にも賞味させしが、今日は我だも曾て吃ふ事能はず。剩へ性命をも失んとせし」と語れば、小妖ども大いに驚き、「怎麽したる事に候や」と問ふ。妖怪が曰く、「是東土大唐の聖僧、徒弟とともに西天に行き佛を拜し經を求る者にて、那徒弟神通有りて、假に陳氏が家の童男童女となり、廟の裡に坐せしが、我が至るを見て忽ち本相を現はし我を敗れり。我曾て人のいふを聞くに、那唐僧は十世修行の好人にて、他が一塊の肉を得て吃ふ時は、壽を延べ生を長くすと。不期に他が徒弟に、這般神通の者あつて、我苟も他等に名を壞られたり。我兼ては、唐僧を捉へ、汝等と共に吃はん事を要れども、那徒弟等師父を護る上は、怕らくは此事能ふまじ」といふ詞未だ終らざるに、一人の斑衣鰥婆といふ怪、一踊して列を出で大いに笑つて妖怪に對して曰ひけるは、「大王何ぞ這般弱心き事を曰ふぞ。那唐僧を捉へんと要め給はば、何の難き事

有ん。但し我等力を盡して他を捉へ得るならば、大王如何なる恩賞を給はんや」妖怪が曰く、「汝謀ありて、我と力を併せ唐僧を捉へ得たらば我が兄妹となし、汝と席を同うして重く汝を享ん」鰥婆有がたしと拜謝し終り、云ひけるは、「我久しく大王の風を呼び雨を喚ぶの神通、海を攪し江を飜すの勢力ある事を知る。然といへども、雪を降し氷をむすぶ術に至りては可會申さんや」妖怪が曰く、「兩個ながらいと易き事なり」鰥婆是を聞いて、手を拍つて大いに喜び「大王斯のごとくの奇術あらば、唐僧を捉へん事目前にあり」妖怪か曰く、「汝試に謀をかたれ」鰥婆が曰く、「今宵三更に至らば、大王走つて快く法を行ひ、一陣の寒風を吹起して大雪を降し、且這渺范たる通天河を、ことゞく凍となし給へ。我其中によく變化して、幾個となく人形を作へ路上にさし置き、包を背し傘を持ち車を推て、氷の上を行走する躰をなすぞならば、唐僧必ず經を求る心急にして、這躰を見て、氷を踏んで涉る事必定なり。其時大王は河心に坐して、他が脚踪响くを相圖に寒氷を裂きて、他等師弟を一齊に水中へ陷れ給へ。斯のごとくするならば、一鼓にして擒とせん事、何の難きことか有らん」と手に把るごとく述べければ、那妖怪聞いて滿心歡喜、「此策甚だ妙なり」とて卽時に水府を出て、長空を踏み、相圖のごとく寒風を起し、雪を散し水を結んで凍となす。

此時三藏師徒四個は、陳家に按宿りて有りけるが、夜の更くるに隨ひ、衾寒く枕冷やかに覺ゆれば、さしも寐ぎたなき八戒、目を覺して行者に向ひ曰ひけるは、「哥々何とけしからず冷る事ならずや」行者が曰く、「汝獸子、さりとては不長俊なき事をいふ者かな。已に出家人の、何ぞ少しの冷るを怕るゝや」三藏も目をさまして兩人の話を聞き、「徒弟等がいふごとく、扨も冷ゆることかな。殆ど眠りがたし」とて爬起き衣服を穿て、扉を開き四方を見るに、早天曉の空となり、只看四方都て白雪茫々として、一寸の地をも殘さず。徒弟に向ひ、「汝等、寒きも理なり。今是秋なるに、一夜の中に大雪降つて尙霽れやらず、紛々として剪玉のごとく、偏々として綿絮を飛すに似たり」と、師徒多時觀玩居る所に、忽ち陳澄、童僕に命じて、雪を拂て路を開き、湯を持來り、面を洗ひ給へと勸め、又少時して茶と餅を送り、爐に炭をつぎ、挨拶しけるは、「師徒叙坐して茶を服し給へ」と申す。三藏問ひけるやう、「老施主、此里にては春夏秋冬の分ちなきか」陳澄わらひて申しけるは、「此邊僻地にて、風俗人物は上國に同じからざれど、凡一切の事に到りては、天を同うし日をともにすれば、怎麼四時の分ざるの理候べき」三藏又曰く、「既に四時同じくんば、何ぞ今此大雪降つて、斯の如く寒氣强きや」陳澄少時考へて曰く「時は今七月たりと雖も、昨日すでに白露の時候を交へたり。白露は則ち是八月の節なり。我が

此里は、毎年八月の頃に至れば霜雪の降る事あり」三藏聞いて曰く、「されば我が東土にくらべては同じからず。那里には、冬の節に至りて方に是あり」と話の間に、平地に雪つもる事二尺に及びぬ。三藏是を見て、胸を擊て涙を流しければ、陳澄其心をしらず、旅の愁を慰めんと諫めて曰く、「長老かならず心を苦しめず、放心して逗留し給へ。我舍下多少の糧を貯へたり。半年や一年師徒を養ひ申す共、難き事候はず」と申しければ、三藏泪を收めて曰く、「老施主は、今貧僧が苦しむ子細を知り給ふまじ。我當年唐の萬歲の欽差を奉けて、西天に至り經を求めんとて、長安を出づる時、國王親ら關所まで送り給はり、問ひ給ひしは、汝幾時經を取て國へ皈るべきと。貧僧かく迄に山河の險ある事を知らず、順口に回奏しけるは、只三年の光陰を送りなば、經を取つて皈りさむらはん、と申上げたるに、今已に八ヶ年に及べども、未だ佛面をだに拜せず。欽差の限に違はん事の恐多さに、焦慮するなり。今日奇緣ありて、貴所に一夜の舍を得、愚弟ども昨夜の小技をもつて令息令女を救ひたれば、要めて一艘の船を借り河を渡らんとおもひしに、不期も這大雪にあひ、幾時纔に功をなして故土に回る事を得んや」とて只管悲み歎くを見て、陳老さまゞ諫め、「老爺、さのみ憂ひ給ふな。天晴れ氷化けなば、家產を傾してなりとも、河をわたし進らせん」といひ慰むるうち、一僕午齋を進めきたる。是品物豐盛の

重饗なり。師徒吃し終れば、陳老また、「雪洞に行きて散悶給へ」とて、大に筵宴を催しければ、師徒憂を拂ひ寒さを忘れ、日すでに晩景に及びけるが、三藏忽ち川面を見るに、多くの人々行走りをる躰なれば、大に訝り、陳老に問うて曰く、「河水凍りて往來なき筈なるに、怎麽是何の故ぞや」陳老答へけるは、「おもふに是、近き河邊水淺き所は堅く凍りて、水の上を往來するにや候はん」と語る處に、只聞、那行人、談話行きていひけるやう、「此川廣しと雖も、八百里が間悉く厚く氷りて、斯く行走するは船にて渡るよりも甚だ便利なり」と。三藏此ことを聞いて大いに悅び、誰か行きて河の樣子を見て來らんや」と要む。陳老また諫めて曰く、「長老必ず忙ぎ給ふ事勿れ。今日は早晩に及べり。明日兎も角もし給へ」とて其夜もまた住めけり。扨次の日曉にも及びければ、三藏起出で、行者に命じて、「汝背馬て氷の樣を見てきたれ」といふを、陳老再三諫めて曰く、「先々雪融け凍解るを待ち給へ。我們船を辨じ安々とわたし進せん」といへども、行者更に不肯、「耳に聞くは目に見るには不如。我們師父をも誘ひ行きて共に見ん」とて馬を引出しければ、陳老も諫むるに詞なく、「然らば我們もともに至らん」とて小的を呼んで六匹の馬を備へ、各是に跨り、打連れて河邊に行きて見るに、果然川水都て凍氷り、人の行走いと多し。三藏陳淸に向ひ、「這行人は那里へ通ふ人にや」と問ふ。陳淸答へて曰く、「河の那邊は西洋の外國にて、這行人は賣買を做的と覺し。我這邊にて百錢の物は、那邊へ持至れば價萬錢となる。又那邊にて百錢の的を、這邊に持ちわたれば、同じく百倍の利あり。利は重くして本は輕し。是那行人の、生死を不顧して往來する所以なり。平日には一船に五七人も乘り、或は一艘に十餘人ものりて渡り候が、今河道氷りて詮方なき故、命を捨てて凍の上を步行するにや候はん」と語りければ、三藏が曰く、「一切世間の事、只名利を重んずるなれば、他們が財利の爲に死を忘るゝも、我が勅を奉けて忠を盡すも、只是名の爲なり。他と更に差ふ所なし」とて行者を呼び、「汝施主の家に回り、行李を收拾めてきたれ。我氷を踏んで西方に走らん」行者打笑み、「然るべし」とて已に去らんとするを、沙僧急に袖を扣へ、「師兄少時待て。我一言いふこと有り」と遮り留めける。必竟是何事をかいふや。其は下回を見て分解給ふべし。

二編　卷之八

○前章之下回

時に沙僧三藏に向ひて曰く、「師父今既に陳氏兄弟が厚意によりて憩ふ事を得給ふ上は、氷を踏むの危きを休め、幾日の後、天晴れ凍化るを待ち、船を要めて河をわたり給へ」と諫む。三藏不肯して曰ひけるは、「沙僧怎麽かゝる愚なる事を云ふや。陽春の空ならば、一日々々暖和にて、凍の解るをも待つべし。時今八月に向として、日を追つて冷氣をまし、如何としてか氷の解るを待つべきぞ。是を待たば空しく半載の光陰を消すべし」八戒この論を聞きて、馬より跳り下り、「汝等口を開く事を休めよ。彼是と長論せんより、老猪氷の厚薄を見ん」と呼はり、那獸子河邊に行き、鈀を上て力一ぱい突試るに、只銅鐵の堅きが如く、手響して疼みければ、大いにわらうて曰く、「師父放心おもひ給へ。錮住々々」三藏十分歡喜び、相伴うて陳氏が家に回り、懇に別を告げ、陳清兄弟も今は止むるに詞なく、乾糧なんどを調へ、一家師徒を禮拜し畢て、又一盤子に金銀を多く載せ、「是は寸志の餞なり」とて出しければ、三藏擺手搖頭分毫をも受け

ず。陳老種々に云ひて進めければ、行者纔に一塊を收めて二老の志を謝し、遂に別れて通天河にかゝり、氷を踏んで師徒放心に進む程に、漸く晩方に及びぬれば、那乾糧をつかひ、又氷の上に輝く月星の光を力に、西を望んで歩行くに、只聞く忽然として水底より氷を裂く音響けば、四衆驚き慌て馬より落ちたり。原來是、那妖怪水底に有つて窺ひ居、馬蹄の響を聞きて神通を弄ひ、一時に凍を開けるなり。行者已に氷の開くを見て半空に跳登れば、妖怪は早く三藏が馬を把つて水中に引入れ、三藏を捉つて遙に水府に走回り、厲聲に呼はりけるは、「如何鰥妹那里に在りや。快く唐僧を生捕れり」と勇みければ、鰥妹跳り出て、「不敢々々、大王や我等が良謀を合せて、爭か逃るゝ事を得ん」妖怪喜んで曰く、「誠に賢妹の良策圖に與れり。我已に、唐僧を把へ得ば汝を拜して兄妹とせんと約せり。大丈夫の一言は駟馬も追ひがたしとかや。蚤く案桌を擡りきたり。刀を磨がしめよ。這和尚を蒸して、心を割き皮を剝ぎて、賢妹と共に是を受用し、壽を延べ生を長うせん」鰥婆が曰く、「大王少時吃ふ事を休めよ。他が徒弟等かならず尋ねきたらん。願くは兩日を待て、他等が來るか來らざるを見て、從容と食はん」と諫めたれば、妖精鰥婆が詞に隨ひ、唐僧を把へ、六尺許の石匣に收めて蓋をし、中間にさし置きたり。却說沙僧八戒は、湧浪に漂ひながら、凍を負うて浮み出で、行者が半空の中にあるを見て問ひける

妖怪術
凍通天
河捉唐
僧

は、「師父は何里に有りや」行者も更に知る事なければ、回轉して一齊に岸に上る。人ありて早く陳淸陳澄に告げければ、二老慌てて門外に接へ、三個が衣裳の濕れたるを見て云ひけるは、「我等が口を苦して止め申せしは這事なり。怎や三藏長老の見え給はざるは如何」と尋ぬるに、三衆「更に不知」と答ふ。二老涙を流し、聲を放つて大に悲しみ、「可哀々々。船にて送り進せんと申せしに、堅執にて從ひ給はず、事這に及べる事よ」と胸を打つて歎きければ、行者慰めて曰く、「二老さのみ耽憂事勿れ。我が師父必ず死する事有るまじ。決して那靈感王の所爲なるべければ、我等力を盡して、師父を救ひ出し他を殺さん。然らば長く這里の患を除かん」と語れば、二老も滿心歡喜、急ぎ齋を調じて進めけるにぞ、三人飽まで吃し、各兵器をとつて、逕に水邊へぞ赴きける。

○三藏有災沉水宅　觀音救難現魚籃

却說三個は河邊に到り、行者先曰く、「汝兩個商議して、誰ぞ一人水中へ下りて動止を見屆けきたれ」八戒が曰く、「我等兩個行くとも好手段も出づべからず。願くは師兄水中に下りて窺ひきたれ」行者が曰く、「もし那山裡の妖怪ならば、全く汝等が力を勞すまじけれども、水中の事は我們甚だ不熟練なり。汝等は原來慣水に達せり。因て汝等に水中へ下らん事を要むる所以なり」沙僧が曰く、「小弟水中に往く事は易けれども、只水底のこと何とか有らん、是をしらず。三人一齊往きて見きたらん。但し往々馱著して、捉へられし者先妖怪の巢穴へ至り、師父を尋んと約定んは如何に」行者聞きて、「賢弟がいふ處有理。さらば馱著せん」とて打連れて水底に走り下り、行く事百余里に及ぶ。那獸子行者を追うて捉へんとしければ、行者早く一根の毫毛を拔いて、變じて假の姿となし置き、本身は一個の猪風子となり、八戒が耳躲の裏に緊しく貼著居たり。八戒案に違ひて沙僧に對ひ、「所詮他に莫管、我汝と往きて師父を尋ねん」沙僧が曰く、「不好。他水性を不知といへども、我等に比ては乖巧なる事勝れたり。もし他きたることなくんば、我汝と往くとも益なからん」行者八戒が耳躲の裡に有りて、忍かね高く呼はりけるは、「悟淨、老孫這にいまり」沙僧驚き八戒を喝つて曰く、「汝猥りに師兄を捉へんとせし故、他形を隱せり。今聲のみを聞くとも、像を見ずんば怎の好事かある」八戒慌て泥の裡に跪下いて曰く、「哥々、我過てり。願はくは師父を救ひ、岸に上りて後陪禮せん。請ふ本身を見せよ」行者が曰く、「汝等憂る事勿れ。我汝等が身上に在り。只速に水底に下れ」兩人是を聞いて、又進み行くこと百余里、忽ち一座の樓臺あり。臺上の牌位を見れば、「水龜之第」と云四個の大字あり。沙

僧が曰く、「這壁廂是妖精の住所ならん。我們二人門に上りて戰ひを索めん」行者聞いて曰く、「悟淨、那門の裏外水ありや」沙僧が曰く、「更に水なし」行者心を安んじ、「水なくんば、汝等左右に隱れ居よ」とて八戒が耳躲の裡を出で、身を搖り一變して長脚の蝦婆となり、跳て那門の裏に入り睜眼に、那妖怪上面に坐して、多少の水族ども兩邊に擺列り、斑衣鰥婆傍に坐し、唐僧を吃ふべき商議す。行者よく〳〵其邊を看回せども、更に三藏の在せざれば、暫時伺ふ所、忽ち一個の大肚の蝦婆きたり、徑に西の廊下に立定り。行者頓て他が面前に跳至り、問ひけるは、「大王今衆と那唐僧を吃はんと議り給ふ。怎や唐僧は今那里に在りや」大肚の蝦婆答へて曰く、「唐僧前に大王が降雪結氷の計にあたり、捉へて後宮の石匣にあり」行者是を聞いて、徑に尋ねて後宮に到り見れば、果然一個の石匣あり。只聞く、三藏石匣裡にありて嚶々と哭く聲あり。行者耳を傾け再度聞けば、三藏悲愁の裡に一聲の恨を說いて曰く、「我娘々の胎腹を出しより、若干の災害に遭ひ、近くは黑河に沈みて死せんとし、今又氷解るに逢て性命已に黃泉に皈せんとす。今は徒弟等きたりて救ふ事も能はじ。悲いかな遂に佛を拜し經を求めて故園へ歸る事を得ず」と聲を放つて哭きければ、行者忍不住て曰く、「師父水の災を恨む事勿れ。既に經に說ずや、土乃五行之母、水乃五行之原と。土なき時は萬物生ぜず、水なければ萬物長ず

る事能はず。老孫きたる上は罣慮し給ふな」三藏這言を聞いて曰く、「徒弟早く我を救へ」行者急に回頭して門外にいたり、本相を現はして八戒沙僧を呼んで曰く、「那妖怪師父を騙了り、石匣に捉へおけり。汝兩人早く鬪戰へよ。老孫は先水面に出去ん。汝等他を捉ふる事能ずんば、佯敗て他を引いて水中をいでよ。我他を捉へん」と分付け、躱は避水の訣を結んで河中を鑽出で、岸の邊に停立みて專ら其音信を待つ。八戒沙僧は妖怪が門前に到り、聲を厲して曰く、「潑怪、早く我が師父を送り出せ」と。門裡の小怪急ぎ入りて斯と告げければ、妖怪が曰く、「是定て那潑和尙の來るならん」と、早く兵具を披き掛け、手に一根九瓣の赤銅槌を執つて、門を八文字に開かせて突然と出できたり、八戒に對して眼を瞋して曰く、「汝潑和尙、何の爲にか這に到りて喧嚷きや」八戒大いに喝つて曰く、「汝這打不死の潑物、前夜我と頂嘴ながら尙不知、また來つて問ふか。我は是大唐の聖僧の徒弟なり。汝虛頭を弄び、假に靈感大王となり、もつぱら陳家の庄にあつて每年童男女を吃ふ。我は是陳淸が家の一秤金なり。汝認不得や」と罵りけり。妖怪が曰く、「汝潑和尙、前に變じて一秤金となり、冒名項替の罪を犯せり。されども我恕して吃はざるに、却て我手の甲を破り、今又來て門を騷がすは、生に飽て敢て死を要むるか」八戒奮然として色を起し、「汝風雪を弄して我が師父を捉ふ。速に送り回さば性命を饒さん。然

らずんば眼前に命を斷ん」と罵る。妖怪是を聞いて大いに怒り、那銅槌を揮つて擊つて蒐れば、八戒も鈀を上げ、一往一來して須臾鬪ふ。沙僧妖怪の痓まざるを見て、又寶杖を擎いて兩方より挾み、三個水底に有つて鬪ふ事二時ばかり、更に勝敗を不分。八戒伴つて、「不能贏他」と云ひて、沙僧に吃と丟個眼色し、兩個一齊に兵器を拖いて囘頭せば、那妖怪遁さじと追かくる。此時孫行者東岸に有て、眼不轉精して水面を看居たるに、只看河邊の波浪翻騰、喊の聲天地に號ぶ間もあらず、八戒沙僧思ふ圖に敵を引寄せ、跳て岸に上り、妖怪を麾下、「來了々々」と欺くにぞ、妖怪大いに憤り、水面に跳りいづる。行者見て大喝一聲して曰く、「汝潑妖、我が師父を困しめぬ。速に這一棍を吃へ」と鐵棒を輪して打つてかゝれば、妖精心得たりと、銅槌をもつて急架つ、戰ひ未だ三合ならざるに、那妖魔敵しがたく、囘頭て水中に敗退きける。行者今は詮方なく、高岸に囘轉、八戒沙僧に曰く、「兄弟多く辛苦せしかな。されど妖怪早く逃去つて捉る事能はず。今一度往て戰を索め、他を引いて出できたれ。我決して他を捉へん」兩個是に順ひ、再び水中に赴きたり。

却說那妖精は、行者に敗績けて囘皈りたれば、衆妖宮中に接到け、中にも鰍婆近く上前みて問へらく、「大王那兩人の和尚を赶うて那方に到り給へる」妖魔答へて曰く、「我那和尚等を赶けて岸に到りしに、忽ち又一個の和尚有りて、一條の鐵棒を輪して打つてかゝる。我他と戰ひ、銅槌を以て架住るに、他が棒の勅重量りがたし。いまだ三合ならずして敗囘れり」鰍婆大いに驚き、「大王、那和尚是何やうの相貌なる事を記得給ふか」妖怪が曰く、「我能認得。毛臉雷公のごとく、火眼金睛の和尚なり」と語るを聞き、小妖の裡より寒禁といふもの進み出て曰く、「大王幸にして性命を全うし給へり。もし再び戰ひ給はゞ、生き給ふ事能はじ。小的當年、東洋大海に有つて老龍王の說きしを聞くに、五百年前大いに天宮を鬧せし齊天大聖といふ者、今佛敎に皈依し、唐僧を保けて西天に到り經を要めんとす。名を改めて孫悟空といふ。他神通變化測なく、向ふ處魔を降し妖を捉ふと。他和尚就ち孫行者ならん」といふを聞き、那妖王戰々競々、色を失ふ處に、忽ち門裏の小妖走りきたり、「前の二和尚又門外にきたりて戰ひを索めぬ」と報げければ、妖怪群妖に令し、「汝等緊く門を鎖し、如何喧嚷くとも門を開く事なかれ」と分付けければ、小妖一齊に石頭泥塊を把つて門を塞ぎとゞむ。斯ともしらず八戒沙僧、「妖怪出でて再び勝負を決せよ」と叫べども、敢て一人も出て戰ふ的なし。八戒忍へかねて、鈀を擎いて門の扉を搔破り、裏を見るに、石塊を高く疊んで、裡に入るべき便なし。沙僧が曰く、「妖怪懼怕れて不出會、再ひ哥々と計較せん」と、兩個すご〳〵東岸に囘り、行者に對して斯と告訴。行者

聞きて、「如此にては無方可治。汝兩個は此に待て。我普陀巖にいたり、菩薩に計策を問ひ奉らん」とて、急に觔斗雲に駕して、半時ならず南海に至り、雲を下りて普陀巖に到れば、衆神迎へて曰く、「菩薩今早洞を出で給ひて、獨身竹林の内に入りて觀現し給ひ、大聖今日きたる事あらんとて、我等に分付け、茲に有りて窺はしめ給ふ。翠巖の前に坐して片時待ち候へ。菩薩自ら來り給ふべし」行者其言に隨ひ坐して待つに、那善財童子出來り、行者を見て進んで禮を施し、「孫大聖、前には蒙盛意、幸に菩薩に奉仕て左右を不離、甚だ善慈を蒙れり」行者紅孩兒を見て笑うて曰く、「汝前には魔行に心を迷はせしが、今正果に皈して、老孫が好人なるを知りつらん」と語るうちにも、行者久しく菩薩の來給はざるに心焦燥、諸神の制するをも聞かず、竹林へ走り入り見るに、菩薩は獨紫竹の林に坐し、いまだ纓絡をも戴かず、藍袍をも掛け給はず、玉手に鋼刀をとつて竹皮を削り居給へり。行者近く進み、至心頂禮して曰く、「今師父通天河の妖怪の爲に捉へられ、性命を斷れんとす。願はくは慈を垂れて救ひ給へ」菩薩の宣く、「汝外面に退き出て我が往を待て」行者領掌して竹林を走り出で諸神に問うて曰く、「菩薩今日蓮臺に坐せず、妝飾も穿給はず、竹林に入りて竹皮を削ぎ給ふは甚事にや」諸天曰く、「我等曾て其故を不知。只我等をして此所に大聖を接候へしめ給ふ。必然深き道理あらん」行者待つ事不多時にして、只看、菩薩手づから一個の竹籃兒を提げて出できたり、宣はく、「如何行者、我と汝と俱に行きて唐僧を救ひきたらん」行者跪下いて曰く、「弟子敢て催促ぐ事なし。菩薩まづ衣を穿座に登り給へ」菩薩宣はく、「只此儘行かん」とて祥雲を放つて空に上り給へば、大聖も觔斗雲に駕して、頃刻の間に通天河に至る。八戒沙僧、觀音を見て禮拜すれば、菩薩卽ち絲縧をもつて籃兒を結付け、絲を提げて雲端に立出で、河中に抛入れ、口に念頌を七遍となへて籃兒を引揚げ給へば、只看、那籃兒に灼々たる一尾の金魚有りて、斬眼動鱗たり。菩薩行者を呼び給ひ、「快く水中に下つて汝が師父を救へ」と分付け給ふ。行者が曰く、「未だ曾て妖怪を拿へずして、如何して師父を救ひ候べき」菩薩宣はく、「這籃兒の裡なるは卽ち妖怪なり」行者其故をしらず、拜して又問ふ、「這魚何の妖怪に候や」菩薩曰く、「這我が蓮池の裡に養ひ置きし巨なる金魚なるが、日ごとに頭を浮べて經を聞き、頗る神通を修成へり。那一柄九瓣の銅槌は、乃ち是一根未開蓮花、他が運煉に依つて兵器となる。或日海潮泛漲、池を出でて這河に來り、成精て妖王となり、汝が師父を害せんとす。故に梳妝もせず、此竹籃兒を織りて他を擒へたり」行者聞いて感歎し、「已に如此ならば、片時待給へ。我等陳家の衆人を呼びて、菩薩の金面を拜ませ、一つには恩を留め、二つには妖怪收治の事を說き候はん」菩薩點頭き給ひ、「汝早く往き

て呼來れ」と指揮し給ふ。行者雲を跳り下り、陳氏が家に走り行き、「汝等早く來つて活觀音菩薩を拜せよ」と呼はれば、陳淸陳澄を始め、一莊の老幼男女大いに悅び、足を空に馳走り、泥の上水の中とも云はず、跪下いて、掌を合せ禮拜す。其中にも圖畫者ありて、影神摸寫す。末世に傳ふる魚籃觀音の像是なり。斯て菩薩南海に回り給へば、八戒沙僧は水路を開きて、那水龕之第に到り見るに、那裏邊の水恠魚精、悉く爛れ死せり。兩個逕に後宮に入りて石匣を揭開き、唐僧を駄ひて波津を出で岸に登りくれば、陳淸兄弟頭を叩きて地に拜伏す。行者昆弟に對ひて曰く、「汝等聞け。這里今より祭を不用とも、那大王の除根たれば、再び災なからん。汝等其恩をおもはゞ、快く一隻の船を索めて、我等を送つて河を過せよ」陳淸兄弟大いに悅びて曰く、「願くは新に船を造り送り奉らん」衆客是を聞きて、「我は抱を買ん」「我は篙槳を辨ぜん」或は「水手を雇はん」とて、勇み鬧ぐ所に、忽聽河中に聲有りて、「大聖、船を造らせて人家の財物を費し給ふな。我唐僧師徒を送つて河を過さしめん」と呼ぶ。衆人是を聞きて心驚き見るに、只看、水中より一個の妖精浮み出づ。是粉蓋賴頭の黿なり。行者盻と見て、鐵棍を揮上げて曰く、「我汝が如き孽蓄を禁しむるを快とす。もし近著きなば一棍の下に打殺さん」老黿行者が面を見て曰く、「我汝が恩澤を感じ、情願んで唐僧師弟を駄ひて河を渡さんとするに、怎麼却つて我を打んとし給ふぞ」行者詞を和らげて曰く、「我汝に對し甚の恩惠かあるや」老黿泪を流して曰く、「大聖いまだ知り給はじ。這水底にある所の水黿之第こそ、原我的が住宅にて、歷代祖上より傳流へしに、那妖怪、九年前の海嘯波翻の時、潮頭を赶りて這所にきたり、兇頑を逞うして、我と爭鬪しに、我運拙く他に傷られ、我が多少の兒女眷族、悉く鬪ひ敗け、巢穴殘らず他に奪はれぬ。然に今大聖這にきたり、菩薩を請うて妖精を收め給ふにより、第宅また我に回れり。我今舊舍に住む事を得る大恩丘山の如し。且我等が歡喜のみにあらず、這莊の人々も、年々の祭賽に牲を拿るゝ事を免れたるは、實に一擧兩得の恩惠なり」と說きければ、行者暗に悅び鐵棒を收め、「汝が今いふ所眞情ならば、朝天て賭咒をたてよ」老黿是を聞きて紅口を張り、天に朝ひて發誓うて曰く、「我唐僧を送りて此通天河を過さずんば、身化して血水とならん」と玆に於て行者疑念を晴し、「汝快く上來〳〵」と云ひければ、老黿身を一度縱し、河岸に爬上る。衆人近着いて是を見るに、圍圓四丈ばかり有りて一個の大白蓋の老黿なり。行者三藏にむかひ、「師父他が甲に乘つて這河を渡り給へ」三藏が曰く、「徒弟等厚き氷の上を行くさへ尙遭迍とせり。況や這黿背に乘つてわたらん事、恐らくは穩便ならじ」老黿聞いて曰く、「長老心を放し給へ。妖怪が僞氷に比べては、我が背上遙に穩ならん」行者が曰く、「師父平素

に、凡衆生の會說にも、誑語をいふ事を誡め給ふ。老龜已に天に誓ふ、何ぞ誑を申すべき。八戒沙僧、快く馬を引き來つて、師父と俱に他が背上へ乘れ」三藏漸く心を放しければ、陳家の老幼男女ども、厚く謝して拜送りまゐらする。行者は馬を曳いて白龜が蓋の上に乘り、唐僧を請うて馬の頭頂の左に站かしめ、沙僧は右に站き、八戒は馬の後に站き　行者馬の前に站けば、老龜水中に這入り、足を開き、流水を踏む事平地を行くが如し。東岸の衆人は、是を見て、香を焚き叩頭して、「南无阿彌陀佛」と念じ、禮拜して望むに、はや形影見えずなり行けば、各家に回り去りぬ。斯て三藏師弟は、白龜に駕著て行くに、早き事疾風の如く、八百里の急流を、纔一日に行きて、終に通天河の西岸に著きぬ。三藏等岸に登り謝して曰く、「老龜、汝を累す事甚し。さればとて贈るべき物もなし。我が經を得て回るをまて。必ず厚く恩を謝せん」老龜が曰く、「師父の賜謝を受る心なし。小的うけたまはる、西天の佛祖は、滅ぬる事もなく生きたるにてもなく、能過去未來の事を知り給ふとかや。我這河に有りて修行する事一千三百餘年。然と雖、延壽身も輕く、人の語をも會說へども、只恨むらくは畜生道の本殼を脫けがたし。萬望長老西天に到り給はゞ、我いつか這畜生道を解脫れて一個の人身となり得べきや。只此事を佛祖に問ひ奉り給はり候へ」とぞ願ひける。三藏點頭、「我汝が爲にこれを問ひ奉らん間、我が回るをまて」といふを聞き、老龜歡喜びて、遂に水中に沈み去る。三藏師徒は、是より大地を一直に、西を望んでぞ急ぎける。

○情亂性從因愛慾　神昏心動遇魔頭

話說三藏師徒四個、西に從ひ行行きて又嚴冬の時節に至る。然るに前路に一座の大山ありて、路窄崖高うして人馬行惱む。三藏韁繩を住め、徒弟を呼んで曰く、「汝等前面の山高きを見よ。恐らくは虎狼の害あらん」行者が曰く、「師父心を放し給へ。我等兄弟三人意を合せて師を保護れば、何ぞ虎狼を怕れん」三藏聞いて纔に放心し、雪を冒して戰澌々進み行き、巔峯峻嶺を過ぎて遠く見やるに、只看、山の凹なる中に樓臺高く聳え、房舍淸幽なる有り。三藏が曰く、「斷して是人家寺院あるなるべし。汝等道を急ぎて些の齋飯を請ひ、飢を扶て再び走れよ」行者聞いて吃と睛看るに、那壁廂兇雲隱々として惡氣紛々たり。行者頭を回して三藏に向ひ、「師父猥に往き給ふな。那邊是好所にあらず」三藏が曰く、「樓臺房舍あるを見ながら、好所にあらずといふは何故ぞ」行者が曰く、「西方路上多く妖怪あり。能々莊宅を點化せずんば禍あらん。老孫那壁廂の氣色を見るに、恐らくは妖魔の巢穴ならん」三藏が曰く、「已に斯のごとくな

れば、我實に飢ゑたり。今是を奈何せん」行者が曰く、「師父飢ゑ給はゞ、且く馬を下て此處に坐し、老孫が他に去て齋を請回るを待ち給へ」三藏是に隨ひ馬を下れば、沙僧は包を解いて鐵鉢を取出し、行者に遞與す。行者是を請取り、三藏に向つて曰く、「師父、這所を去り給はゞ、吉は少く凶多からん。斷乎身を動し給ふな。我假に安身の法を布かん」と、金箍棒をとりて、平地に週圍と一筋の圈子を畫て、唐僧を中間に坐せしめ、八戒沙僧を左右に侍せ、師徒に對ひ、「我が畫きたる圓相の中こそ、銅墻鐵壁に比し。いかなる虎狼魔鬼なりとも、敢て近着く事能はじ。もし圈外に走り出る時は、忽ち災害あらん」と誡めければ、師徒其詞に順ひ、端然として坐下りける。行者は雲頭に上り、人家を尋ね齋を請んと、南に向ひ飛行くに、只看、古樹天に參り、一起の莊舍有りければ、急ぎ雲を按下て見るに、柴の扉を開き、一個の老者、黎の杖を挽いて出できたり、天を仰ぎ見て獨言に曰く、「西北の風起れり。明日必ず晴天ならん」と云ひも了らざるに、後邊より一頭の狗兒來りて行者を望著け、汪々と亂吠きぬ。老者頭を回らして、行者が鐵鉢を捧げたるを見、「何人なりや」と尋ねければ、行者答へて曰く、「我は是東土大唐の者なるが、欽差を奉け、西天に往きて佛を拜し經を求るなり。然るに我が師父今飢に臨めり。故に特尊府にきたりて齋を募化候なり」と語りければ、老者聞いて曰く、「長老是錯てり。西天に往くは、這眞北に大路あり。我が此里にきたれば、千里の遠あり。早く回りて大路を行くべし」と教ふ。行者笑つて曰く、「我が師父已に北の大路にありて、我が齋を請うて回るを待てり」那老者惘れし面色にて曰く、「這和尚、多く亂談をいふ事勿れ。汝が師父大路に有て餒ゑたるに、汝が這千里の遠きにきたり齋を請ふを待つとも、六七日をも消しつべし。然らば師父何ぞ餒疲れざらんや」一行者又笑つて曰く、「凡人は六七日をも過すべし。我は尚一盞の茶の冷めざる間によく回ることをなす。今齋を請うて師父の午齋に供へんとす」と云ひければ、老者大に怕れ、「這和尚必ず鬼ならん」とて、裏に向ひ逃入らんとす。行者杜住めて曰く、「施主怕るゝ事を休めて、些の齋を惠めよ」老者が曰く、「さりとては不方便なり。我家已に六七人口にて、纔に三升の米を晬ぎて下鍋と雖も、いまだ不煮熟。別處に行きて請へよ」行者が曰く、「古語にも三家に走るは一家に坐するに不如とか。我這に在りて飯の熟めるを待ん」老者行者が衣に纏得放さゞるを怒り、黎杖を上げて丁々と打つ事七八下。行者自若として更に怕れず、笑つて曰く、「老官兒、杖の數を記得候へ。一杖擊たば一升の米を請はん。二杖擊たば二升の米を請はん」老者是言を聞いて急に杖を丟て跑進去、門を關しかため、「有鬼々々」と嚷きければ、一家の男女大いに慌て、前後の門を關す。行者此體を見て心中におもへらく、這老賊、米を晬ぎて下鍋

といへり。不知是虚か實か、我往きて看ん、とて隱身の法をもて、忍んで厨中に入りて見るに、果然鍋の裏に飯氣騰々りて煮えければ、暗に蓋を把つて飯を鐵鉢に盛り、雲に跳上つて回りきたる。是より先三藏師徒は、圓相の中に坐し待つ事多時なりしが、行者久しく回り來らざれば、欠身しながら望んで曰く、「這猴子、那里に往きて化齋するや」八戒嘲笑つて曰く、「他那里ぞへ要子に行き、我等をして此坐牢に在らしむならん」三藏が曰く、「怎麽是を坐牢といふや」八戒答へて、「師父知り給はずや。古人地に畫て牢となす。他弼馬溫、戲に這圈子を畫き、誇て鐵壁銅墻といふ。もし今にも虎狼妖獸のきたらば、如何ぞよく攡得ん。只我等をして居ながら虎狼に吃はしめんとするのみ」三藏が曰く、「然らば汝怎の處置ありや」八戒が曰く、「此間に在りては不藏風もなくて不可避冷。もし老猪が言に依ひ給はゞ、路に着きて西に行かん。然らば弼馬溫が齋を請て回るに會ん。如今玆に坐する事一會せば、脚冷て疾を發せん」三藏遂に獸子が言に迷はされ、一齊に圈の外に出て、路に順ひ歩行するに、一時ならずして樓閣の所に到る。元來是坐北向南の家なり。門外みな粉牆にて、一座の門樓あり。都て五色に妝的れり。其門半掩り半は開けり。八戒が曰く、「おもふに這所は公侯の宅と覺し。門外更に人なきは、裏面に在りて烘火ならん。師父玆に待ち給へ。我裏に入りて子細を看、些の齋を請ひきたらん」三藏が曰く、「汝事を慎めよ。猥に人家に冲撞る事なかれ」八戒が曰く、「我禪門に歸してより預禮數を做へり。那弼馬溫に比し給ふ事なかれ」とて鈀を拿つて腰に收め、青布の直裰を整へ、走て門裡に入れば、只看、三間の大廳あり、簾櫳高くかゝげ、いと靜にして全く人の居るけはひなければ、屏門を轉りて進み行くに、又一個の穿堂あり。堂の後に一坐の大樓あり。樓上の牕格半開き、一頂の黄綾の帳幔をかけたり。獸子獨言に曰く、「かゝる好舍に人のなきこそ怪しけれ。定めて寒を怕れ内房に潛むならん」と内外を憚らず歩みわたして、樓上へ上り、帳幔を掀開き見るに、裏に象牙の牀あり。牀の上に一堆の骸骨あり、恰も巴斗の大さにして、腿骨の長さ四五尺もや有べく見ゆ。八戒俄に哀を催し、泪を落し、那骷髏に向ひて曰く、「不知、汝は是那の代那の朝に仕たる元帥の體ぞ。おもふに是國忠の爲に身命を抛ち、王道を興し覇業を定めたる人ならんに、英雄豪傑の魂は今何處に歸するや」と己獨合點して、只管に哀れがり、「阿彌陀佛々々々々」と念ふるに、帳幔の透間より燈の光さしければ、扨は侍奉香花の人有るならんと、轉歩て見るに、燈と見えしは窗扇より透す月影なり。其壁廂に一張の桌子ありて、桌子の上に幾件の錦綉綿衣ありければ、這獸子初に感慨がりし心にも似ず、忽ち一點の慾心を生じておもへらく、天我に寒冷を凌さんとて此綿衣を與へ給ふにこそと、不管好衣一衣三衣と

り、悅び勇み、樓を下りて逕に門外へぞ走り出でける。

二編　卷之九

○前章之下回

斯て八戒は、門前に走り出で、師父に見えて曰く、「這屋更に住る人なし。但し樓閣の帳の裡に一具の骸骨あり。是をもつて見れば、亡靈の屋にやはべるべき。されども一個の造化は、串樓の傍に此錦綉綿衣有りしにより、取りてきたり候。此時天氣寒ければ、師父褊衫を脫ぎて是を底下に穿て冷を免得給へ」三藏が曰く、「不可々々。已に律に曰ずや、公取竊取皆爲レ盜と。もし人の知覺あらば斷然是竊盜の罪を稱へん。快く往て原所に搭在けよ。我等は此に在て風を避け、孫悟空が回りきたるを待ち、同じく路を走らん」八戒が曰く、「師父放心給へ。四顧に更に人なし。誰か是を知る者あらん」三藏又曰く、「汝聞かずや、暗室に心を虧く時は神目電の如しといへり。疾々那所へ回して非禮の物を愛する事なかれ」と誡めけれども、那獸子莫旨聽、却て三藏を笑ひ、「師父穿給はずんば、老猪是を穿て寒冷を防がん」といへば、沙僧も冷氣に堪へかね、「我も一衣をきん」とて、兩個ひとしく上蓋の直裰を脫了、かの綿衣を著し、已に帶をせん

とするに、只看、件の綿衣忽然として幾條の繩と變じ、兩個が四肢を綁縛綑めたり。是に依て八戒沙僧撲的一跌れて起つ事能はず。三藏是を見て大いに忙て、兩個が綑を解んとするに、忽ち魔王きたりて唐僧を搔摑み、小妖を喚んで白馬行李をとらせ、八戒沙僧を曳せて退く。三個は夢に夢見しごとく、惘果てて倩〳〵見るに、今迄莊麗の殿宇と見えしも、變じて妖怪の巢穴となれり。原來此所は魔の住處にて、行人を拿へん爲、樓房と見せ、錦綉綿衣を置きしも一箇の點化なり。斯て妖魔は、洞中に入り、上面に坐して、三藏を把つて投落せば、小怪早く地に推伏せて綑めたり。妖魔鏡のごとき眼を瞋らし、三藏に問うて曰く、「汝那方の賊和尚にて、怎麽膽大白日裏に我が衣服を偸盜みしや」三藏淚を流して曰く、「貧僧は是東土大唐の者、欽差にて西天に往き經を要めんとす。然るに這里に來り、飢餒に臨み、徒弟をして齋を乞ひ來らしむに、いまだ歸り來らず。曾て他が言に隨はず、誤つて仙庭に來り、寒風を避け、徒弟の回を待ち候ひしに、不期も這兩個の徒弟、猥に衣物を拿出して大王の機會に中れり。萬望慈憫をたれて、我等を饒し西天に赴かしめ給はど、永く大王の恩德を註し、東土に回りて千古に傳へ揚げ候はん」妖精呵々と笑うて曰く、「我人の說を聞くに、もし唐僧を捉へて一塊の肉を吃ふ者は、髮の白きも黑くなり、齒の落けたるも更に生じ、不老長生ならしむとかや。今日招かざるに自らきたるこそ大なる造化なれ。何ぞ饒す事あらん。但し那齋飯を請めに行きし徒弟は、名字を何と呼び何方に往きて化齋するや」八戒是を聞きて、那を懼さんと稱揚して曰く、「我が師兄は、五百年前大いに天宮を鬧がせし、齊天大聖孫悟空是なり」妖魔是を聞き、心中些し怕を生じておもへらく、久しく那厮が神通廣大なるを聞く、今不期會んか、とて小的をして唐僧師徒を後邊に繫ぎ置せ、孫行者を防ぐ用意をぞ設けける。

孫行者はかゝる事を夢にもしらず、南庄の人家にて一鉢の齋飯を把り、雲を踏んで舊路に回返し、徑に山坡の平かなる所に至り、雲を按下りて見るに、我が棍にて畫きたる圈子は在りながら、唐僧師徒馬行李ともに見えざれば、彼里此方を回看せども更に見えず。那樓臺と見えしも其形なく、只山根怪石のみ眼に遮れば、歎息して曰く、「師父我が禁誡を守らず、妖魔の毒手に落ちしならん」と急に馬蹄の跡を慕ひ、西に向うて行く事五六里に及ぶ處、前面より一個の老翁、氈衣煖帽を著し、手に一根の龍頭棒をもち、後邊に一個の童僕を跟著へ、念歌て來るに逢ふ。行者問うて曰く、「老翁、もし三個の和尚馬を引いて行くに逢ひ給はずや」老翁が曰く、「前に三人の和尚路を錯て往しを見たり。一定妖怪の口にかゝりしならめ」行者が曰く、「怎是何の妖怪にて、何方に住み候や。萬望老公知給はど指南給へ。我其所に取索去かん」老翁が

曰く、「這山は金兜山と呼び、山の前に金甲洞あり。洞中に魔あり、名を獨角兕大王といふ。那者神通廣大にして、威武高强なり。那三衆、斷然他が爲に命を沒しつらん。汝もしたづね行かば、ともに命を失はん」行者謝して曰く、「老翁を多く勞せり。我豈師父を尋ねざらん。此齋飯は、酬のため汝に與へん」とて鉢を把て移し與へんとす。老翁慌て棒を捨て本相を現し、雙雙んで跪下いて曰く、「實は小神等は此山の山神土地なり。玆に有りて大聖を待接け候なり。大聖法力を施して唐僧の難を救ひ出し給ふを待ち、此齋飯を唐僧に獻り、大聖の至恭至孝給ふ心を顯さん」行者喝つて曰く、「汝這劣貨、すでに我がきたるをしらば、早く慇懃に迎ふべきに、却て這般に頭を藏し尾を露はす擧動をなすは何事ぞ」土地怕れて曰く、「大聖性急なれば、犯風顏かと計り、像を變へて告げしらせ進すなり」行者が曰く、「汝等此鐵鉢を收預り、我妖魔を降だし唐僧を救ひ出さば捧げきたれ」土地山神遵領つて退き去る。行者虎皮の裙を拽起げ、金箍棍を把つて逕に山の前に走り到り、妖洞を尋ね山崖を轉り過るに、只看、亂石磷々として雲崖の邊に兩扇の石門あり。門外に許多の小妖ありて、鎗を輪し劒を舞ふ。行者走り進みて高く呼はり、「小妖早く去つて汝が洞主に說聞せよ。我は唐僧の大徒弟孫悟空なり。快く師父を送つて洞を出せよ。さもあらば纔に汝等が一命を免しくれん」と罵りければ、那小妖ども急に洞裏に入りて斯と通報す。魔頭是を聞いて誇つて曰く、「我本宮を離れ塵世に降りてより、更に武技を試みず。今日他きたれり。必ずよき敵手ならん。いで汝等が眠を覺させん」と卽ち小妖們に命じて、一丈二尺の鋼鎗を取寄せ、群妖を隨へ、門を八字に開かせて跳り出る。行者是を見、進んで曰く、「孫外公這に在り。汝潑怪、我が師父を捉ふ。快く送り回して罪を謝せよ。もし些にても遲滯らば、其身死して葬る地なからん」那妖魔嘲わらひ、「汝大胆の潑猴精、何の武技有てか斯大言を吐くや。汝が師父、我が衣服を偸盜みたるゆゑに、實に是を拿住けり。今已に蒸して吃はんとす。汝もし我と勢を比べ、只三合を鬪ひ得ば、唐僧等が命を饒さん。もし三合を合し得ずんば、汝も一樣に屠殺して酒の肴とせん」行者口を開きて大いにわらひ、「汝狂妖、口を講くを休めて、逃走らず我が此一棒を吃へ」といひさま擊て蒐れば、妖怪も鎗を輪し相迎へ、兩雄戰ふ事三十餘合、更に勝負を分たず。那妖魔、行者の棒法正しくして一點の破綻なきを見て、不覺賞歎し、「這老猴、天宮を鬧がせしも本事なり」とて鎗を以て小妖を麾き、一齊にかゝれと下知しければ、小妖等各刀を拿り鎗を轉じ、行者を圍み十方より攻立けれども、行者公然として怕れず、如意棒を使ひ、前に迎へ後に架け、西に除ひ東に攩りて戰ひけるが、那群妖も敢て退かんとせず、命を抛て進み戰ふ。行者焦燥て、金箍棒をとつて空中に丟起

孫行者大戰妖怪

行者

犀角大王

けければ、那棍變じて千百の鐵棒となり、さながら飛蛇奔蜦のごとく、空裏に盈ちて亂落ちければ、さしも勇し群妖大いに駭き、魂飛び、魄散つて、蜘子を散すがごとく、悉く洞中へ逃入りけり。妖王是を見て唏々と冷笑ひ、「野猴無禮の手段をなす事勿れ」とて、已が袖中より一個の圈子を取出だし、空を望で抛起げ、一聲叫ぶと齊しく、不恻や千百の鐵棒原の一條となり、妖怪が手に落下だる。妖怪早く圈子と棒を取收めければ、孫行者大いに驚き、赤手空拳して、命からゞ逃退く。茲において行者朦朧として主張を失ふ。這正に、

道高一尺魔高丈　性亂情昏錯認家
可恨法身无坐位　當時行動念頭差

尚下回を看て分解給ふべし。

○心猿空用千般計　水火无功難煉磨

話説、大聖空しく敗陣け、金兜山の後に坐して、兩眼に怒泪を垂れて叫んで曰く、「師父我が禁誡を用ひず、又此大難に遇ふ。今我主杖を魔に奪はれ、空拳にて怎の功をか成すべき」と恨み憤ること多時なりしが、行者仡と心中におもへらく、那魔我を認得て、天宮を鬧せしも本事なりと云ひしをもて考れば、一定天上の兜星下界に降りて悪事を擅にするならめ、我上界に昇つて査勘せん、と急に觔斗雲に駕て南天門より走り入り、靈霄殿の階下に跪下き、玉帝に拜謁し、金兜山の妖魔唐僧を捉へ苦しむる趣を奏し、「願はくは星斗を査細し給はり候へ」と啓奏しければ、玉帝駭き給ひ、急ぎ可韓司知道に勅して、諸天の星宿神王の裡下界へ下りし者ありや否やを査させ給ふ。可韓奉りて、滿天の星斗を査すると雖も、更に下界へ降りし者あらざれば、速に回りて斯と回奏す。玉帝聞食、「斯のごとくならば、天將を撰んで孫悟空に加勢させ、妖魔を擒にせよ」とて誰那と評議あるに、托塔天王哪吒太子に如べからずとて、則ち那父子へ勅命の趣を傳へらる。天王父子旨を奉け、行者と面會して預め計を定め、衆部の天兵、并に九府天の鄧化張蕃と云ふ二人の雷公を引卒し、逕に南天門を下りて、頃刻の間に金兜山に降臨し、今日の先鋒は哪吒太子と定め、那二個の雷神は、雲端に在て、太子と妖魔の鬪ふ最中に雷搦を下し、味方の勢を扶け、妖魔が威を拉ぐべし、と已に商議決しければ、行者太子を引て洞門に進み、大音に、「潑妖、快く門を開いて我が師父を還せ」と呼はつたり。小妖是を見て急に裡に入り魔王に告げて曰く、「孫行者一個の童將を領著れ、門外へきたり喧嚷き候」と報じたれは、魔王急に鎗を把つて門外に走り到り、那童男を看るに、相皃清奇にして、勇壯また

常人に勝れたり。妖魔冷笑ひ、「汝は是托塔天王の孩兒哪吒ならずや。今何の爲我が門前にきたつて无禮をなすや」太子罵つて曰く、「汝潑魔、猥に暴惡を逞うし、唐僧を捉へ困害しむるにより、玉帝の欽差を奉け、特にきたれり。快く來つて我が劍に伏せよ」と呼ばりければ、魔王大いに怒り、「黃口の孺子何ぞかく大言を吐や」と鎗を撚つて刺いて蒐れば、太子も斬妖劍を使ひて相迎へ、一往一來して挑み鬪ふ。行者時分はよしと、急に雷公を呼び、「早く雷搦を放つて太子の勢を援よ」と令すれば、鄧化張蕃の二雷、雲光を踏んで已に手を下さんとす。這時哪吒太子は、妖魔の屈せざるを見て、身を一變して三頭六臂となり、手に三柄の長鎗を拿つて抵住む。太子また降んと進めば、妖魔もまた變じて三頭六臂となり、手に六般の兵器を持ち、妖魔を斬魔の法力を弄ひ、那の六般の兵器、砍妖劍ばけものを、斬妖刀きるつるぎ、縛妖索るなは降魔杵くだくきれ、繡毬火輪兒てまりほど、斬妖劍きるたち、是等の物を把つて大いに叫ぶ事一聲すれば、那兵器變じて千萬もなくなり、恰も氷雹の散るがごとく、空にしられぬ驟雨かと疑はれ、紛々蜜々として妖魔を打たんとしけれども、那魔猶公然として恐れず、那白圈子を取出し、空を望んで拋起げ一喝すれば、聲に應じて六般の兵器悉く妖魔の手に入りぬ。太子大いに慌て、詮力なく赤手振りて敗れ退けば、妖魔は圈子を收め兵器を奪ひて、洞中へぞ回りける。

鄧化張蕃の二雷は、此躰を見て力を落し、雲頭を按落りて太子と俱に山南の坡下に至り、各また商議するに、行者が曰く、「那厮が神通廣大なる上に、不憫の寶具を持つて、丟揚ると齊しく諸物を取收む。そも是を奈何せん」叱搭天王が曰く、「所詮那厮を亡さんには水火にしくべからず」行者聞いて曰く、「是甚だ理あり。老孫天に登りて、熒惑火德星君を請ひきたり、火を放つて那恠物を燒亡し、奪はれし兵器竝に我師父をも救はん」とて諸神に別れ、雲に乘じて逕に南天門の内に至り、仔細を告げて火德星君を請ひければ、星君領諾ひて、火部の神兵を隨へ、行者とともに金兜山に到り、天王雷公と相見し、手配を定む。托搭天王が曰く、「孫大聖また至りて妖魔を門外へ釣出し給へ。那厮出できたらば、我他と戰ひを交へん。其時火德星君衆を率ゐて他を燒亡し給へ」衆尤と同じ、卽ち行者洞口に到りて、「妖魔出でよ」と罵りければ、那魔王衆妖を引率し、迅風の發する勢にて洞口に躍出でて曰く、「汝這潑猴、また何の兵を請ひきたるや」といふ事未だ終ざるに、托塔天王眼を怒らし、大喝して曰く、「潑魔頭、我を認得や」魔王笑つて曰く、「汝托塔王、我が面前へきたるは、汝が令郎の仇を報じ、兵器を取返さんとするや」天王が曰く、「一つには、仇を報じ兵器を奪回し、二つには、汝が首をはね唐僧を救はんが爲なり。汝敗走らずして我が一刀を吃へ」妖王冷笑ひ、長鎗をとつて相迎へ、兩個洞前に在つ

て戰ふ事多時。行者時分はよしと、火德星君に令しければ、星君諾して、衆の火神をして一度に火を放たしむるに、妖王火の來るを見て些も恐れず、那の圈子をもつて空を望んで投起ぐれば、寶具は鳴響いて、火德君が使ふ所の、火龍火馬火鴉火鼠火刀火箭等を、悉く取つて收め、勝利を得て洞中へ引退く。火德君は惘れて、一桿の空旗を把つて衆將を招き返し、天王行者と會合して再度評議に及ぶ。衆神が曰く、「那兜魔既に火をも恐れず。此上は如何なる計をか用ひん」行者が曰く、「他今火を恐れず。察するに水を怕れん。我再び天に昇り、水德星君を請ひきたりて水勢を施し、他が洞裏に大水を灌ぎ、魔王を淹死し、奪はれたる器物を取還して汝等に還し、師父を救はん」衆是に同じければ、行者また觔斗雲に駕りて徑に北天門にいたり、烏浩宮に入りて水德星君に謁し、妖魔が兇勢を說き、「何卒我が力を扶け、妖魔を降して師父の難を救ひ給へ」と憑みければ、水德星君領掌し、卽時に黃河の水伯に命じ、「汝等我が盂兒を把つて黃河の水を汲み、大聖に隨うて魔を降せ」と令す。行者訝り問うて曰く、「那盂兒何許の水を盛り候や」水伯答へて曰く、「此盂兒よく黃河の水を盛盡し候」行者悅び、水德君に別を告げ立出づれば、水伯は盂兒を把り、黃河の水を半盂汲んで行者に跟ひ、金兜山に著す。行者水伯に命じて曰く、「我洞口に往て呼はらば、妖魔一定門を開いて出できたらん。其時汝等門の裏に入り、一度盂兒を倒して、洞中の群妖を殘らず淹殺せよ」と命ずれば、水伯是に隨ひ、行者に緊隨ひ進み行く。行者は例の洞門に到りて、「潑魔早く門を開けよ」と呼はる。獨角兒大王是を聞きて、那寶貝を帶び、鎗を綽いて走り、石門を開く所を、水伯得たりと、玉盂を把つて門內へ向ひ一度覆せば、忽ち洪水門內へ漲り至らんとす。魔王水のきたるを見て、那圈子を取出し、二扇の門をさし固むるに、只看、那水骨都々々と鳴りて門外へ溢れ出る。行者驚き、急に觔斗雲を縱ち、水伯と俱に高峰に跳り上る。天王父子諸神等は、初より半空に在りて觀居たるに、那水波濤泛漲り溢れければ、行者水伯に向ひ、「水已に妖洞に入る事能はず。却て四野に漫らば、民田を淹し荒して萬民の憂患をなさん。早く收めよ」と命じけれども、水神頭を搔きて曰く、「小神水を放つ事は得たれども、却て水を收むる事を會得せず」と辭す。行者惘果て、奈何せんとおもひ煩ふ所に、原來那山高峻しければ、水は只低きに走り流れて、須臾の間に四方の澗壑に歸したり。然るにかの洞外には、幾個の小妖跳り出で、棒を弄ひ鎗を拈つて、舊のごとく嘻々としてわらひ嘲子ければ、行者腹にするかね、憤怒を發し、雙手の握拳を揮回し、喚いて洞門の前に馳到れば、小妖們驚き騷ぎ、早々門內へ跳入り、魔王に斯と報げけるにぞ、妖魔例の鎗を提げ、門を出て曰く、「這小猴、幾度か我に鬪ひ負けながら、恥辱をもしらず、又來

つて何事をかせんとするや」行者大いに怒り、「汝潑魔、きたつて孫外公の一拳を吃へ」と呼はりければ、魔王大いにわらひ、「汝が拳頭は只核桃の大さに似たり。望ならば拳の勝負せん」と、て長鎗を投捨て、衣を撩げ進み寄り、兩個拳を上ぐるを見るに、さながら二個の鐵槌のごとし。斯て行者と妖魔、互に拳勢を逞しうして擊合ひければ、衆神是を見て一齊に進み行者を助くれば、洞中の群妖も、旗を搖かし鼓を擂つて、一度に進み來る。行者は妖魔に勝ちがたきを側り、毫毛を一把抜きとり、空を望んで撒し起ぐれば、卽ち變じて三十五個の小猴と做り、一擁して那妖魔を纏住き、腿を抱き腰を引き、眼鼻もわかず搔きければ、妖怪大いに慌て、急に圈子を把出す。行者も諸神も、他が圈子を弄ふを見て、急に走つて高峰へ退き逃る。妖魔も圈子を拋起け、小猴を悉く取つて收め、兵を領し洞中へ入り、緊く門を鎖しけり。行者衆神と商議し、「那魔よく圈子を使ふ。奈何してか勝つ事を得ん」托塔天王が曰く、「若他に勝ん事を要めば那寶貝を奪ひ、然して後擒にすべし」行者が曰く、「然らば老孫忍行きて偸みきたらん」と、逕に峰頭を跳下り、暗に洞口に至り、身を搖して青蠅と做り飛んで門内に入りて見るに、衆の小妖兩邊に排列び、老魔は高く臺上に坐して、蛇肉鹿脯熊掌なんどをならべ、悞しみ笑ひて酒を飲居たり。行者仔細に窺へども、那寶貝を見ず。そも何方に置きぬらんと、轉て臺の後に至り見るに、後の廳上に火德君の使ひたる火龍嘯き、火馬嘶き、那金箍棒を東の壁に靠在けたり。行者大いに悅び、鐵棒をおつとり、原身を現し走り出れば、衆の小妖慌駭き、上を下へと騷動す。老魔もおもひかけぬ事にて、惘果て、忙然たるひまに、行者は早く洞門を跳り越え、高峰に回る。正是、

魔頭驕傲無防備　主杖還歸與本人

○悟空大鬧金兜洞　如來暗示主人公

話說行者は、高峰に回りて洞中の趣を說居けるに、只聞、山坡の下に鑼鼓喧しく鳴り、喊の聲地に振ひて夥し。衆神驚き、何事にやと見るに、那兜大王、衆の小妖を帥て行者を趕けきたるなり。行者鐵棒を提げ走り向ひて、「潑魔何里へ走るや」と云終らざるに、魔王罵つて曰く、「賊猴頭、怎麽白晝に我が物を偸み去るや」行者が曰く、「這死業畜、汝こそ多く人の物を奪へり。敢て逃走らず、老爺の一棍を吃へ」と叫び擊つて蒐れば、魔王も鎗を輪して隔架し、戰ふ事八十餘回。さらに勝敗を分たざるに、早く天色昏に向たれば、相引にして立別れ、魔王は小妖を帥いて兵を收め、洞中に入り、門を緊々閉たり。行者は高峰に回りて、衆神に向うて曰く、

「那魔頭、老孫と數十合鬪ひ、斷然疲倦れ眠るべし。我再び洞中へ忍び入りて他が圈子を尋ね出し、偸みきたつて後魔を降さん」衆神、「是甚だ好し」と同意すれば、行者鐵棒を耳裡に收め、高峰を跳下つて又洞口に至り、身を搖して一個の促織兒と變じ、飛んで門内に入り、壁根に蹲り裏を窺へば、燈光あたりを照し、大小の群妖們、狼の喰ひ虎の嚥むがごとく、酒飯を吃著ひ、小時有りて家伙を收めて、都て窩舖を安排へ各眠に著く。約ふるに早二更の時分なれば、行者そろ〳〵忍んで後の房裏に到り窺ふに、那老魔令を傳へて曰く、「汝等嚴く洞門を看守せよ。恐らくは孫悟空、甚麽に粧けて忍び入り偸み去らんも知れがたし」とて頓て石牀に衾を開きかけ、衣服を脫去るを見るに、左の肱膊に那圈子を緊しく結著けたり。扨魔王衾を被りて睡りければ、行者又身を變じて黃皮吃蟀となり、石牀に飛上り、這うて衾の裏に入り、那老魔が吃膊に近付き、一口叮みければ、怪物身を翻し謚いて曰く、「這些少の奴才め」とて、牀を拂ひて寐ねければ、行者は寶具を偸みがたきを側り、牀を下りて又促織兒となり、房門を出て後面に至るに、只聞く、火龍吟じ、火馬嘶きぬ。那層門きびしく鎖をおろし、火龍火馬すべて裏裡につなぎて有るが故なり。行者茲に至りて本身を現し、門前に進付き、解鎖法を使ひ、門を推開けば、原來六種の火器相照して明なる事白日のごとし。行者頭を回らして四壁を見るに、東西兩邊に幾千の兵器を斜靠けたり。都て是太子の六個の兵器、火德君の火器なり。又一張の石の桌子の上に一つの盤兒有りて、一把の毫毛を放し置きぬ。是先に魔に取られたる毛なれば、大に喜び、拿起けて兩口の仙氣を吹きかくれば、變じて三五十の小猴となる。卽ち是に火刀火箭、および太子が六件の兵器を把取たせ、其身は火龍に跨り火馬を追立て、火勢を放ち、裏外一齊に燒立つる。其音烘々烈々として、さながら咋雷連砲の聲に似たり。洞中の群妖ども寐ほれ狼狽へ、走らんとするに路なく、火勢の爲に燒殺さるゝ者大半に及べり。行者欣然として、逕に高峰へ回りきたるに、時尙三更に不過。是より前、高峰には托搭天王、衆神と坐して行者が音信を待つに、忽ち令兜洞に火の光起りければ、列位一擁して推出すに、只看、孫行者火龍に騎つて、衆の小猴を從へ回りきたるに逢ふ。行者衆神に向ひ、聲を勵して曰く、「列位來つて兵器を收めよ」とて一喝すれば、衆の小猴忽ち毫毛と成り、行者が身に復りぬ。哪吒太子喜びて六件の兵器を收了れば、火德星君も、衆神に命じて火器を取收めしめ、只管行者が功を讚賀びける。

却說、那令兜洞の裏は、火焰紛々として天を焦しければ、兜大王大いに駭き、跳起て房門を走り出で、雙手に那圈子をとりて、東に推せば東火滅し、西に押せば西火消す。滿空の冐煙炎火

云ふ許なけれども、那寶貝を執つてかけ回る事一遍すれば、四方の烟火都て消え、群妖を助け救ふことを得たり。されども小妖大半燒殺され、後面に置し諸器悉くなし。只唐僧八戒沙僧三人と白馬行李は其儘にて有り。此のみ些の幸なり。妖魔憤つて曰く、「此火別人の放ちしにあらず。那孫悟空、又忍びきたりて、我が寶貝を偸んとせしかども、緊く抹勒けしゆゑ手を下すこと能はず、却て兵器を盜み火を放せり。量らざりき、賊猴に這條の手段あらんとは。されども那厮我が本事を知ず。千萬の機關を使ふとも、我を降す事能はじ。我に此寶貝ある裡は、大海に入りても溺るゝ事なく、火地に赴けども焚ず」と自負げて有りけるに、早鷄鳴き天曉けわたりぬ。此時高峰には、哪吒太子兵器を得て心勇み、行者を勸め諸神を引率して、再度金兜洞へ押寄せ、此度は是非とも妖魔を擒にせんと勇威を逞しうす。行者逕に洞口に至り、大音に、「潑怪出できたりて、老孫と三合を合せよ」と叫ぶ。小妖大いに恐れ、逃入つて斯と報ずれば、兕大王例の長鎗を挺著げ、寶貝を帶びて走り出で、喝つて曰く、「汝賊猴度々无狀をせり。這般は斷然一鎗の下に刺殺し、燒死したる者の仇を復さん」行者嘲わらひ、鐵棒を輪して相迎へ、鬪ひを交ふるに、哪吒太子瞋を生じ、火德星君も、神兵火部の者を令して妖魔を攻させければ、雷公は雷掮を放しかけ、托搭天王も刀を擧げ、八方より揉立てたり。されども妖魔事ともせず、

袖中より暗に那圈子を取出し、空中へ抛起ぐれば、叫聲につれて、神兵の火器、雷公の掮、天王太子の刀鎗、孫行者が棍、殘らず取りて收めけるにぞ、衆神も行者も又空拳となり、這々の體にて高峰へ逃退く。妖魔全く勝利を得て洞中へ回り、小妖に命じて、石を搬び土を動して門を修造し、緊しく防ぎ守りけり。

二編　卷之十

○前章之下回

話說金兜山の兜大王、不惻の寶貝を帶びて兵器を收め取りければ、さしもの孫行者諸天神も、更に那妖を降す事能はず、殆もてあましけるが、行者又思惟を回らし、諸神に向うて曰く、「我おふに、再び天に昇り我佛如來に問はば、佛必ず慧眼をもつて大地四部州を觀看し給ひ、這怪那方の妖魔にて、圈子は何の寶貝なる事を知り給ふべし。然らば、那を降す事安からん」衆神是を聞いて尤と同じければ、行者又觔斗雲に駕つて、一瞬に靈山落下に至るに、忽ち祥光四方にたなびき、其中より人の聲有りて、「孫悟空、唐僧を護りて西天に至らず、却て玆にきたるは何事ぞ」といふ人あり。行者驚き、頭を回して這人を見れば、比丘尼尊者なり。行者禮をなして曰く、「我這に來る事、則ち唐僧の難を解かん爲、如來に問ふ事有るが故なり」比丘尼が曰く、「然らば汝怎麽寶刹に登らずして、這に來るは何ぞや」行者が曰く、「我始て如來の在所へきたれば、未だ路をしらず。幸にして汝に遇ふ。願はくは我を引いて如來の寶刹に行け」比丘

尼承引し、遂に行者を誘ふて雷音寺にいたり、佛に拜謁して斯と告げければ、如來行者を近く召され問うて宣はく、「汝孫悟空、前に觀音菩薩に命じ、汝が身を解脫せしめ、唐僧を保けて此にきたり經を求むると聞くに、怎麽只獨玆にきたるや」行者頭を叩きて曰く、「弟子唐僧を保けて、多くの難を凌ぎ西に赴き候に、金兜山に至り一個の惡魔頭に逢ふ。名を兜大王と云ひ、神通廣大にして、師父と徒弟を捉へて洞中に苦しめ候により、弟子諸天神をかたらひ、苦戰する事數度に及び候へども、那怪一個の圈子を以て、我等が兵器を把て套去り候ゆゑ、更に降す事能はず。願はくは我佛如來慈をたれて魔を擒にし、唐僧を救ふ謀を示し給へ」と敬んで拜し求めければ、如來聞き給ひ、慧眼を以て遙觀し、早くも知識給ひ、行者に向ひ宣はく、「那妖魔、我是を知ると雖も、猥に說破すべからず。我今十八尊羅漢をして、寶庫を開き、十八粒の金丹砂を各一粒づつもたせ、汝が力を助けしめて那魔を捉へしめん」行者大いに喜び恩を謝す。佛則ち十八衆の阿羅漢に命令を傳へ給へば、各領掌し、寶庫の裏より十八粒の金丹砂を取出し、一粒宛をとつて、行者と俱に祥雲に駕り、多時ならずして金兜山に著く。天王太子是を見て勇み悅び、「孫大聖早く妖王を呼出し給へ」と勸むれば、行者頓て拳頭を捻り、洞口に到り罵つて曰く、「潑怪出來れ」と叫びければ、小妖等走り入りて斯と報ず。魔王怒つて、鎗をさげ寶貝を

帶びて、石門の外に跳り出で、罵つて曰く、「賊猴幾番となく我に負け廻避りながら、又來つて呿喝くは何事ぞ」行者が曰く、「汝濺物、我が來るを怕るゝならば、降服して唐僧師弟を回し、慇懃に陪禮せば饒さん」那妖魔が曰く、「那三個の和尚、すでに洗ひ淨めたれば、遠からずして宰殺し屠吃ひ、骸骨は汝に得させん」行者聞いて大いに怒り、拳を固めて擊てかゝれば、妖王も鎗を綽いて撞いてかゝる。行者右に跳り左に跳りてしばらく繰り、頭を回して敗走る。妖魔は是を計とはしらず、趕けて洞口を離れ、南にきたる。行者時分はよしと、卽ち羅漢を招きければ、羅漢半空の中より、金丹砂を把つて、妖魔を劈ひ一齊に抛下せば、妖怪飛砂を見て急に頭を回して是を避るに、忽ち足の下三尺餘の深さと成りければ、大いに慌得て身を跳らせ、一層に浮上れば、又二尺餘の深さとなる。益驚きながら、足を拔出し、那圈子をとつて撇上ぐれば、叫ぶ聲につれて、十八粒の金丹砂を悉く套めとり、歩を回して本洞へ皈り去りぬ。羅漢は惘果て、手を空しうして雲の端に立つ。行者近く進んで問うて曰く、「衆羅漢、何故金丹砂を降し給はざる」羅漢が曰く、「他一聲叫びければ、金丹砂悉く見えず」行者笑つて曰く、「又是寶貝を抛げて奪去りしならん」諸天神が曰く、「那廝已に佛の力にも及ばず。今は何とかせん」とおもひ煩ふ。然るに降龍伏虎といふ二個の羅漢、行者に向ひ、「如來我等に宣ひし事あり。妖怪もし神通廣大にして金丹砂を收めとらば、孫悟空に命じ、離恨天に昇り、太上老君の所に至り、妖王が踪跡を尋問しめば、一鼓にして擒にすべし、との事なり」行者聞いて曰く、「恨むべし恨むべし。如來其時我に斯と告げ給はゞ、遠く羅漢を勞すまじきに。さらば太上老君に見えて事を糺さん」と身を搖して觔斗雲に駕り、直に南天門に入りて、三十三天の外、離恨天兜率宮に到り、老君に拜謁して曰く、「老孫唐僧を保て西天に到り經を需んとするに、一個の阻礙あり。因て老君に問明らめんとす。老君が曰く、「西天の道の阻、我何ぞ預り知る所ならんや」行者が曰く、「老君の宮中に査あり。我改めん」と裏面に入りて西に看東に見つゝ、幾層の廊下を過行くに、忽ち看、牛欄の邊に一個の童子熟く睡り居けるが、青牛欄中にあらず。行者立回つて曰く、「老君の青牛那里へ走り候や」老君大いに駭き、「這業畜、幾時走りしや」と那童子を呼醒し喝つて曰く、「汝何ゆゑ眈睡りて牛を走らせしや」童兒頭を叩いて曰く、「弟子丹房の裏にて一粒の丹を捃ひ服し候ひしが、其儘睡りて牛の走りしを知り候はず」老君が曰く、「おもふに、我前日火丹を煉る事七粒、過つて一粒を落したるに、汝拾ひて吃ひしならん。那丹一粒を吃はゞ、眠る事七日に及ぶ。那業畜、汝が眠りて人の看管なければ、下界へ走り去りしならめ」行者が曰く、「業畜また寶貝を偸み去らずや」老君聞て急に寶貝を査看るに、金剛琢を見ず。老君駭き、

老君
二十八羅漢
行者

太上
老君
収妖
魔

「那厮已に金剛琢を偸み去れり。大聖もし那が在地方を知れりや」行者が曰く、「現に那厮金兜山の洞に在て、唐僧師徒を捉へ、其上一個の圈子を抛げて、我が金箍棒を始、多くの兵器を搶れり」老君が曰く、「那金剛琢は、乃ち是我魔を化するの器にして、幼きより煉成の寶貝なり。汝甚の兵器を憑むとも、水火ともに能近付く事なし。他もし我が芭蕉扇を偸み去らば、我も奈何ともする事能ふまじきに、是一個の幸なり。いざ汝と俱にいたりて業畜を收めん」と、芭蕉扇をとりて、行者と俱に祥雲に駕り、逕に金兜山に降り著く。托搭天王父子、諸神羅漢も是を見て、迎へて禮をなす。老君行者に令し、「汝去て他を誘ひ出せ。我よく他を收めん」行者領掌し、跳つて峰頭を下り、洞口に到つて罵つて曰く、「潑業畜、快く出て死を受けよ」と妖魔が曰く、「這賊猴、又誰をか憑みきたりしや」と、鎗をとり寶貝を帶びて、門外へ走り出る。行者一言の問答もせず、飛びかゝつて妖魔の起臉を強く打り、身を回して跑出せば、那魔焦燥し、鎗を綽いて趕くる所に、忽ち高峰の上に聲有りて、「我が牛兒久しく家に還らず。更に何日をか待つや」と呼はる。妖魔頭を擡げて是を見るに、太上老君なれば、心驚胆戰して曰く、「這賊猴、怎麽してか我が主人公を憑みきたりしや」と惘果てて停ちけるを、老君咒語を念へ、芭蕉扇をもつて一下扇げば、妖魔圈子を老君に抛回しぬ。又一扇すれば、那怪力軟觔麻れて、遂に本相を現すに、原來一隻の青牛なり。老君金剛琢に仙氣を吹かけて、青牛の鼻子に穿し、袍帶を解いて是にかけ、片手に牽き給ふ。今に到りて牛鼻に拘兒を穿す事、此故なり。斯て老君衆神に辭し、青牛に跨り、彩雲に駕りて、逕に離恨天へ回り給へば、行者は衆神と俱に洞裏に打入り、衆の小妖を盡く打殺し、諸神の兵器を把つて還し、勞を謝しけるにぞ、天王太子を始め、十八羅漢に至るまで、悉く天に回り終る。其後唐僧八戒沙僧を解放し、白馬行李を收拾め、師徒四人洞を離れて、大路を尋ね道を急ぎぬ。

○禪主呑飱懷鬼子　黃婆運水解邪胎

時に路傍に聲有りて、「唐僧們齋を吃して去れ」と呼ぶ者あり。三藏等其故をしらず、大いに怪しみ、頭を回して是を見るに、卽ち金兜山の山神土地なり。紫金の鉢盂を捧げて曰く、「是は孫大聖向化して請得たる齋飯也。長老大聖の良言を聽ず、悞て妖魔に捉へられ、多く大聖を勞し、稍く免るゝ事を得。此飯を吃して行者が孝恭の厚きを知り給へ」と申しければ三藏泪を流し、「我圈子の中を出ずんば、殺身の害に遇ふまじきに、八戒が言に迷ひて死地に陷り、多く徒弟を煩はせり」と云ふ。行者八戒を訶つて曰く、「這獸子、我が禁誡を信ぜず、師父を迷して這

大難に遇はしめたり。老孫天を翻へし地を覆して、天兵と水火と我佛の丹沙とを請ひ來るとも雖へ、なほ妖魔を降す事能はず。漸如來の根源を教へ給ひしに倚て、纔に老君を請ひきたりて收伏けたり。以後かゝる禍を引出さば、妖怪より先に汝を擊殺すべきぞ」と誡めければ、八戒頭を叩きて罪を謝す。三藏も深く行者が勞苦を謝し、四人那齋飯を吃するに、尚熱氣騰々溫なれば、行者訝り、「此飯汝に預けて多時なるに、尚溫なるは何ゆゑぞ」と問ふ。土地跪いて曰く、「小神大聖の功完を賞して溫めきたれり」行者其厚情を謝し、師徒快く吃し終り、鉢盂を收拾め、土地山神に辭し、又西に向ひ、風に飡し水に宿して、行く事數月、また陽春の時節に逢ふ。然るに前路に一道の小河あり、水澄々とし、波湛々たり。三藏馬を勒へて看れば、河の那邊に柳蔭碧を垂れて、微に茅屋幾椽あり。則ち徒弟に向ひて曰く、「那人家定めて擺渡的あらん。汝等呼び來らして此河をわたれ」八戒聞いて行李を放下き、高く呼んで曰く、「擺渡的船を撑しきたれ」と連呼ぶ事四五聲に及びて、只看、那裏囲より一人の者出できたり、船兒を棹さして東岸に著け、「旅客快く船に乘て河をわたり給へ」と云ふ。三藏等馬を下りて近付き見るに、是一個の老婦人なり。三藏怪しみ問うて曰く、「汝は是擺渡的なるや」婦人が曰く、「貴意の如く渡守なり」行者が曰く、「稍公は何ゆゑあらずして、稍婆に船を撑しむるは、謂ばし有る事か」老婦微笑みて答へず。三藏師徒は白馬行李を把て船に乘り終れば、婦人頓て棹を揚げて西岸に著く。三藏師徒岸に登り包を開き、幾文の錢鈔を取つて他に與ふるに、老婦更に多寡を爭はず、纔を樹に拴在ぎ、嘻々と笑うて屋の裡へ入りぬ。三藏河水の清を見て八戒に分付け、「我今口渴けり。汝鉢盂を把つて些の水を留みて來り吃せしめよ」といふにぞ獸子が曰く、「我もまた些吃ん事をおもへり」と、直に一鉢を留取て師父に與ふ。三藏些し飲み、殘れるを八戒に與ふれば、獸子接來、只一氣に飲乾し、「快々」とて三藏に扶侍馬ひて行く處に、三藏馬上に有りて呻吟し、「我甚だ腹痛す」といへば、八戒も面を皺めて、「我も頗りに腹痛めり」と悶ゆ。沙僧が曰く、「おもふに是冷水を飲みし故ならん」といふうちより、三藏大いに聲喚、「痛み已に緊し」とて、馬上に悶煩へば、八戒も路頭に臥轉び、疼痛に堪へかね、大聲に泣きかこち、肚を摸るに、漸々に肚子大、血團肉塊有るがごとくなれば、驚き悲しむ事大かたならず。行者も沙僧もてあましけるが、前路に一村舍有りて、樹の梢に兩個の草把を挑けたり。行者が曰く、「師父暫時疼痛を忍び給へ。那村に酒賣る家有りと見えたり。老孫行きて熱湯を請ひきたりて勸め、且藥賣る者を尋ねて買求め、腹痛を治せん」三藏苦痛の中にも、是を聞きて大いに悅び、徒弟に扶けられて村舍門口に至り、馬を下りけるが、那門外に一個の老婆あ

り、坐して麻を績居たり。行者進んで問らく、「我們は大唐より西天に往く者なるが、前に師父と兄弟、河水を吃し、肚腹脹痛む事甚し。汝藥賣る店あらば教よ」といふ。老婆々聞いて大いにわらひ、「和尚們かの河水を飲みしとや。不好々々。先々家内へ入り給へ。解を說聞し進らせん」と云ふ。行者聞いて、扨は仔細こそあらめと、己は三藏を扶け、沙僧は八戒を扶けて入るに、兩人は聲々喚々、肚子を押へ、面黃み眉を皺めて、草舍の裡に坐す。行者老婆に向ひて曰く、「汝些の湯を焚いて我が師父に與へよ。我厚く謝せん」と云へども、老婆は湯を焚かんともせず、裡に走り入りて二三人の婦人を呼びきたり、唐僧を望著めて目を細くし、嬉笑ふ體なれば、行者大いに怒り、大眼を見張り牙を一蹉て睨みければ、婦人ども大いに恐れ、轉づ倒つして逃入るを、行者腕を伸べて老婆を搔み扯住ければ、老婆謝びて曰く、「我湯を焚きて長老に與ふるとも、腹痛治事なし。和尚先放し給へ。其解を說聞かせ申さん」行者聞いて漸々手を放しければ、老婆が曰く、「這里は是西梁の女人國にて、這一國悉く女人のみにて男子なし。故に和尚等を見て歡喜び申すなり。那河を子母河といへり。又王城の外に迎陽館の驛あり。驛門の外に泉あり、號けて照胎泉と云ふ。此里の人、年二十以上に及べば、那河水を飲み然うして後忽ち肚大いに痛む。是卽ち胵脹する印なり。扨三日を過ぎて那照胎泉に到り影を寫すに、双影有るを見れば、孩兒を降生に定りぬ。今長老等那河水を飲給ひ胵痛むは、是胎氣ところなり。日あらずして該兒を生み給ふべし。怎麼熱湯のよく治す處ならんや」と語るにぞ、三藏聞いて大いに駭き、「已に斯のごとくならば怎とすべき」と肚をおさへて泣悲しむ。獸子も仰天し、「我們男の身にて子を胵み、那の穴よりか生むべき」と惘惑ふ。行者笑つて曰く、「古人いへる言あり。瓜熟すれば自ら落ると。臨產の節に至らば、脇下より裂けて產出でなめ」と云ふ。懼せば、八戒聞いて筋なえ骨拔けて恐れ慌て、「罷了々々。死了々々」と泣きわめきければ、沙僧笑ひて曰く、「二哥々、あまり腹をしめる事勿れ。腸を錯ひ胎前の病を做さん」獸子益泪を流し、行者を拜みて曰く、「師兄、這老婆に問うて、近里に手の輕き穩婆があらばやとひ來らせ給へ。今痛み緊しく、一會一陣肚の塊動くは、催陣疼ならん」三藏が曰く、「婆々、這里に醫家はなきか。あらば行きて一帖の墮胎藥を買ひ來りて我に服さしめ、胎を打下得させよ」と請ふに、老婆が曰く、「迚も藥にて墮胎する事なし。但し這正南に一坐の解陽山破兒洞と云ふ處あり。洞裡に一個の落胎泉あり。那井裏の水を汲來りて一口飲めば、能胎氣を解下す。されども今は輙く取りがたし。其ゆゑは、向年如意眞仙といふ人きたり、那破兒洞にきたり住み、名を改めて聚仙庵と號し、落胎泉を護りて、敢て輕々しく人に與へず。若水を要めんと欲する者は、

羊酒果盤を捧げ、志誠に拜し要むれは、一碗の水を賜ふ。今看る長老們は只是行脚の僧、何ぞ許多の錢財を出し供物を買ふ事を得ん。只命を俟ち時を俟ちて生産し給へ」と說ふを聞き、行者滿心歡喜、又問うて曰く、「這里より那解陽山迄は幾程の路程あるや」婆々が曰く、「三千里に餘れり」行者が曰く、「好了々々。師父心を放し、老孫が水を取りきたるを待ち給へ」とて老婆に請うて一の瓦鉢を把り、草舍を出で雲を縱つて去りければ、老婦大いに駭き、「這和尙雲に駕る事を會したり」とて禮拜し、是より三藏師徒を活佛也と尊び、前の婦人を呼出して禮拜させ、湯を焚き飯を調じてもてなしつゝ介抱しけり。

斯て行者は、少頃に解陽山に到り、雲頭を按下て觀看に、背陰所に一所の庄院あり。依て進み至り見るに、一人の老道士、綠茵の上に坐し居たり。行者瓦鉢を放下、禮をなすに、道士問うて曰く、「汝は那方より來れる者ぞ」行者が曰く、「貧僧は東土大唐の者なり。欽差を奉けて西天に赴き經を要んとす。然るに師父誤つて子母河の水を飲み、肚疼みて禁じがたし。曾て土人の說ふを聞けば、是胎氣を結成りとぞ。又寶山に落胎泉ありと承はり、特きたつて如意眞仙に拜謁し、些の水を求め、師父を救はんとす。願はくは眞仙の所在を指引へ給へ」道士咲うて曰く、「此所就ち破兒洞と云ひしが、今改めて聚仙庵と號し、我那如意眞仙の徒弟なり。汝は名を何と稱ぶや」行者答へて曰く、「唐の三藏の大徒弟、孫悟空と申す者なり」道人又問へらく、「汝花紅酒禮那里に有りや」行者が曰く、「我們は是行脚の僧、一物をも貯へず。只些の水をこひ要めんとす」道人咲うて曰く、「我が老師父此靈泉を護住りて、輕々しく人に送與らず。汝回去つて禮物を辨へきたれ。さもなくば通報しがたし」行者おし返し、「先入つて老孫が名を說へ。眞仙かならず禮物を貪らず、一井の水を盡しても我に贈らん」道人此一言を聞いて惘れかへり、走り入りて斯と報じければ、眞仙一度孫悟空が名を聞いて勃然と怒り、素服を脫ぎて道衣を穿ち、手に一把の如意をとり、庵門を跳り出て曰く、「孫悟空何里に在りや」と叫ぶ。行者急に禮をなし、「貧僧卽ち孫悟空なり」とこたふ。眞仙眼を瞋らして曰く、「汝が師父は唐の三藏とや。然らば汝路上に聖嬰大王に會ひたる事在るべし」行者が曰く、「他は火雲洞に紅孩兒といふ潑旌なり。先生何の爲是を問ふや」眞仙が曰く、「他は我が舍姪なり。我は是牛魔王が舍弟なり。前に家兄音信れきたりて我に告げぬ。唐の三藏の徒弟孫悟空といふ潑猴、我兒を害せりと。是に依つて我汝をたづね仇を復さんとおもふ事久し。何ぞ唐僧が胎氣を解くべき神水を與ふべき」と罵りぬ。行者笑うて曰く、「先生差れり。汝が舍兄は就ち我と結拜兄弟なり。又那令姪は、正果に歸して觀音菩薩に隨ひ、善財童子となれり。何ぞ我を恨むる事あらん」眞仙益怒つて曰く、

「這潑猴何ぞ多言なる。我が舍姪獨稱して王となるは潔し。人の奴と成つて何の好事かあらん。我這如意を吃へ」とて行者をめがけ擊てかゝる。孫行者も焦燥、鐵棒を輪して鬪ふ事十餘合、其棒滾々として流星のごとくなれば、眞仙筋力勞れ、如意を把いて山へ敗登る。されども行者是を趕んとせず、却て庵内に入りて水を尋ねんとす。然るに前の道人早く庵門を關しければ、行者手に瓦鉢を拿ちて門前に走り至り、金脚を上げて門を踢破り進み入るに、那道人井欄の邊に立ちて井を守りぬ。行者棒を上げて道人を擊たんとすれば、道人戰々兢々逃退く。其間に行者は吊桶を尋ねとり、已に水を汲まんとする折しも、眞仙又走りきたり、如意を把て行者が脚を引かけて打跌す。行者急に爬起き、棒を使うて擊んとすれば、眞仙早く逃退く。又水を汲まんとすれば、他又走りきたつて行者が脚を引跌す。行者大いに焦燥、左の手に棒を輪し、右の手に吊桶を振つて水を汲んとするに、眞仙また走り依つて行者が脚に如意を鉤て引跌す。此時行者おもはず索子を手放しければ、吊桶は索子ともに井中へ落込んだり。行者大いに怒り、棒を輪して擊んとすれば、眞仙早く逃去つて敢て敵せず。玆に於て行者暗想しけるは、已に吊桶を落したれば、水を汲む事能はじ。よし水を汲んとするとも、他又きたつて妨げなん。一旦回り、幇手を呼びきたり水を取らんと。就ち雲頭に跳りあがり、逕に村舍に回り見るに、三藏疼痛に堪ず呻吟、八戒嚷き叫ぶ聲たえず。行者裏に走り入り、三藏に向ひ前の條を說く事一遍し、此般は沙僧と俱に、謀を設け水を取來りた候はん」と云ふに、三藏泪を流して曰く、「汝們兩人那山へ往かば、我と八戒は誰有てか伏侍せん」主の老婆が曰く、「羅漢心を放し給へ。我等よく伏侍せん」行者が曰く、「汝們女流の輩、恐らくは師父を穢し辱しめん」老女が曰く、「我家都て四五口、皆幾歲年紀、風月の心なし。肯て羅漢に迫り辱めじ。もし長老們第二家に到らば、皆年少の者のみにて、放ち去しめず、一定交合せん事を要めん。假ひ不從とも命を害するに至り申さん」行者聞いて纔に心を放し、老婆に吊桶と繩とを要め、沙僧と俱に雲に駕りて去りけるが、半時ばかりにして解陽山に至り、雲を按下て逕に庵の外に至り、行者沙僧に示しけるは、「汝は一邊に躲著、我眞仙と交戰ふ機に乘じ、汝庵裡に入りて水を汲取つて去れ」と令し、其身は棒を掣げ門外に進み、「門を開けよ」とぞ叫びける。如意直仙大いに怒り、「潑猴又きたりて我神水を偸まんとするか」とて、如意を揮つて擊つてかゝる。行者棒を使うて急架め、門外に出て挑戰ひ、一步二步と繰引にし、遂に山坡の下まで釣出して戰ふにぞ、沙僧時分はよしと、吊桶を提著げ門内へ進み入るに、那道人井を守りて汲せじと支へければ、沙僧吊桶を放下て、寶杖を把つて道人が左の肩を强く打ちければ、大いに怕れ逃去りけり。沙僧早く吊桶をとつて井

中に下し、滿々と汲取り、庵門を走出で雲に跳上り、高く呼んで曰く、「大哥々々、われ已に水を汲得たり。今は其者を饒し回り給へ」行者聞いて大いに歡び、眞仙に對つて曰く、「師弟已に水を取去れり。因て且く汝を饒さん」と。眞仙大いに怒り、如意を以て行者が脚を鉤跌さんとす。行者閃と身をかはし、一交に如意を奪取り、折つて兩段となし、又拿て四段に折り、擲つて曰く、「潑業畜、是にても猶无禮せんや」と罵りければ、妖仙戰々兢々、頭を抱へて跳去りぬ。行者呵々と咲ひ、雲に跳り上る。正に是、有詩證とす。

眞鉛若練須眞水　眞水調和眞汞乾
靈砂靈藥是仙丹　嬰兒枉結成胎像
推倒傍門宗正教　心君得意笑容還　土母施功不等閒

斯て行者沙僧、眞水を得て喜々、逕に村舍に回り來るに、那獸子肚を腆着へて門に倚りかゝり喚き居たり。行者戲れて曰く、「獸子、何時占房するや」八戒泣いて曰く、「哥々戲をいふ事勿れ。怎水を取りきたれるか」沙僧が曰く、「已に取得て來れり」とて房内に入れば、八戒も匍匐ひて裡面に入る。三藏兩個を見て、「徒弟快く水を飲せよ」といふにぞ、老婆花磁の盞子を取出して行者に渡せば、就ち半盞宿みとりて三藏に進む。三藏一口を飲下し、些し人心つきたり。

八戒が曰く、「我は盞子より吊桶ごと飲下さん」婆々大いに咲ひ、「和尚此水を悉く飲盡さば、腸子も肚子も都て化盡し、忽ち死せん」といふにぞ、獸子大いに駭き、又盞子を請ひて僅に半盞を吃ひ終る。少時有りて三藏八戒ともに腹中絞痛み、只聞、轂轆々々と五六陣腸鳴りて、獸子は堪かね、大小便を席上に垂流せば、三藏も靜所に行かん事を要む。行者が曰く、「師父、猥に風地へ出たまふな。恐らくは風邪に冒され、産後の疾を弄出さん」と。左右するうち、兩個とも肚子の疼痛住り、漸々に腫脹も消し、血團肉塊と見えしも化けたれば、始て生に皈りたる心地し、歡喜ぶこと限なし。老婆は此裏に、白米粥を煎て兩個に進め、「長老們、産後にて肚すべて力なからん。是を吃して虛を補ひ給へ」と云ふ。八戒が曰く、「粥もよしと雖も、先湯を燒きて洗個澡させよ。然うして後粥を吃はん」沙僧が曰く、「哥々、必ず洗足すべからず。坐月子の人湯を弄へば、斷然病を生ぜん」八戒が曰く、「然らず。我は誠の産ならず、只是小産なれば苦しからじ」老婆聞いて大いにわらひ、則ち湯を焚き、兩個に與へて手脚を淨めしむれば、三藏悅び、白米粥を兩盞食したり。八戒は是に引かへ、十七八盞を吃ひ、猶飯をも吃せん事を要む。行者惘果て、「汝産後に斯まで大食せば、沙包肚の病を得べし」といふにぞ、八戒已む事を得ず箸を收めけり。時に主の老婆三藏に向ひ、「願はくは殘れる水を我に賜らんや」と請ふ。三

藏が曰く、「我に有りて无益水なれば、心に任せ給へ」といふにぞ、老婆大いに悅び、吊桶に殘れる水を瓦礫にうつし、後邊の地下に埋み貯へける。是をもて見れば、如何さま得やすからざる眞水とはしられたり。斯て家裡の女、幸にして水を得たるを歡喜び、齋飯を整頓へ四衆をもてなしければ、師徒大いに悅び、其夜は一宿し、次の日旅裝を調へ、老婆に厚く禮謝し、村舍を立出る。誠に行者が功勞にて鬼孕をまぬかれけるは、正に是、

洗淨口業身乾淨　銷化凡胎體自然

是より四衆また西を望んで走る。畢竟那の地方に至るや、追て第三篇發兌するをまちて分解給ふべし。

通俗西遊記三編叙

予夙有勝癖。每逢熙々春煦之候。未曾能無遠游之志。而不果。丁亥蚤月。賴遇幸神之誘。宿裏糧裝西遊之行李。經紀廻阿。十月之初。創入攝僦居。張業淹留。於今七年。恍如一夢。間日書賈某携來一書。索予飜譯。採閲之。西游之眞詮也。予固不學。殊不解俗語。固辭再三。書賈不敢許。不得已。此夕。創就燈下讀一回。茫乎不知所向。絶似五里霧中人。熟讀數回。厘似覺其大旨。强下筆。闕疑省不通。粗解釋其意。雖然比之先哲翻譯之書。豹尾續貂。固無論。紕謬亦應不寡。書成予竊有感。玄奘之西遊者。所經見崇。所到見重。遂到西天。拜佛得經。予西遊。所經舐苦。所到喫艱。未得其志。何其事之霄壤乎。獨嘆擱筆云爾。

于時天保四年秋八月浪華詞花園中寒燈下誌之

岳亭五岳

三編　卷之一

○法性西來逢女國　心猿定計脫烟花

却説三藏師徒は、老婆が家を立出でて、三四十里も行き給ふに、忽一構の城地あり。是則ち西梁女國なり。三藏三個の徒弟を顧みて曰く、「此國貴賤老少都て皆婦女なり。爾們情愿で往來に放蕩の事あるべからず」三個師父の命に遵ひて行く。頓て東門の街に出るに、衆部の國人、四個の者の來るを見て、手を拍て大笑、人種來れりとて、諸方より群り集り、立地路を塞て通さず。四個の者は上前難く、怎麼はせんと停立む處に、八戒曰く、「我今道を撥開て見せ候はん」と頭を擧げ大いなる耳を振りたて、觜を延し唇を翻し、一聲呵と吶喊ければ、何かは以て怖かざらん、兩邊へ發的ぞ亂躱る。四個の者は打笑つゝ上前行く處に、一人の女官、路の一邊に立つて高聲に嘯り、「個々慢に城門に入べからず。驛館に入て姓名を名宣り、簿子に記し、寡人國王に奏し、其後に行しむべし」三藏是を聞いて、馬を下りて女官に連れて一箇の官舍に到り看に、門の上に額を扁けて、迎陽館の三字を記せり。三藏行者に向ひ、「昨日婆が云ひし詞

果して誠なり」とて裡に入りて座し給へば、女官茶を侑め、禮畢て稟しけるは、「寡人は迎陽館の驛丞にて候。列位は那里より來給ひしや」行者答へて曰く、「我們は東土大唐より西天に到り經を求るの僧にして、我師父は便ち唐帝の尊弟にて、三藏と號すなり。又吾們三個は、唐御弟の御弟子にて、關文を齎來れり。願くは貴婦、這關文を證見として國王に奏聞ありて、快く吾們を西方に行かしめ給へ」驛丞筆を採りて始終を寫著し、敬恭く三藏を禮拜し、「寡人聖僧の來り給ふを知らず、遠く御迎へにも出候はず。罪を救させ給へ」とて宦事的に分付けて、齋を侑め萬般と欵待させ、「寡人は國王に奏聞して關文を査勘、疾々西方へ送り候ふべし」と云。三藏懽喜ひて謝答し、迎陽館に宿し給へば、驛丞は衣冠を整へ、城に入りて國王に見え、逐一に奏聞す。西梁國の女王是を聞いて大いに懽喜び、文武の女官に向ひて曰く、「吾國中開闢より以來更に男子なし。于茲おいて陰陽の道を失ふ。今日唐王の尊弟我國に來り給ふは、寔に國家の大倖ならずや。我彼御弟聖僧を迎へて國王と做し、我は皇后と成つて陰陽配遇して子を生じ、永世帝業を傳へは豈善しからずや。昨宵吾、金屏生彩艶、玉鏡展光明と夢見たるは、便ち此吉兆ならん」と曰へば、衆位の女官們一齊に頭を傾け、「主公の命至極せり。寔に是萬代に家を傳ふる尊計なるべし」と悉く勇み仲眉びけり。此時驛丞の曰く、「當下彼師弟を見るに、唐僧の相貌は、堂々として實に國君の體を做りと雖も、唯三個の徒弟們、形相兇惡にして妖魔の如く、更に人に形どらず。他們は住め置きても快活なし。關文を査勘めて彼三個に遞與、西方に遣して經を取せ、唐御弟一個を住め置べし」衆位の女官曰く、「驛丞の詞理に當れり。唯配合の事、媒妁無くては協ふべからず」女王曰く、「然ば當駕大師を媒妁と做し、驛丞は主婚と成るべし。趁早迎陽館に到りて、唐御弟に此事を說話れよ。愈諾許する時は、我城を出でて是を迎ふべし」大師驛丞勅を受けて、急ぎ迎陽館にぞ到りける。

此時三藏は、大師の來るを聞いて行者に對ひ、唯今大師爰に來るは何の譯ならん」行者曰く、是必ず婚姻を求むるなるべし」三藏大いに驚き、「他若强ひて我に勸住めば怎麽して善しからん」行者曰く、「老孫能き處置あり。他們只等勸住るならば、旦望に任せて婚姻を套上へ給へ」と未だ云も果らざるに、大師驛丞入來り、互に禮畢りて大師の曰く、「唐御弟に際なき懽喜を告候はん」三藏の曰く、「我は出家なれば、何程の事も然樣に歡喜ばず」大師曰く、「抑此國は、西梁女國と稱して、開闢より孤陰の國なり。今僥倖に御弟聖僧此國に降臨し給ふ。万望吾國一圓の富貴を以て、御弟を入贅と做し、南面して孤と稱せしめ、吾國王皇后と成らん事を願ふ。是故に貧道に命じて媒妁と做し、驛丞を婚禮主とす。御弟快く其意に遵ひ給へ」三藏唯頭を低れ

て一向に答へず。大師又曰く、「大丈夫は時に應じて衍るべからずとかや。豈一國を讓りて女婿と爲る事、天下に又有るべけんや。速に御返辭有るべきなり」三藏增々答へず、獸子の如く啞の如く、一言の應もなし。大師一向すゝむる時、三藏終に行者に向ひ、「汝は此義怎麽思ふや」行者が曰く、「老孫是を考ふるに、師父此處に止り給ひて善しからんと存ずるなり」三藏の曰く、「我此處に止らば、誰か西天に到り經を把來たる者あらんや」大師の曰く、「貧道宜く計ひ候はん。先唐御弟は、我國王と婚禮をなして爰に止り、帝王と成らせ給へ。三個の御弟子達は、婚姻の宴席濟みなば、關文を査勘め西天に遣して、經文を取らせ給ふべし」行者聞いて、「大師の辭大いに理なり。我們師父を爰に止め置き、老孫們三個西天に行きて經を把來り、爺娘に見え盤纏を貰ひ、大唐に皈り候はん」と云へば、大師驛丞是を聞いて大いに懽喜び、行者を拜謝し、「長老多くの恩情に成りぬ。我們早く立歸りて國王に奏聞し、城を出でて迎奉らん」と勇み懽喜び歸けり。三藏は行者に向ひ、「此潑猴、都て我を弄殺して此處に捨置き、婚姻を做しめ、儞們西天に到り佛を拜して經を求んとす。我假令死すとも斯る事を做すべけんや」行者が曰く、「師父焦慮あるべからず。老孫師父の尊意を能く悟りたれば、實に此事を做すにあらず。唯悲きは、此處に來り此人に逢ぬ。渠が望む處によりて謀計を爲さどれば、師父爰を遁れ給ふ事協ひ難からん。其仔細は、渠吾望協はぬ時は、關文をも査勘めず、我們を西方へ送るべからず、儻又惡念を發しなば、多勢を以て師父を害し、尊身の肉を分採て、香囊と做すべきなり。然あらば、吾儕手足を搖す事能はず。師父の爲に是を防ば、大勢を打殺さん。此一國の人都て妖精にあらず。平人を打殺さん事、師父原來忍び給はざる處なり」三藏の曰く、「儞が言ふ處尤なりと雖も、唯怕くは、國王我を招いて配合の禮を行ひなば、吾佛家の德業を破り、原の人間に墮落すべし」行者聞いて、「是些しも煩惱なし。今日渠城を出でて、師父を迎て婚姻をなし、皇帝の禮を行ふべき間、師父管ず辭退せず、龍車に乘りて城に入り、國王を賺して關文を査勘めさせ、我們を招いて遞與、西天へ遣すと云ひ給へ。偖又吾們三個城を出る時、國王を勸めて城外まで送り給へ。其時老孫定身の法を行ひ、國王をはじめ文武の群臣們、立定身に做置き、師父を馬に乘せて、遠く數百里を急ぎ、然して法を解饒さば、國王も群臣も漸々に歸去るべし。是渠が命を助け、師父も又恙なく、是を號て假親脫網の計策とす。豈萬全の方便ならずや」三藏大いに懽喜、再三行者を謝し給ふ。此時驛丞來り、「國王自親御迎に出で給ふ。唐御弟早く准備あるべし」と告げければ、三藏三個の徒弟と俱に、迎陽館を出で迎へ給ふ。國王衆位の女官を引領て、輦に駕て來り、四個の前に進み、「那か唐御弟なるぞ」。大師指ざして、「錦繡の衣著

たる者便ち是なり」女王熟々伺ひ看に、果然三藏一表の人物にして、其相貌尋常ならず。女王心中大いに讃賀び、三藏の手を拿つて曰く、「御弟龍車に登り、金鑾殿に到り、我と配合の禮を做し給へ」三藏は戰々競々、心中酒に醉ひたる如く、忙然として在座しけり。行者一邊に是を見て、「師父然までに謙退し給ふな。皇后と俱に疾輦に駕り給へ」と勸めければ、三藏沒奈何、懽善しき面貌を做して、女王と俱に龍車に駕給ふ。文武の女官是を見て、列位花眼笑形勢にて城中に歸り入る。行者が輩三個は、馬を牽き行囊を荷擔ひつゝ、五鳳樓の下に到る。此時殿中嚢々わたり、「今宵倖ひ良辰なれば、女王唐御弟婚姻を做し給ひ、時日黃道吉日なれば、御弟を皇帝の位に卽け奉り、改元を行ふべし」と先堂中に樂を奏し、左の方は素莚を設け、右の方は蘭莚を連ね、文武の女官悉く來りて席に着き、三藏と女王を禮拜す。行者が輩三個をも、左の方の莚席にて萬般と欵待しつゝ、君臣伸眉の歡宴は、寔に贍しくぞ見えにける。斯て酒も闌酣に成りける時、三藏女王に向ひ、「快く關文を査勘め、三人の輩を西天に送り給へ」女王是に遵ひ、「關文を拿來れ」と命じければ、行者則ち關文を捧ぐ。女王是を排き見に、上首唐王の寶印あり。其次は寶象國、烏雞國、車遲國の寶印を連ねたり。國王三藏に對ひ、「關文の中に怎麽三個の御弟子の姓名は記さゞるや」三藏答へて、「渠等原來唐朝の人物にあらず。皆是路上弟子にして召領れ來れり。此故に姓名を寫著めざるなり」女王聞きて、「然あらば我三個の姓名を寫著候はん」と云。三藏曰く、「陛下奈何も善く計ひ給はるべし」此時女王筆を採りて、「悟空、悟能、悟淨」と三個の名を記し、華押を寫竟り、行者に遞與し給ひければ、行者是を請取て後女王を拜し、別を告げ奉る。女王金銀若干を賜り、路の盤纏を助けんと爲給へども、行者敢て是を受けず、三個とも疾打扮ちければ、三藏女王に向ひ、「萬望は陛下、貧僧と俱と他們を城外まで送り給んや。貧僧能々分付けたき仔細あり」女王謀計とは努にも知ず、「御弟の詞理なり」とて頓て鳳輦を備へて、三藏と俱に打駕、城の西門を出て遠く送るに、三個の徒弟鳳輦に向ひて曰ひけるは、「女王遠く送せ給ふな。我儕爰にて別れ奉らん」と云へば、三藏急に輦を飛下り、鳳輦に打向ひ、「陛下は是より還り給へ。我儕は皆西天に赴くべし」と云へば、女王聞いて大いに驚き、色を失ひ給ひ、「唐御弟怎麽異心し給ふぞや。誰かある彼把止めよ」と宣ふ處に、立地一陣の旋風颯と發り、那里よりか一個の女趕り出で、「唐僧、儞と我と風月の情を樂まん」と云も敢ず、三藏を爬摟み、空中に飛昇り、踪跡もなく失せたりければ、行者は豫ての思惟大に違ひ、「師父は那里へ行給ひしや」と叫びければ、悟淨が曰く、「唯今の女が、風を發し挾ひ行きたり」行者聞きも敢ず、「儞等早く追趕よ」と云ふより疾く、雲に打乘り、

琵琶洞の女怪と三藏搦去

空中遙に昇りければ、八戒悟淨も引連いて雲に飛乘り、那里ともなく追行きける。彼女王を上首、衆位の女官等、大いに驚き呆臉呆、天を拜し、「此唐僧等は、寔に是白日昇天の羅漢なり。我們眼ありながら、尋常の僧徒と思ひ、萬般心を費しける社愚にて有けれ」とて空々と城中へ還りけり。

○色邪淫ニ戲唐三藏一　性正修持不レ壞レ身

却說行者が輩三個は、虛空に騰り、霧を踏んで伺ひけるに、彼旋風西北を指して渦捲きゆく。三個是を追驅けて一座の高山に到りける時、立地風息み塵靜りて、妖怪が行方を知らず。行者們是を見て、此高山必ず妖怪の巢穴ならんと、雲を下りて尋見るに、一邊に一箇の青石あり、其形屏風のごとく、光明ありて美しき事云はん方なし。這後邊に兩扉の石門あり、上に六箇の大字を鐫りて「毒敵山琵琶洞」と記したり。行者曰く、「爾們此處に在つて伺ふべし。我洞の裡に入りて師父を尋ぬべし」とて蜜蜂兒と變じて門の縫中鑽より潛り入り、門を越ゆる事二重にして、一箇の花亭あり。爰に一個の女怪座し居て、左右には許若の丫髻ども隨從ふ。行者は花亭の櫺子に止り居て是を見に、亦兩個の蓬頭の女、兩盤の熱騰々と立つ麵食を捧來れば、彼女怪丫髻を近著けて、「快く唐僧を伴ひ來れ」と分付ければ、丫髻ども後の房に到り、三藏を扶け出し來る。彼の女怪が曰く「唐御弟、心を排鬱げて樂み給へ。我が這里は西梁女國の富貴奢華には及ずと雖も、其實は淸閑の地にして、念佛看經には寔によし。我御弟と百紀偕老の夫婦とならば、豈心樂しからざらんや」三藏更に答をなさず、彼女怪打笑ひ、「我御弟の葷を喰はざるを知が故に、葷と素との酒敲を准備せり。御弟何れなりとも心に任せて受用し給へ」三藏想ふやう、我今此女怪に接禮もせず、物も喰ず居らば、必定我を害すべし。其上徒弟們未だ消息無ければ、身を遁るべき道なし。我且忍びて渠が機嫌を伺ふべしと、女怪に向ひて、「吾今女菩薩の誠心を感ず。貧僧は素淨の食物を用ふべし」女怪三藏の詞を聞きて心の中大いに懽喜び、一個の砂糖饅頭を把り二個に劈破て三藏に與ふ。三藏是を把りて喰し、亦一箇の肉饅頭を取り女怪に與ふ。女怪笑うて曰く「御弟怎麽ぞ饅頭を割らずして我に與ふるや」三藏合掌して曰く「我原來桑門の身なり。那ぞ葷を破らんや」此時行者櫺子の上に在りて窺ひ居たるに、女怪萬般に婬媚の形相を做すにぞ、怕らくは師父の眞性を亂されんかと躊躇み、打忍りかねて本相を現し、鋏棒を掣げて走り蒐り、「業畜无禮を爲す事なかれ」と大聲喝道すれば、女怪驚き、口より一道の烟を噴出だし、唐僧を原の處に推込みて、一柄三股の戟を把りて跳り出で「憊賴

の潑猿、いかんぞ恣に我家に入りて我容貌を伺しぞ。老娘の一爻を見せん」と戟を振つて打つて蒐れば、行者鐵棒を把つて架住めさんぐ〳〵に戰ひ、竟に洞の外に出づれば、八戒是を見て、急に釘鈀を持つて突んとす。女怪八戒が來るを見て、忽ち身を聳かして倒馬毒を使ひいだし、行者が頭を一度突くに、行者「苦呵」と响喨んで敗陣し、立地に逃出だす。八戒も亦堪咤て、身後に連いて逃失せければ、女怪は其儘洞の裡へ歸りける。行者は遙に逃行きて頭を抱へ眉を皺めて云ひけるは、「怪しいかな。渠が兵器一度頭に中ると要準、其疼む事堪へがたし。抑〻奈何なる兵器なるや」八戒笑ひて曰く、「大聖半日云ひ給ふは、我頭は八卦爐中に煉鍛へたる所にして、金鐵と雖も疵著る事能はずと、自慢して居給ひしが、今怎麽僅の疵に困苦むや」行者曰く、「怎何も我頭は、自ら煉鍛へたる處なれば、刀斧槌劍と雖も傷損ふ事能はず、雷公落羅りたりとも破るべからず、火も亦燒く事能はず。知らず、今日此妖怪、奈何なる兵器有りてか我頭を破りぬるや」悟淨が曰く、「大哥頭疼み、日も亦晩に及ぶ。師父の下落計り難し」行者が曰く、「苦からず。師父彼洞裡に在りて性命更に無異なり。我們今宵は爰に寐して天明るを待つて再般穿鑿すべし」と、遂に三個打連れて、其夜は山の脚下に安歇みけり。此時女怪は、小的們を呼びて、前後の門を緊く關し、又伏房に燭を掌り香を焚き、百種の酒殽を安排けて三藏を領出し、幾句と酒を勸めけれど、三藏は更に口を開かず、眼を塞ぢて心裡に經を念へて、惘然と座し給ふ。女怪は十分に嬌媚の形を顯し、三藏を抱きて、「儞と交歡して慰まんに、快く閨房に入り給へ」三藏は他が怒に逢はん事を怕れ、沒奈何閨房に入つて座し給ひ、頭を低れて一言も交へず。女怪淫を求めて、萬般と雲雨の情を說出し、半夜に到るまで纏ひ逼れども、三藏漠然として、見ることもなく聞く事もなく、一念更に動かざりければ、女怪竟に怒を發し、小的們を呼び繩を拿來らしめ、三藏を猱猴模樣にして廊下の上に釣揚げおき、燈光を噴滅して、其身は閨に退きけり。斯て夜も明方に到り、行者は山の麓に起出て、「我頭の疼些少愈去成りたれば、復八戒と俱に彼處に到り、師父の靜動を伺はん。悟淨は昨日の馬と行裝を拿來つて爰にて待つべし」と、頓て八戒と打連れて、彼石屏の下に到り、行者八戒に向ひ、「我且裡に入りて、昨夜の次弟を師父に訊ぬべし」と身を變じて蜜蜂兒となり、門の縫裡鑽より潛り入り、花亭に到り伺廻しけるに、彼妖精、半夜睡らざりし故未だ起出でず。行者廊下の邊に飛行き見れば、爰に師父を吊揚げ置きたり。頓て師父の頭の上に住りて、「師父」と一聲呼びければ、三藏是を聞いて、「悟空疾く我命を救へ」行者聞いて、「師父、昨宵は好事の候ひしや。委く說話り給へ」三藏牙を咬んで曰く、「吾死とも然樣の事を做さず。彼女怪、昨宵吾に纏ひ著き、

迫る事半夜なりと雖も、我曾て衣帶を解かず身を汚さず。此故に他怒を發し、斯の如く綑縛めたり。爾萬望この難爲を救ひて、我に經を把らしめよ」此時女怪睡を覺し、經を把らしめよと云ふ聲を聞著け、臥房を轉び出來り、「唐僧我と夫妻の情を做ず、何の經を把らんとて誰と說話するや」と曰ふ。行者慌いて急に門外へ飛出で、本相を現し八戒を招き、「師父更に身を汚し給はず」と前宵の動靜を語りければ、八戒聞いて、「罷了々々。個眞の和尙なり。我師父を救はん」と彼獸子粗鹵に釘鈀を揚げて石門を突破らんとす。小的們是を見て、急に跑進みて斯と告げければ、女怪聞いて大いに怒り、乍ち戟を把つて躍り出で、「潑猿野彘、怎麼ぞ我門を破りたるぞ」と罵りければ、八戒大いに怒り、「濫淫の賤貨、我師父を困陷れおき、却て口剛く罵るや。早く師父を送り歸さば、儻が一命をも饒すべし」妖怪ますゝ怒り、忽ち妖法を行ひ、鼻より火を出し、口より烟を噴出し、戟を擧げて八戒を刺んとす。八戒釘鈀を以て打對ふ。行者も鐵棒を帮げて是を援け、三四合も戰ふ時、妖怪八戒が唇を倒馬毒を用ひて刺しければ、八戒阿と叫びて口を喎め、疼みを忍びず逃跑りければ、行者も俱に敗陣し、嚮より悟淨が待居たる處へ逃歸る。八戒は大いに唬び、「不能贏他、此疼み堪難し」と臥轉びて苦みける。此時一個の老嫗忽然と現れ來る。悟淨行者に向ひ、「後邊に來る老嫗は何人ぞや」行者頭を回して是を見るに、

這老嫗の頂の上に祥雲有つて蓋ひ、左右に香霧ありて身を罩みければ、行者急ぎ叫びて、「爾們快く來つて觀音菩薩を拜すべし」八戒悟淨慌得ふためき、合掌して拜をなす。井祥雲を踏んで空中に立ち眞像を現し給ふ。行者空中に到り、拜告して曰く、「老孫唐僧を扶け西方へ赴く處に、今爰に妖怪有りて、怪き兵器を用ひ、老孫が頭を破り、八戒が唇に傷けたり。寔に是を收めがたし。今僥倖に菩薩を拜す。萬望は這妖怪を收め、我師父を救ひ給へ」菩薩聞き給ひ、他は是蠾子の妖精にて、人を傷損ふものは尾上の鈎子なり。是を倒馬毒といふ。吾も亦他には近進き難し。今倘唐僧を救はんと思はゞ、快く東天門の裡、光明宮に到り、昴日星官に救ひを求めば、能是を降伏せん。仔細は告行ふ事難し」と曰ひて、乍ち颯と金光を放ち、南海に歸らせ給ふ。行者雲を下りて、八戒悟淨に向ひ、「吾菩薩の告に任せ、今より光明宮に到り、昴日星官を賴むべし。爾們爰に在りて少時待てよ」と云捨てて忽ち觔斗雲に打駕りて、飛ぶが如くに東天門に走り行き、光明宮に到り、昴日星官に見えければ、星官悟空を見て、「大聖何幹有て來り給ふぞ」と問ひ給ふ。行者曰く、「老孫唐僧を保守りて西天に行んと爲るに、西梁國にて妖怪に阻礙げられ、觀音菩薩の告に依りて、態爰に參り候ふ。萬望は星官、彼妖怪を捉へて、我師父を救ひ給へ」星官見を聞きて、「然らば吾行きて助くべし」と曰ひ、頓て准備を整へ、行

昴日星鼠
亡女怪

者と俱に毒敵山に到り、八戒悟淨等に見え給ふ。八戒唇を喎め、「星官无禮を免し給へ。疾身に有りて禮を行ふ事能はず」と云ふ。星官聞きて、「何の病有りや」と問ふ。八戒答へて、彼妖怪に疼められし事を語りければ、星官聞きて、「我是を治愈得させん」とて手を以て唇を撫で、口より仙氣を噴蒐け給へば、八戒立地に疼を忘れ、大いに懽喜び、幾般か拜謝しける。行者が曰く、「老孫昨日妖怪に頭を破られ、上首は戚疼み候ひしが、今は却て痒くして堪へ難し」星官是をも治し給はんや」星官又行者が頭を一度撫で、口より仙氣を噴懸け給へば、乍ち餘毒退き全快成りけるにぞ、行者只管伸眉びける。夫より星官は、行者と八戒に命じて、「爾們兩個、彼妖怪を僞引出せ。我は門外に隱居て、渠が出るを待つて降伏すべし」と曰ふ。行者八戒心得たりと、兩個一齊に門裡へ討入りければ、彼妖怪是を看て、忽ち戟を把て立對ひ、十合ばかり戰ふ處に、妖怪又倒馬毒を用ひんとす。行者八戒是を悟りて、門外へ逃出せば、妖怪續いて、鋼を採り追驅け來る。此時星官本相を現して妖怪に立對ふに、是一隻の大公雞なり。一聲喚ぶと見えけるが、妖怪乍ち本相を顯し、其大いさ琵琶ほどの蝎虫となる。星官又一聲喚ぶと齊しく、妖怪總身麻れて倒れ臥す。八戒釘鈀を把つて微塵に突碎き殺しけり。斯て星官行者に向ひ、「今は用なし、我は皈るべし」と曰ひて、忽ち金光を放ち、雲に駕りて別れを告げ、東天門に還り給ふ。行者が輩三個は、天に向ひて拜謝し畢り、再び洞中に討入りければ、衆部の女們跪下いて稟すやう、「我們は更に妖怪にあらず。悉く彼妖怪が西梁女國より捉へ來り、了髻と做し使ひ候なり。萬望は一命を助け給はるべし」とて一齊に歎きける。行者、是を見るに、果然妖怪の氣一向に有らざりければ、個々命を助け、大家女國へ皈らしめ、頓て師父を救ひ出し、斯て一把の火を放いて、此洞を燒盡し、終に西方に向ひて進發しけり。

三編　卷之二

○神狂誅草寇　道昧放心猿

斯て三藏師徒は、琵琶洞を出てより、只管西に向ひて行くに、若干の日數を經て亦淸明の時節に逢ふ。一日平地にて更に山なき處に到り、個々腹餓ゑて路不行果。疾く人家有處に到り齋を吃すべしと、八戒釘鈀を擧つて馬を追へども更に行かず。行者鐵棍を取出して、一聲叫ぶと見えけるが、馬は俄に駈出して、其疾き事箭の飛ぶがごとし。三藏馬を扯止むれども更に止らず。沒奈何鞍に口咬つきて行き給ふに、此馬一息に二十餘里を馳行きて、漸々に止りける。三人の徒弟未だ追及かざる處に、乍ち一聲の囉を響すよと見えけるが、道の一邊より、三十人計の剪逕ども、個々鎗刀を把て躍出で、三藏を捉圍み、其中より兩人の大漢進み出で、三藏に對ひて云ふ。「汝沙門なる故、一命をば免すべし。盤纏あらば遞與へて通れ」三藏馬より飛びて下り、蹲跪いて云ひけるやう、「貧道は東土大唐より西天に到り經を求るの僧なるが、長安を出しより、星を重ね月を積んで、漸々に此處に來る。今は盤纏とては些しもなし。願くは大王貧道を赦して西方へ行かしめ給へ」剪逕ども嘲笑ひ、「爾仇言を吐く事なかれ。盤纏なくば偏衫を脫ぎ、馬をも俱に遞與してゆけ。然なくば汝を殺すべし」三藏今は事急に及んで、畢竟なく謊話りて云ふやう、「盤纏有りといへども、皆徒弟等に持せ置きたり。跡より渠們が來るを待つて、盤纏を集めて大王に奉らん」偸夫ども是を聞いて、「然ば夫を待つべし」とて繩を以て三藏を綑め、路の一邊にある樹の上に釣上げ置きて、爰彼首に引隱れて待居たり。此時行者師父を追ひて來り、此體を見て大に謊き駈けよりて、「何故に斯綑縛られ給ふや」と問ふに、三藏事の仔細を語り給へば、行者聞きて、「造化々々、よき賈こそ出來たれ」とて、忽ち身を變じて小和尙となり、肩に包袱をかけ、聲を發して歎き、「師父何ぞ斯綑縛に逢ひ給ひしや」と叫びければ、剪逕ども聞きつけて走り出で、行者を把圍み、「爾疾く盤纏を出して吾們に付與すべし。然なくば此處を通すべからず」行者曰く、「何れも吆喝給ふ事なかれ。此包袱の中には若干の盤纏あり。殘りなく進すべければ、疾く師父を助け給へ」偸夫ども大に懽喜び、三藏が綑縛を解きければ、三藏鬧はしく馬に飛乘り、原來し道へ逃歸る。行者謊得て、「道が違ひ候」と呼りつゝ逃げんとす。剪逕ども也扯止め、「爾趦る事なかれ、疾く盤纏を出せ」行者笑て曰く、「爾等盤纏を求むるならば、是を三つに分けて、汝等二人と吾と三人にて是を把んや」剪逕等聞きも敢ず、「惡き小禿子が言語か

な。若許若の金あらば、些は汝にも與ふべし」行者曰く、「倘又盤纏の數不足ならば、儞等かねて剪逕して盜貯めたる金子有るべし。夫を出して吾に與へよ」盜賊ども大いに怒り、「此小禿子不悟死生、却て吾們が物を拿らんとするや。唯打殺せ」と詈りつゝ、忽ち棒を以て行者が頭を七箇八箇打ちけれども、行者しらぬ風情にて立居たり。剪逕ども大に驚き、「此小禿子が頭の堅き事こそ心得ね」と二三人立かゝり、一同に打けれども、行者些も不管して、「個々少し歇み給へ。吾又個々に贈る物あり」とて、耳の裡より綉花針を把出し、「我們沙門の事なれば、盤纏とては持來らず、唯此針を進すべし」剪逕ども怒て曰く、「裁縫の事を知らず、此針何の要にかせん」行者聞も敢へず、手に取りて一度打振りければ、強大なる鐵の棍となる。偸夫ども呆々掙々、顏見合せて居たりけり。行者曰く、「汝們功果あしく某に出逢ひたり。我一棍を吃はすべし」とて進み寄りて、一人の大漢を唯一撲に打殺す。偸夫ども大いに怒り、遁すまじとて鬨きけるを、行者物の數ともせず、また一棒に今一人を打殺せば、多くの盜人連忙騷ぎて、四方に散つてぞ逃失せける。此時八戒悟淨、三藏に出合ひ事の仔細を聞きて、行者が未來らざるをあやぶみ、此處へ尋ね來り、此體を見るよりも急ぎ三藏の許へ逃歸り、行者が人を打殺したる事を告げければ、三藏聞いて大に嚇き、行者が强惡なるを詈り、口の中に獨言きながら、馬を進めて來り給ひ、

此死人を見れば、淋漓として血の流れ倒れ臥たる在さま、心に忍び兼ね給ひ、八戒に分付けて路の一邊に埋めさせ、怒を含みて行き給ふに、向の方に一構の房衙あり。三藏鞭を持つて差して曰く、「吾們今宵は彼處に至り、宿を借て安歇べし」とて頓て門前に到り、馬より下り給へば、一人の老人趦り出て、三藏を見て、「那里より來り給ふ人ぞ」と問ふ。三藏の曰く、「貧道は東土大唐より西天に到り經を求めんとするの僧なるが、今烏既に天暮に及ぶ。願くは一宿を恩惠給へ」老人行者が輩三人を見て大いに驚き、偖は妖精來れりとて、連忙く逃入らんとする。三藏是を扯さとゞめて曰く、「施主驚き給ふ事なかれ。彼三人は吾徒弟にて、形は醜陋しと雖も、亦更に妖精にあらず。管ず心を安じ給ひ、一宿を免させ給へ」此言を聞いて老人漸々に落著、「然ば此方へ入り給へ」とて四人を裡に請じ入れ互に禮了りて齋を侑め百般と接待ける。三藏老人に對ひて姓名を問ひ給ふ。老人答へて、「某が姓は楊氏なり」三藏また、「令郎ありや」と問ひければ、老人が曰く、「一人の愚息あり。二人は孫にて今尚幼く候」三藏令郎に見えたきよしを曰へば、老人が曰く、「渠に逢ひ給ふとも、禮を知りさふらはず。小姓命苦くして善らぬ子を持ち、渠平日に家にあらず」三藏の曰く、「那方に行て活計を爲し給ふや」老人大息を繼ぎて曰く、「過業の爲外に在る正道の子なりせば、那て歎き候はんや。專ら家を打ち人を殺し、火を放

ち財を偸むを常の業とす。尤交る友多しといへども、悉く人倫の道を知らず。個々狐狗黨の類なり。五日向に家を出て今に歸り候はず」と云ふ。三藏心裡に思ふやう、怎的悟空に殺されしは、渠が息男には有らざるかと、密に悲み給ひけり。斯て揚老は、家の後邊なる園の内に草堂の有ける處へ、四人の者を伴行ひて、此裡に安歇せけり。

斯る處に、揚老が一男、大勢の兇性どもを引領れ、四更の頃に到り家に歸り、「吾們忒だ飢ゑ疲れたり」とて亂嚷き炒鬧ぎて、妻を起し飯を焚せ、自ら柴を取來らんとて後園に到り、三藏の白馬を見付け出し、妻に向ひ問ひけるは、「今後園に有る白馬は那里より來りしぞ」妻が曰く、「是は東土大唐より西天に到り經を取る和尚の白馬なり。黄昏の頃爰に來り宿を求め給ふを、公婆草堂の裡に伴ひて安歇せ置給ひぬ」と語るを聞きて、頓て大勢の群黨に向ひ、掌を拍て大に笑ひ、「讐今我家に在り」群黨是を聞いて、「讐とは何者ぞや」揚老が男の曰く、「今日我頭兒を打殺せし和尚、我家に宿を借り、草堂の裡に在りて熟睡たり。我儕個々飯を吃し了らば、一同に手を下して頭兒の仇を報ずべし」群黨の者大いに懽喜、各自准備をするなりけり。揚老は物呼喝きに眼を覺し、密に此動靜を聞きて驚き、頓て後園に到り、四人の者を動起し、密に此事を告げて、背門の扇を排き、「長老早く遁れ給へ」と云ふ。三藏は是を聞いて大いに驚き、三人の徒弟と俱に、揚老に拜謝して、後門より遁れ出で、道を急ぎて落ち給ふ。然るに撒潑ものどもは、飯を吃し了りて後、一同に拔列れて艸堂の裡に伐つて入り、見れば人影更になし。其首よ爰よと尋ぬる間、後門の開きたるを見つけ、「偖は爰より逃出でけん。夫遁すな」と言ふより早く、関を揚げてぞ追蒐けたる。三藏は遙に落延び給ひしが、乍ち後より二三十人の者どもが鎗刀を把つて追來るを見て、怎麽はせんと怕れ給へば、行者曰く、「師父氣遣し給ふな。老孫行て追皈し候はん」三藏聞いて、「爾管ず人の命を破すべからず。只渠們を愕眙して追返すべし」行者急ぎ鐵棍を把て回頭し、偸夫どもを悉く打倒す。此間に三藏は、八戒悟淨と諸俱に、遙に逃延び給ひけり。行者は大勢を打伏せて、疵負の偸夫に向ひ、「揚老が男は何れぞ」と問へば、「黄なる衣服を着たるは則ち揚老が一男なり」と答ふ。行者渠が刀を奪ひ取り、忽ち首を伐落し、手に提げて三藏に追及き、「是こそ揚老が男の不孝的が首にて候へ」とて見せければ、三藏大いに驚き、行者に向ひ、大いに叱つて曰く、「爾此潑猿、昨日も兩人を打殺しぬ。我汝が不仁なるを心中に恨むる處に、今宵揚老が房に到り、渠が齎を受け舍を借り、後門を排きて我一命を救ひたり。假令渠が一男奈何計りの不肖ありとも、我に管る事に有らず。那ぞ漫りに恩を忘れ、渠が首を斬りたるや。汝が如き者、弟子とする事協ふべからず。趂早に皈るべし。唯今爾

に罪をあたふべし」とて緊箍咒を唱へ給へば、行者頭疼みて堪へがたく、地頭に倒轉びて、「師父念ずる事なかれ。說言あり」と叫びけれども、三藏更に聞容れず、「儞許多の人を殺し、天地の和氣を破る。那ぞ今免さんや」と口も止めず唱へ給へば、行者は面色赫く眼腫れて、恨苦堪へがたく、「念ずる事なかれ。我今皈り去るべし」とて乍ち觔斗雲に打乘りて、去方知らず成にけり。斯て三藏は、八戒に命じて、揚老が男の屍を尋出し、首を繼せ、路の一邊に埋めさせ給ひけり。

○眞行者落伽山訴苦　假猴王水簾洞謄文

却說孫行者は、三藏に追歸され、空中に立つて沈吟するに、我今花果山に歸らば、眷屬們に笑るべし、亦師父の方に行かば、緊箍咒を唱へられん事兢しく、怎麽はせん、と立煩ひ、多時考へしが、先南海菩薩の方に赴き、此事を訴ふべしと、夫より急ぎ南海に到り、紫竹林中に赴き、寶蓮座の邊に寄りて菩薩を拜し、身を倒し聲を發つて大いに歎く。菩薩、善財童子に命じて、是を援け起させ給ひ、「悟空、何の勞しき事有て斯のごとく歎くや。備に仔細を語れ。我儞が爲に恨苦を救ひ、孽を消滅すべし」行者、三藏に追はれたる事を語り、「老孫唐僧を助け西天に赴くの路上、身を捨てて妖魔を除き、正果に歸せん事を求むる處、彼長老恩に背き義を忘れ、老孫を追出し、更に黑白分ちがたし」菩薩曰ひけるは、「儞神通廣大なる身として、何事に恨苦みて偸夫を殺せしぞや。彼唐僧一道に善心を取り、決して人命を輕んぜず。我今公道に論ずるに、都て儞が不善なり」行者が曰く、「假令老孫些計りの不善事ありとも、功を以て罪を折き免し給ふべき事なるを、斯の如く追放たれたり。萬望は菩薩慈憫を垂れ給ひ、緊箍咒を唱へ緊箍を拔せ給ひ、老孫を水簾洞に歸し、性命を養はしめ給へ」菩薩笑つて、「昔日如來我に緊箍咒を授け給ふ。未曾て緊箍咒を知らず。等、儞が爲に、唐僧の行末如何なるや、是を伺ひ見るべし」とて蓮臺の上に端座し給ひ、三界に心を運び、惠眼をのべて遙に宇宙の廻りを見給ひ、少時して宣ふやう、「師父早晩身を破るの難爲あり。遠からず儞を尋ぬべし。儞多時此處に在つて待つべし。我唐僧に自說して汝を歸し、諸俱に經を把らせ正果に到らしめん」行者是を聞いて、沒奈何菩薩の御傍に止りて居たりける。

却說三藏は、行者を追返し、八戒悟淨と俱に五十里計り西に進み給ひしが、三藏の曰く、「吾今腹中甚飢ゑたり。儞們何處へなりとも行きて齋を求め來らんや」八戒が曰く、「此邊齋を求る處候はず」三藏聞いて、「倘齋を求る處なくば、水にても取來れ」八戒が曰く、「師父且焉より